

か。是。れ。佛。法。眼。云。く。汝。は。是。れ。慧。起。と。甚。の。相。い。辜。負。す。る。處。か。あ。ら。ん。見。ず。や。雲。門。道。く。擧。す。る。に。願。み。ざ。れ。ば。即。ち。差。互。す。思。量。せ。ん。と。擬。せ。ば。何。の。劫。に。か。悟。ら。ん。と。雪。竇。後。面。に。頌。し。得。て。妨。げ。ず。顯。赫。なる。こ。と。を。試。み。に。擧。す。看。よ。

【字解】一。啐啄同時。雪峰和尚の法を嗣がれた鏡清道愆禪師は常啐に啄の機を以つて後學に開示せられたと云ふ有名な因縁があつて此の百則の中にも入つて居ることであるが、啐は鷄が卵を温めて孵化させる時に、已に卵の中の子が殻を破つて出やうとする時頃からコツ／＼とつゝことであつて、其の時に自分の時間もたがへず母鳥が外からもコツ／＼とつゝき破るのが啄である。其の啐啄同時であるのを禪宗の師家と參學の弟子との間に喩へて啐啄同時の機と云ふことを申して、例へば釋尊が花を指したのを迦葉が見て莞爾として微笑した。此の間に分厘の隙もない即ち啐啄同時である。此の機合が得られてこそ門下の學人を殺さうとも生かさうとも悟らせようとも迷はせやうとも自由自在に働くことが出来るのである、そこを啐啄同時底の用と名ける。

二。胡の種族。佛の種子、佛の種族と云ふことで釋迦佛は印度の人であるから支那人からは胡人と稱する。そこで達磨のことを碧眼の胡僧など、云ふてある。
三。則監院。金陵報恩院の玄則禪師のことで、監院は或は監寺、院宰、主首など、稱して禪院の事務を總管する役僧即ち今の執事長と云ふ位の職位である。玄則禪師は法眼の會下に在つて清涼山の監院をつとめて居られたものと見える。

四。青林の處に於いて箇の入頭あり。青林は洞山第三世の青林師慶禪師で洞山大師の法を嗣いだ方であるが、傳燈錄や會元には青峰和尚に見みへて箇の安樂の處を得たりとあるから、青林和尚の法孫に當る青峯の義誠禪師の會下に在つて見性をしたと云ふ方にも見える。時代から云ふと青峰義誠の會下に在つたと見える方が穩かである様に思はれるから青林は青峰の

峰の誤りと見るが宜しからうと思ふ。

五。不憤して便ち起禪して江を渡つて去る。不憤は論語に憤せずんば啓せずとある不憤で胸中の平かならざる形である。起單は單と云ふ禪堂で坐禪をする席を起つことであるから、即ちむつとして其の座席を立つてノソ／＼と出かけたものと見える。

六。所謂る彼れ既に瘡なし之れを傷むること勿れとなり。維摩經の弟子品に維摩伽富樓那に告げた言葉とした見へてある文である。

七。箭鋒相拄ふと。石頭大師の參同契に事存すれば願蓋合い理應すれば箭鋒拄ふと云ふ文があるが、あれと同じ意ぞゆはゆる箭を以て鋒を拄ふと云ふ味である。

八。五位君臣四料簡。五位君臣は曹山の五位君臣の圖と云ふがあつて。(一)○正中偏：君位。(二)○偏中正：臣位。(三)○正中來：君親臣。(四)○兼中至：臣向君。(五)○兼中到：君臣合と云ふが之れである、四料簡は即ち臨濟大師の四料簡で有る時は人を奪つて境を奪はず。有る時は境を奪つて人を奪はず。有る時は人境俱に奪ひ、有る時は人境俱に奪はずと云ふが之れである。詳しくことは臨濟錄の講義にゆづることとする。

九。當陽に便ち透る。明歷々露堂々分明に透得すると云ふ。

一〇。韶國師。天台山の徳韶國師は初め投子山の大同禪師に見みえ其れより龍牙の居道禪師疎山の匡仁禪師と漸次諸大德を遍參して遂に法眼の會下に連なり爰で始めて大悟徹底をせられた。

一一。頂相。偶や頌のことである。

一二。通玄峯。天台山の中に在りと云ふ。

第五節 類則提唱

其一 丙丁童子

僧問^ツ法眼^ニ如何^{ナルカ}是佛^ニ。眼云^ツ丙丁童子來^ツ求^ム火^ヲ。下語云^ツ百花春到^ツ爲^レ誰開^ル。

丙丁童子とは火の神なり。火の神か何事に火を求めて何にせうぞ。此れは道理もないことを云ふたぞ。道理のないことを云ふて無心を爲人したぞ。無心こそ佛よ。百花春到爲誰開と云ふも、花は誰の爲めにも開かぬ、只無心にして開くと云ふて無心を爲人した句ぞ。誰れが爲めに開く云ふ言葉について爲人したものだ。先師の云く、只爲人とはかり云ふと、言葉に就いて爲人と云ふと差別あり。たゞ爲人と云ふは體をあらはして見せたを云ふ。喩へば和盤^{ワバン}推出^{イッサイ}す夜光^{ヤクワウ}の珠^{タマ}と云ふの類なり。珠と云ふが本分の體をあらはしたものだ。又無孔^{ムクウ}の鐵鎚^{テツチ}などの類なり。槌か體ぞ。語に就いて爲人すと云ふは、百花春到爲誰開の類ぞ。語の中に無心爲人の心はあれども、キラリと體をば云いあらはさぬぞ。又什麼と道ふぞなどのたぐいぞ。根本の上に云はふことはない云へば本分を爲人したれとも、本分の體をばあらはさぬぞ。其の言葉に因んで爲人する心ぞ。又爲人と云ふも直指^{ジキジ}と云ふも畢竟同じことなれども現成を知らしむるを直指と云ひ、本分を知らしむるを爲人と云ふぞ。されとは初心の中のことぞ。直指爲人は同じやうに用ゆるなり。云云。

其二 曹源一滴

僧問^ツ法眼^ニ如何^{ナルカ}是曹源一滴^ニ水^ヲ。眼云^ツ是曹眼一滴^ニ水^ヲ。下語云^ツ百花春到爲誰開^ル。

曹源一滴水と云ふのは何の道理も無い境界ぞ。道理もないことを問ふた程に道理もないことを答へたまでぞ。誰れの爲めにか開くと云ふ處をとかめてならば爲人とも見るべけれども、爰は問も答へも二つながら道理もない境界と見るべし。法眼は常に問頭をその儘おつ取つて答ふるぞ。此れが彼の師の手段なり。

其三 法眼佛々

僧問^ツ法眼^ニ如何^{ナルカ}是佛^ニ。下語云^ツ問得可^ニ始得^ル。

佛と云ふ道理を眞實に知らずして問ふたほどに知らずんば問い得て始めて知り得べしと云ふ也。

眼云^ツ如何^{ナルカ}是佛^ニ。下語云^ツ月白風清。

佛と云ふて何物かあらうぞと云ふ義ぞ。つきかへして如何か是れ佛と問頭をおつ取つて佛と問

ふこそ佛よと云ふなり。佛と云ふて何の道理もない處を現成に用ゐて月白風清と見るなり。

其四 雲門何却悟

雲門道舉不顧即差互如何是舉底。下語云。一喝。

舉するとは一喝ぞ。道理に涉らずして學者を試みた義ぞ。顧みずとは圈續に落ちざる義ぞ。差互はそむきたがうの義ぞ。言ふこゝろは一喝に少しも動轉せず圈續に落ちざるは來機にそむいたものよとほめた方ぞ。又云く、作家相見の上にては一棒一喝がもととなり。殊に當家は喝を本にするなり。一喝の中に色々の境界が具はるなり。舉するは何を舉せやうやら知らぬぞ。之れを稍僧の上から一喝するなり。

擬思量何却悟。下語云。呈伎倆漢。

此は上に異なりて鈍なる方ぞ。言ふ心は一喝の上に道理をつけて思量分別せば未來永却得心得まいぞとなり。棒喝を行するとも少しも首をかへさずして、動轉せぬこそ好き學者なれ。擬議思量せば一期得悟るまいぞとなり。且つ、そう云ふ雲門も亦伎倆を呈するの漢よと二重に云ひかけてした下語ぞ。私に云く、雲門が悪いではなけれども今日の學者から見かけてした下語ぞ。擬議思量する者は閑りに伎倆を呈した者よ。又さう云ふ雲門御自身も伎倆を呈したものと學者と雲

門とにかけて二重に云ふた下語なり。更に又、雲門の天下の人を抑下して棒喝の上にとつて心得されば何れの劫にか悟らんと云ふたは伎倆ぞ。又棒喝の上にとつて何れの劫にか悟らんと云ふた雲門も今日の上から抑下して呈伎倆漢と云ふたのだぞ。

第六節 頌

江國春風吹不起盡大地那裏得這消息 鷓鴣啼在深花裏 別調中豈有恁麼事 三級浪高魚化龍通道一路莫謾 癡人猶辱夜塘水扶籬模壁 扶門傍戶稍僧

【讀方】 江國の春風吹いて起たず。盡大地那裏にか道の消息を得たる。文彩已に彰はる。鷓鴣啼いて深花裡に在り。嗚々何ぞ用ゐん。又風に別個の中に吹かる。豈に恁麼の事あらんや。三級浪高ふして魚龍と化す。道の一路を通ず。大衆を漫することなくんはよし。龍頭を踏著す。癡人尙ほ辱む夜塘の水扶籬模壁。門に接し戸に傍ふ。稍僧何の用處か有らん。株を守りて兔を待つ。

【字解】 一。盡大地那裏にか道の消息を得たる。春風か吹くとか吹かぬとか、そんな消息を何處から得て來たのふ。珍らしき消息、諸人聞きもらすなよ。

二。文彩已に彰はる。雪寶は春風吹いて起たずなど云はれるけれども、春の色彩は既に早や充分に彰はれて來たやうである。

三。嗚々何ぞ用ゐん。何にも鷓鴣の啼き聲を聞いて春の來たのを知るにも及ばぬ、圍悟などそんな聲を聞くもうるさいとある。

云ふ。此の没風流漢奴。

四。又風に別調の中に吹かる。諸人耳を傾けて聞かれよ。又調が替つた様なと云ふて法眼が汝は是れ慧超と答へた妙處を稱揚する。

五。豈に愆慶の事あらんや。そんなこともあるまい。某甲など聞いたこともないと鶴胡だの深花裏たのと云ふ聲色裡に狼敗するのを奪ふ。

六。道の一路を通ず。雪竇亦一路開かれたか、諸人此の路見へてかと氣をつける。

七。大家を設することなくんば好し。元來龍でないものはないに今更魚龍に化するなんて餘り人を馬鹿にした話でないか。故に經には舊來成佛と云ふ。

八。龍頭を踏著す。イヤ其の雲龍は此の通り確かと圍悟が踏み占めて居るぞと自分の見識を述べられたものである。吾々お互も能く足を踏み占めて角で突き殺さぬやうに心掛ければならぬ。

九。扶籬模壁。暗夜に物を尋ねる貌で籬に取りついたり壁を搜つたりすると云ふ。

一〇。門に接し戸に傍ふ。門をのぞいたり戸外に立つたり如何にも物もらいのやうであると言句上に求むるものを愚弄する。

一一。衲僧何の用處か有らん。苟も衲僧たるものが夜塘の水を舐んだりして何にするぞ。歩々黄金の地を歩むべき身の上ではないかと云ふ。

一二。株を守りて免を待つ。諸人それで免をうることはなるまいと云ふ。此の著語恐くは後人の妄添。

【講義】 江國の春風吹いて起たす。江國は楊子江の南の方いはゆる江南と申す所で我國ならば丁度東海道すちと云つた様な春さきならば尤も景色の好い處と見へる。法眼禪師の居られた金陵の

清涼寺は此の楊子江に臨んだところにあるそうだから、そこで江國と云ふたものであらふ。春風吹いてたゝす。春風この春風は吉野や南都の春風でも嵐山や東山の春風でもそんなことはどちらでも好い、只天地の間に充ち満ちて居るが、然しまだ吹き起たぬと云ふ。鷓鴣ないて深花裏にあり。鷓鴣は江南に生ずる鳥で其の形雉の如き鳥であると云ふことである。春風はまた吹き起たぬけれども鷓鴣は面白く啼いて居る。鷓鴣は面白くないて居るけれども深花裏に在つて形は見せぬ。形は見せぬけれども確かに面白く啼いて居ると云ふので、今頃ならばソレ不如歸鳥が啼いて居る。不如歸鳥はないて居るけれども雲の中、森の中に在つて其の姿は少しも見へぬと云ふのも同じことである。此の二句を古來二つに分けて上の句を慧超の間、下の句を法眼の答へと配當して見る説があるけれどもコレハ矢張り圍悟か云はれる通り二句を一句にして見れば好いので、謂ゆる宛轉互回して言外に眞意をくまねばならぬ。兎角此の様な頌はいらぬ口の端にかけて彼れ此れ辨するよりも、靜かに淨窓に向つて聲朗らかに誦すべきもので、かくして初めて頌の眞意が得られるのである。三級の波高うして魚龍と化す。これからの二句は此の本則を邪解するものがあるから、雪竇が老婆心を以てそれを誡められたもので、先づ此の句は即ち龍門の故事を諳つたもので、爰に河南府の龍門府に龍沙山と云ふ山がある。其の昔し夏の名君禹王がソコの瀑布を三段にきり落して水を排除したと云ふところから、禹門とも三級とも云ふのであるが、傳説に毎年

三月の三日桃の節句に鯉が其の瀑布を溯つて此の龍門を透りぬけることが出来れば角が生えて神龍と化つて雲を拏いて上天することが出来る。若し不幸にして途中で力が盡きて透過することの出来ぬものは點額して腮を曝すと云ふことである。今爰ではそれを一僧が法眼の一言下に忽ちに於て豁然と大悟した處を形容して三級浪高ふして魚龍と化すと謠はれたもので、爰等がゆはゆる啐啄同時と云ふところ。如何なるから是れ佛と子鳥の慧超がッ、けば、汝は是れ慧超と母鳥がつく。そこで内因外縁相應して豁然と大悟徹底することになつて其の間實に寸分の隙間もない機合である。痴人尙ほ辱む夜塘の水。既に慧超の魚は神龍となつて雲に乗つて虚空はるかに飛び去つてしまつたことであるに、此の公案の落處を知らぬ思慮分別の痴人どもは、法眼が汝は是れ慧超と云はれたのは、佛と云ふ者は外にはない。そう申す汝が即ち佛よと云ふ意味であるなど、邪解をして、徒らにあの神龍は爰に居るか彼處に居るかなど、龍門の下流の水の中を頻りに捜しもめて居るが、まことに眼のないものほど氣の毒なものはないと謠い收められたものである。夜塘は暗夜の提塘で暗闇に提塘に水をくみに出て居るが、あぶないこと踏みすべつて溺れねばよいがと云ふ意であらう。

第七節 頌評唱和譯

雪竇は是れ作家、古人の咬み難く嚼み難く透り難く見難き節角諸説の處に於いて頌出して人をして見せしむ。妨げず奇特なることを。雪竇法眼の關樞子を識得し又慧超の落處を知る。更らに後人の法眼の言句下に向つて錯つて解會を作すことを恐る。所以に頌し出す。この僧此くの如く問ひ、法眼是くの如く答ふ。便ち是れ江國の春風吹き起たす鷓鴣啼いて深花裏に在り。此の兩句只是れ一句。且らく道へ雪竇の意什麼の處に在る。江西江南多く兩般の解會をなして道ふ。江國の春風吹いて起たすとは、用いて汝は是れ慧超と云ふことを頌す。只這箇の消息たとひ江國の春風も也た吹き起たす。鷓鴣啼いて深花裏に在りとは用いて諸方這の話を商量して浩浩地なること鷓鴣の啼いて深花裏に在るに似て相似たることを頌すと。什麼の交渉か有らん。殊に知らず雪竇の這の兩句只是れ一句なることを。縫なく罅なきことを得んと要せば明々に汝に向つて道ふ、言も也た端、語も也た端。蓋天蓋地。他問ふ如何なるか是れ佛。法眼云く汝は是れ慧超。雪竇道く、江國の春風吹いて起たす。鷓鴣啼いて深花裏に在りと。這裏に向つて薦得し去らば、以つて丹霄に獨歩すべし。爾若し情解を作さば三生六十劫ならん。雪竇の第三第四の句ははなはだ傷慈。人のために一時に説破す。超禪師當下に大悟の處三級浪高うして魚龍と化するが如し。痴人猶ほ辱む夜塘の水。禹門三級の浪は孟津即ち是れ龍門なり。禹帝鑿つて三級となす。今三月三、桃花の開時天地の感する處にして、魚あり龍門を透得すれば頭上に角を生じて鬚鬣の尾を昂げ雲を拏い

て去る。跳り得ずば點額してかへる。癡人言下に向つて咬嚼す。夜塘の水を辱んで魚を求むるに似て相似たり。殊に知らず魚既に化して龍となることを。端師翁に頌あり、云く、一文の大光錢、箇の油糍を買ひ得たり。肚裏に喫向し了りて當下飢ゆることを聞かず。此の頌極めて好し、只是れ太だ拙し。雪竇頌し得て極めて巧みなり。鋒を傷り手を犯さず。舊時慶藏主愛して人に問ふ、如何なるか是れ三級浪高うして魚龍に化すと。我は也た必とせざる在り。我れ且らく備に問はん。化して龍となり去ると。即今什麼の處にか在る。

【字解】 一。節角語詠。 難解と云ふも同じ。

二。若し情解をなまば三生六十劫ならん。 思慮分別を交へ人情を以て此の公案を解決しやうとしたならば、それはとんだ大間違ひ。未來永劫法眼の眞意の分ることはあるまいと云ふ。

三。忒恁傷愁。 雪竇老人誠に老婆心切であると云ふ。

四。聚散。 髮は高髻なり鬢は長鬚なりと云ふからヒゲやタガミのこと、見へる。

五。端師翁。 師翁は俗語にオジイサマと云ふ程のことで尊稱語である。端は舒州白雲の守端禪師で圓悟の師五祖法演禪師はこの人から法を嗣いた人であるから、守端禪師は即ち圓悟の師祖に當る方である。一文大光錢と云ふ頌は嘉泰の普燈錄に白雲端禪師汝は是れ慧超の古則を頌すとして見へてある。大光錢とある大光は年號であるが爰では道箇の本分を指したものである。

六。慶藏主。 名は自慶蜀人であつて圓悟が眞如慧覺禪師に参じた時に同じく會下に在つた人で圓悟とは至つて親密の間柄であつたらしい。大慧の武庫によると藏主は眞如、晦堂普覺等の諸大老に通参し又法雲圓通禪師の室にも入つて叢林の間では廣く其の名を知られて居つた人であるが、惜い哉短命であつたために充分其の名をなされることが出来なかつたやうである。

第八則 翠岩眉毛

第一節 垂示

垂示云。會則途中受用。如龍得水似虎靠山。不會則世諦流布。羝羊觸藩。守株待兔。有時一句。如踞地獅子。有時一句。如金剛王寶劍。有時一句。坐斷天下人舌頭。有時一句。隨波逐浪。若也途中受用。遇知音。別機宜。識三休。答。相共證明。若也世諦流布。具一雙眼。可下坐斷十方。壁立千仞。所以道。大用現前。不存軌則。有時將一莖草。作丈六金身。用。有時將丈六金身。作一莖草。用。且道。憑箇什麼道理。還委麼。試舉看。

【讀方】 會すれば則ち途中受用、龍の水を得るが如く虎の山に靠るが如し、會せざれば則ち世諦流布、羝羊藩に觸れ株を守りて兔を待つ、有時の一句は踞地獅子の如く、或る時の一句は金剛王寶劍の如く、有時の一句は天下の人の舌頭を坐斷し、有時の一句は波に隨ひ浪を逐ふ。若し也た途中受用ならば知音に遇ひて機宜を別ち、休咎を識つて相共に證明せん。若し也た世諦流布ならば一雙眼を具して以て十方を坐斷して壁立千仞なるべし、所以に道ふ大用現前規則を存せず。有時は一莖草を將つて丈六の金身と作して用ひ、有時は丈六の金身を將つて一莖草と作

して用ふ。且らく道へ箇の什麼の道理にか憑る、還つて委悉すや麼試みに擧す看よ。

【字解】一。世諦流布。諦は審實の義であるから道理とか主義とか云ふこと、流布は流行布列で有り様と云ふこと、世俗の有り様を云ふ。

二。羝羊藩に觸れ。易經に出す。羊が垣根に觸れて進退の自由を失ひ難遊せる様を云ふ。

三。株を守つて兔を待つ。韓非子五蠹篇に宋人守株冀復得兔とあるによる。昔宋國の百姓が耕作の爲め田圃に出た時に偶々兔の樹株に突當りて死せるを拾つたので、遂に農事を營むより兔を拾ふ方が利益なりと考へて、日々樹株の傍に至りて兔を待つて居たと云ふことである、そこで此の故事を何か馬鹿げた事があるとその形容に使ふことになつた。

四。金剛王寶劔。金剛を以て作つた寶劔で極く銳利なと云ふことに用ゐる。

五。隨波逐浪。隨機應變と云ふ程のこと。

六。機宜。機は機轉即ち心にチラリと働きの兆すこと。宜は適當で其れを事實に程よく行ふこと。

七。休咎。休は好なり美也でヨイと云ふこと咎はトガでワルキこと。

八。委悉。委は委細でクハシク悉は悉皆でコトゴトクと云ふこと故、スツカリ呑込むと云ふ程のこと。

【講義】此の垂示を五節に分ちて、初めに會すれば即ち途中受用會は會得で合點すること、眞實悟りが開けたことである。悟は吾心であるから吾心是れ獨尊佛とサトルのが悟である、サアこふ悟りて見よ、途中受用で何時何處にあつても自由に御用に立つ。思ひの儘に使つて見ることが出来る、龍の水を得るが如く虎の山に靠るが如し。龍は偉いが水がなくては小蛇にも劣る、虎も猛獸であるが町中へ生捕れては小猫も同様よ、吾々人間、舊來成佛で本來本法性天然自性身と、人々各自具足圓成の獨尊佛であるけれども悟りが開けんでは仕方がない、君子の德に象ると云ふ尊

い寶玉でも荒石の儘では尊さが顯はれぬ、本來成佛の如來様も悟りが開けんでは底下薄地の素凡夫にも劣る、けれども會すれば則ち途中受用と、人々具底の佛性を開顯して見よ、龍の水を得たらん如く、虎の山に靠りたらん如く、自由自在に鬼に金棒と云ふてあいである。此れと反對に、會せざれば則ち世諦流布、悟りが開けんと來た日にはどうであらう、底下薄地の素凡夫、泥溝の蚯蚓、山猫ドラ猫のそれにも劣つて、如何程口に高尚な理論を弄び、身に殊勝げな風をなしても、ソレは世諦流布で世俗の有様であるから更に深みがない、甘味がない、羝羊藩に觸れ株を守りて兔を待つ底の馬鹿サ加減とても青天白日、素面で話せる事ではないぞ、此れ迄が一段で學人の會と不會を論じたものである。次に有る時の一句以下が又一段で、師家爲人の作略と云ふて、師家となりて人を接待する作略を申されたものである。有る時の一句は踞地の獅子の如く。地に踞るの獅子の今將に飛びつかんとする勢いと云ふものは氣力が十二分に備つて居るから如何なるものでも寄附くことは出來ぬ、そこを古人は獅子奮迅と申されてある、祖々の言句もこの通りよ。有る時の一句は金剛王寶劔の如く。正宗の名刀は鐵で製つたものであるが是れはさなくも銳き金剛で作つた寶劔である。金剛は不壞碎破の義であるから、己れに剛く敵につよく、實に向ふ處敵なしで斬れるとも斬れるとも、直向微塵にかざして見よ、須彌も忽ち一刀兩斷。八萬四千の煩惱の惡魔も唯の一言下に殺盡してしまふ。それが金剛王寶劔の作用である、有る時の一句は天下の人

の舌頭を坐斷す。一言も出させず、一句も吐かせず、舌の根を斷ち切り呉れるぞと云ふので此の三句で把住即ち奪つて與へぬところである。然しながら師家の作略は是れのみではない、有る時の一句は隨波逐浪。臨機應變、泣くも笑ふ時の都合よ、千波萬波、散りつ砕けつ明皎々、鑑在機前、千差萬差の手段を取ることである。以上學人の會不會、師家の作略を示し畢つたから、次に第三には師學相見の上互に此事を證明すると云ふ一段で、若し也た途中受用ならば、謂ゆる會する底の者であれば、知音に遇ふて機宜を別ち休咎を識りて相共に證明す、師學互に知り合ふて居る故、何の造作もないことで、機宜も休咎も相互に證する迄のことである。機は機便きびんで心にチラリと働きの兆すこと、宜は適宜で程よく事實に行ふこと。休は、徳を作し心逸するを休と曰ふと申して善也慶也と註し。咎は愆也過也と申して即ち休咎の二字で善惡と云ふ程のことである。若し也た世諦流布ならば一隻眼を具して以て十方を坐斷して壁立千仞なるべし。所謂未だ會せざる底の者ならば、峻峻更に一段を加へて寄り付くことの成らぬ様に接せねばならぬ。そこが十方を坐斷して壁立千仞なるべしと云ふところ。世諦流布と申して理窟や知解を誇りがにふりまはす妄想漢は、未だ會せざる底の素凡夫と申すもの、その素凡夫に接するには素凡夫を接するの作略がある。一隻眼は左右二つの眼の外の一隻眼であるから、縦目横鼻の並大抵の眼玉ではいかぬ、更に一隻眼と右とも左ともつかぬ眼がある。それを摩醯首羅天まがいしゅらてんの伊字三點と申すことぢやが

サアこの伊字三點と兩眼の上更に一隻眼を具して見よ、大用現前規則を存せずで、眼の著け處がかわつてくる。是非も得失も一切悉く掃蕩して知解も分別も理窟も學問もモハヤ用に立たんことをしらしめて見よ、ソコデ始めて眞實眞面目に參禪するものが出来るであらう。而してこれに接するには對機の智愚賢不肖利鈍次第で、大機大用には杓子定規は入らぬものよ。佛祖の作略に規則はない、そこを大用現前規則を存せすと云ふてある。自由自在手任せ次第、有る時は一莖草を將て丈六の金身と作して用ゐ有る時は丈六の金身を將て一莖草となして用ゆ。紫磨金色の丈六の佛身も、野原に茂る草花も融通無碍勝手次第である。且らく道へ箇の什麼の道理にか憑るサー是れ一體どうしたものであらう。何に依つてコウなのであらう、還て委悉すや吞込みがつくか合點がゆくか、爰に雪竇老人の拈提せられた一則があるから試みに擧す看よ。能く氣を付けて看るがよいぞ。と本則に引き合せる。

第二節 本則

擧翠岳夏未示衆云。一夏以來。爲兄弟說話。開口看翠岳眉毛在麼。只贏得暗也落地。和鼻孔也保福云。作賊人心虛。賊然。是賊識賊長慶云。生也。錯就錯。果然。雲門云。失了。入地獄如箭射。關納走在什麼處去。天下關納僧跳不出。敗也。

【譯方】翠岩夏末に衆に示して云く。一夏以來兄弟の爲めに説話す。口を開かば焉くんぞ懲辱なるを知らん。看よ翠岩が眉毛在りや只眼晴も也た地に落つることゝ贏ち得たり。鼻孔に和して也た失ひ了れり。地獄に入ることを射るが如し保福云く賊と作る人心虚はる。灼然。是れ賊賊を知る。長慶云く生ぜり舌頭地に落つ。錯を將つて錯に就く。果然。雲門曰く關。走つて何の處に在つて去らん。天下の衲僧も跳不出。敗也。

【字解】翠巖 明州翠巖の令參禪師と申して雪峯大師の法を嗣いだ人で證號を永明大師と賜つた高德である。保福は漳州保福院の從展禪師で長慶は福州長慶の慧稜禪師。雲門は即ち雲門宗の高祖韶州雲門文山の文偃禪師が三人とも翠巖と同じく雪峯大師の法を嗣いだ人で何で劣らぬ名僧であるから、此の公案は此の兄弟四人の見識を一處にして見ることに出来る面白い則である。

二。夏末。夏と云ふは印度以來佛家の通規として夏期九十日の間即ち四月の十五日から七月の十五日迄、各自に適當な處へ集まつて家に籠つて靜かに修行をする。それを結制とも安居とも雨安居とも或は又夏安居とも云ふことであるが今はそれを略して單に夏と云ふたものである。爰は夏末とあるからモハヤ解制になる七月十五日のことである。此の制度の起りは既に婆羅門教時代にあるのであるから釋尊も又此の制度を採用して成道第一年に波羅奈斯に於いて安居をせられた。安居をする理由は、四分律の三十六卷目に、夏日は天暴雨あり、水大いに漲きり衣鉢、坐具、針筒を漂失し又生ける草木を踏殺し居士等をして草木に命根ありと想はしめ讒嫌せしむる故に居士等に罪を得せしむ。故に今より已去諸比丘は三月夏安居すべしと佛は制し給へりとあるからこれで充分に居わかる。今日でも叢林では嚴重に行はれてある。

三。口を開かば焉くんぞ懲辱なるを知らん。口を開いて舌を動かしたからにはコウ云ふことは申されまい。
四。翠巖が眉毛在りや。コレは佛法を誤まつて説いたものは其の罰で眉毛も鬚も落ちてしまふと云ふ故事があるので、翠巖が一夏九十日の間諸人のために説法をしたことであるが、どうじや私の眉毛がまだあるかの。諸人見てくれんかと、問

い出したものと見へる。佛法は本來名字言説の相を離れて説くべきことも聞くべき法もない筈であるに、借翠巖は何んなことを説いたのであらう。腹かへつたら飯を食い眠くなつたら横になる。眼では物を見る鼻では物をかぐ、こんなことでも説いたのであらう。又眉毛は自分の眼の上にある筈のものであるにそれを人に見てもらわれば此の老人には解からぬのであらうか。諸人私の顔に口がある筈だが何んと果してあるであらうか見て下されと云ふも同じこと。此の老人チト老耄て御座ると見へる。

- 五。只眼晴も也た地に落つることを贏ち得たり。翠巖老人イヤ眉毛どころかスツカリ眼玉まで落ちて仕舞つたぞ。何も見へまいがの。
- 六。鼻孔に和して也た失ひ了れり。鼻の孔もまたつぶれて仕舞ふた。翠巖無面目となられたのふ。これといふも皆説法の罰。借々恐ろしいことである。
- 七。地獄に入ること箭を射るが如し。翠巖老人は誹謗正法の大罪を犯したから、間違なく地獄一定の身の上であるぞ。
- 八。賊となる心虚はる。盗みをする奴は必ず虚言をつくものであると云ふが、如何にもその通りであるぞと御挨拶する。
- 九。灼然。如何にも保福の云はれる通り。それに間違は御座らぬ。
- 一〇。是れ賊は賊を知る。何れ一つ穴の狐であるから、能く内幕を知つて居る筈である。
- 一一。生ぜり。生えたぞ。黒々と生えたぞ。獅子の立て鬚のやうであるば、象の長鼻のやうであるぞと申上げる。
- 一二。舌頭地に落つ。長慶少し云ひ過ぎであるから。舌が抜けますぞと評する。
- 一三。錯を持つて錯に就く。翠巖と云ひ長慶と云ひ實に虚言つきの名人であるから、忽々地獄一定であらう。
- 一四。果然。長慶どうせ録なことは云へまいと思つたが、果して其の通りであつた。
- 一五。關。ソレ爰は關所であるぞ。三人ともいかさま怪しい奴であるから嚴しく検査をした上でなければとをすことはならぬぞと雲門の御挨拶である。

- 一六。走つて何の處に在つて去らん。同行三人關所が通れないでは何處へ落ちて往くであらう。
- 一七。天下の衲僧も跳不出。イヤ此の同行三人ばかりではない。中々どんなものでも此の關所は容易に通行することは出来ぬと揆して、諸人此の三人は昔のことであるが、即今我々お互ひは此の關門を何んと通つたものであらうぞ。走げるならば又どこへ走げたものであらうぞ。人事ではない。人人お互ひの身の上のこと。決して餘所事他人ごととは思はるるなよと會下にあたる。
- 一八。敗なり。サー難關はうち敗つた程に諸人此の期をのかます通つて往け、迂路たへることもいらぬ。遠慮することもいらぬと云ふて、其の實塵點久遠の昔しから此の門は開かれてあるぞ。早う來つて此の内を窺つて見よ。

第三節 本則提唱

舉 翠岩 夏末 示 衆 云。一夏以來爲兄弟說話 東說西話 看 翠岩 眉毛 在 麼。下語云。道老賊

一夏の間泡口をたゝいた程に、其罰に看よ翠岩の眉毛が落ちたはと云ふは賊也。在麼と云ふは無いと云ふ事ぞ。夏末は七月十五日ぞ。根本上には説く可きこともなく、罰と云ふこともなく、又眉毛も無き也。然るを兄弟と東說西話したる罰に依て、カツタイになりたと云ふ處が賊ぞ。在麼と云ふたは、如何と見た方も。無いと響ひたぞ。先師下語に、藏身露影。言中有響。

保福云。作賊人心虛。下語云。是精知精。家裡人會家裡話。

保福は翠岩の會下の僧也、去る程に賊を聞知する也。是精知精は同路の方ぞ。先師下語に同行者當知。

長慶云 生也 下語云。眉毛横眼上。月白風清。

岩の賊を云はれた其周圍に墮せず、生也と云はれた。生也と云ふは眉毛は落ちず存るぞ。生れついてあるぞと云ふ義也、先師曰く、保福寺と長慶と、何れが好きぞ辨に云、保福は賊をば早勘破せられたれども、賊に落入して被働た處不足也。長慶は賊をば心得られたれども、其賊にかまはず、何の道理もなく生也と云ふたは遙かに手が上なり。先師下語に、松無古今色。

雲門云 關。下語云。蝦跳不出斗。

此句は無障礙と云ふて、本分にも使ひ、種々に用ゆることあり。此上なにしてか、蝦跳不出斗と云ふたぞ。雲門云關。雲門は我と云ひ負けて關内へ飛び入られたぞ、關は關所也、賊を翠岩の云はるゝとも、關をスエて通すまいぞと云ふ也、さばかりの雲門なれども、如是と云ふ義を以て蝦跳不出斗と批判するが先師以來定辨也、此上雲門に代りて何と働くべきぞと云ふに、當家臨濟宗の働きならば、禪床を掀倒して一喝袖を拂つて去る可し。さあらば大小の翠岩も手を失んずるぞ。搦して云く。保福は作賊人心虛と云ひ、長慶は生也と云ひ、雲門は關と云ふ。此内優劣あること也見分けて辨すべし。云く。此三大老の内には長慶の生也と云ふた言句おとなしき言句な

り。保福の作、賊人心慮と云ひ、雲門の關と云ふたは賊の關内へ入つた語也。一向立入らずして生也と云ふ言句おとなしう候と云ふか定辨也。關と云ふに先師下語あり。泊同路かやうの人と知らいで路づれをせうとしたよ。又下語に禽血噴人先汚其口、雲門の無用の事を云はれて落れたぞ。尋常の人には不許。

第四節 本則評唱和譯

古人晨參暮請あり、翠巖夏末に至つて却つて恁麼に衆に示す、然れども妨げず孤峻なることを。妨げず天を驚かし地を動かすことを。且らく道へ一大藏經五千四十八卷、免れず心と説き性と説き頓ととき漸く説くことを。還つて這箇の消息ありや。一等には是れ恁麼の時節、翠巖中に就いて奇特なり。看よ他の恁麼に道ふことを且らく他の意仕麼の處にか落在する。古人一鉤を垂るゝも終いに虚りに設けず、須らく是れ箇の道理の人のためにするあるべし。人多く錯つて會して道ふ、白日青天無向當の話を説いて無事に事を生ず、夏末に先づ自ら過を説き先づ自ら點檢して別人の他を點檢することを免れ得と。且喜すらくは沒交渉。這般の見解それを胡種族を滅すと謂ふ。歴代の宗師出世して若し人に垂示せずんば都べて利益なく箇の什麼を圖らん。這裏に到つて見得透せば方に古人に耕夫の牛を驅り飢人の食を奪ふ手段あることを知らん。如今の人間著すれば便ち言

句下に向つて咬嚼し眉毛上に活計を作す。看よ他の屋裡の人自然に他の行履の處を知つて千變萬化節角警訛着々出身の路あり、便ち能く此くの如く他と酬す唱することを。此の語若し奇特なくんば雲門保福長慶の三人啞々地に他のために酬唱して什麼をか作さん。保福云く賊と作る人心慮なし。只此の語に因つて適來許多の情解を説くことを惹き得たり。且らく道へ保福の意作麼生。切に忌む句下に向つて他の古人を覓むることを。備若し情を生じ念を起さば則ち備が眼睛を換へん。殊に知らず保福一轉語を下して翠巖の脚跟を截斷することを。長慶云く、生也と。人多く道ふ長慶翠巖の脚跟に隨つて轉ず。所以に生也と道ふと。且得沒交涉。知らず長慶自ら他の見解を出して生なりと道ふことを。各出身の處あり。我且らく爾に問ふ、是れ什麼の處か是れ生處、一に作家面前金剛王寶劍を直下に便ち用ゆるに似たり。若し能く常流の見解を打破し得失是非を截斷せば方さに長慶他と酬唱する處を見ん。雲門云く關と、妨げず奇特なることを。只是れ參し難し。雲門大師多く一字の禪を以つて人に示す。一字の中と雖も須らく三句を具すべし。看よ他の古人機に臨んで酬唱すること自然に今時の人と迥かに別なることを。此れ乃ち句を下す底の様子、他此くの如く道ふと雖も、意決して那裏に在らず、既に那裏に在らずんば、且らく道へ什麼の處にか在る。也た須らく子細に自參して始めて得べし。若し是れ明眼の人ならば天を照し地を照す底の手脚ありて直下に八面玲瓏ならん。雪竇他の一箇の關の字のために他の三箇を和して穿つて一

串となして頌出す。

【字解】一。還つて這箇の消息ありや。山僧が朝に起き夕に寝れ、腹がへつては飯を食ひ。眠たくならば横になる。犬はワント啼き猫はニヤンとなく。一大藏經五千四十八卷の中には何處に這般の大説法があらうぞ。若しあつたならばそれこそ釋迦の眉毛が落ちたであらう。

二。便ち言句下に向つて咬嚼し。これが蝶の影逐ふ小猫と云ふもの。腹の中に教相蟲をわかつて居るからのこと。三生六十劫。盡未來際にも翠巖の眞意は會されまいと云ふ。

三。一轉語を下す。飽く迄追いつめられて進退是れ谷まつた時。ヒラリとかはす働きのあるところ、それが即ち一轉語である。

第五節 頌

翠崑示_レ徒道家男女。教壞千古無_レ對千箇萬箇也。有一關字相酬不信道不妨奇特若是。失錢遭罪飲氣吞聲雪竇也。潦倒保福同行道伴猶作道。抑揚難_レ得放生把住誰是好。且喜沒_レ嘮野狐精。翠崑合取口好分明是賦捉敗了也。白圭無_レ玷還辨得麼天誰辨眞。假_レ來無眼碧眼胡僧。長慶相_レ諳始得未得一半在。眉毛生也在什麼處從頂門上至。

【讀方】翠巖徒に示す道の老賊。人家の男女を教壞す。千古對なし千箇萬箇也。一箇半箇あり。分一箇。關字相酬ふ道ふことを信ぜずや。妨げず奇特なることを。若し是れ無應の人ならば方さに無應に道ふことを解せん。失錢遭罪氣を飲み聲を呑む。雪竇も也た少なからず。聲に和して便ち打す。潦倒なる保福は同行同伴。猶ほ道の去就を作す。

兩箇三箇。抑揚得難し放行把住。誰れか是れ同生同死。他を誘ふこと莫んば好し。且喜すらくは没交涉嘮々たる。翠巖道の野狐精。口を合取せば好し。分明に是れ賊道着する也た妨げず。捉敗了也白圭玼なし。還つて辨得ずや。天下の人價を知らず。誰れか眞僞を辨せん夢は只是れ假山僧。從來眼なし碧眼の胡僧。長慶相諳せり是れ精は精を知る。須らく是れ他にして始めて得べし。未だ一半を得ざることあり。眉毛生せり什麼の處にか在る。頂門上より脚跟下に至るまで一莖草も也たなし。

【字解】一。道の老賊。翠巖が眉毛ありやと言つた其の言下に入萬四千の法門をも一切衆生の命根をも悉く奪ひ去つて居るから、道の老賊奴。諸人持つたもの盗まるゝなよと云ふ。

二。人家の男女を教壞す。諸人迂路として臍玉を奪ひ去られるなよ。道の老僧油斷がならぬ程に。

三。千箇萬箇。雪竇云ひ過ぎであらう。幾らもあるぞ、千も萬もあるぞ。看よく花は紅い柳は綠。翠巖の眉毛は眼上にあつて八字になつて居るであらうと云ふたあんばい。

四。也た一箇半箇あり。イヤ一人や二人はあらう。某甲など先づ其の一人である。

五。分一箇。然しながら竹打ちわつたやうな。能くも合ふた言ひ分。古語に符節を合するが如しとありますと評する。

六。道ふことを信ぜずや。ソレ爰にも一人ある。某甲が申した通り。

七。妨げず奇特なり。如何にも奇特なる答話。此の關の一字こそ實に千古萬古に徹底したる應對である。

八。若し是れ無應の人ならば方さに無應に道ふことを解せん。靈門のやうな人でなければ。到底是くの如き答話は出来まいと稱揚する。

九。氣を飲み聲を呑む。實に恐れ入つた次第である。

一〇。雪竇もまた少なからず。某甲も實に恐れ入りました一本參つて御座ると云いも果てす。

一一。聲に和して傾ち打す。ヒシツと打棒一下して。どうぢや重々恐れいつたか。

- 一一。同行同伴。翠岩に雲門が好い道伴れであるに今亦保福が道伴れになられた。如何にも恰好の道連れ、雪竇もその一人であらう。
- 一二。猶ほ道の去就を作す。雪竇亦しても保福を老害したなどい云はれるが、また此の位なことはやりませうまい。
- 一三。兩箇三箇。世の中に人の無いやうなことがかり云はれるが二人や三人はあらう。
- 一四。放行把住。取るも棄てるも自由自在で如何にも見事な保福の手際である、何んと諸人。兩手完全稱の僧もあるのか。
- 一五。誰れか是れ同生同死。保福こそ實に翠巖の真知友であらう。皆の中に誰れか保福と同生同死する底のものがあるかと會下を見まはす。
- 一六。他を誇する莫くんば好し。雪竇餘り人を誇られるなよ。潦倒だの抑揚得難しなど、は餘りに手巖しいことはないかとたしなめる。
- 一七。且喜すらくは没交涉。餘りにツヤツマが合はぬ様であると云ふ。
- 一八。道の野狐精。おのれ道の野狐の怪物奴が、
- 一九。口を合取せばよし。口が臭くて鼻もちがならぬからだまつて口をふさいで居れ。メツメに舌を動かすな。
- 二〇。道着するも也た妨げず。如何にも雪竇の云はれる通り。賊に間違はあるまい。
- 二一。捉敗了也。サア捉へた逃がすことではないぞ。
- 二二。選つて辨得すや。其の瑕があるが能く見分け得るものがあるか。
- 二三。天下の人價を知らず。天下の人誰人と雖も此の白圭の價を知つたものはあるまい。
- 二四。多くは只是れ假。どれも此れも偽物ばかりで。頼んと眞物はあるまい。
- 二五。山僧從來眼なし。圓悟も悲しいことには眞偽を辨する底の眼を持たぬが、此頃きけば。
- 二六。碧眼の胡僧。達磨とやら云ふ毛唐人が玉のめききぢやそやうな。頼んでも見やうかのみ。

二八。是れ精は精を知る。精け者のことは精者が能く知つて居る筈である。別に不思議なことはない。

二九。須らく是れ他にして始めて得べし。長慶ならばこそ能く知つて居るのである。

三〇。また一半を得ざることあり。然し知つては居らるゝがまだ充分とは云はれぬ。今一つと云ふところが知つて居ないやうだ。

三一。什麼の處にか在る。ドコへ毛が生へたの、足の底にか鼻の先きにか。

三二。頂門上より脚跟下に至つて一葉草も也たなし。頭の頂上から脚の爪先迄一本の毛も生へて居ないではないか。

どいにはへたの。

【講義】 翠巖徒に示す。翠巖の永明大師が入室の諸徒に向つて、老僧が一夏九十日の間、諸子

等のために色々の説法をしたことであるが、どうぢやな、老僧の眉毛がまだあるかなと示された一句、此の一句下に八萬四千の法門も一切衆生の命根も悉く奪い去つて仕舞はれたことである。千古對なし。此の一句に對して千古萬古誰れ一人對し得るものがない。三世の諸佛と雖も對不得。歴代の祖師と雖も對不得。徳山臨濟の棒喝と雖も又いかんともすることは出来まいと思ふ。關字相酬ふ。唯雲門の關と云ふ一字が能く翠巖の一句に對當し得て千古萬古に透徹した應對ぶりである。失錢遺罪。これは唐のいつの世にか、凡そ錢を失ふたものがあれば罪科に處すると云ふ法令が出たと云ふことあるが、誠につまらぬ話で、錢を失ふた上に更に罪科に處せられると云ふから、云はれ泣き面に蜂と云ふところである。今爰で失錢遺罪したものは誰れであらうが、雲門の關に出

遭ふた翠巖老人か或は又雲門その人であらうか、保福であらうか長慶であらうか、三世の諸佛歴代の祖師乃至は雪竇や圓悟、今日のお互い吾々であらうか、爰必ず返照して見るべきところである。潦倒なる保福は抑揚得難し。潦倒は老羸と云ふも同じで老羸顛倒して居ると云ふことであるから、オイボレてさつぱり物事の分らんことを潦倒と云ふのである、保福が賊となる人は心虚はると云ふたのを評して、あの保福の老羸爺めが揚とあけたのやら、抑とおさへたのやらとんと譯のはからぬことを云いよると云ふて、之れは借々翠巖を抑揚したものか長慶を抑揚したものか雲門を抑揚したものか、或は又保福自らが自分を抑揚したものかとんと分からぬと評する。嚙々たる翠巖分明に是れ賊。嚙々は多言の貌で、翠巖老人は本来饒舌な方であるから、魔事なく夏が来たらずれでよいものを、眉毛があるかないかなと餘計なことを言はれる、實に八萬の法門を盗み、一切衆生の命根を盗み、盡十方法界を盗むところの大賊である。白圭玷なし誰れか眞偽を辨せん。圭は玉篇のある珪と同字で瑞玉也とあるから即ち玉だの水晶だのと云ふ寶玉のことで今は翠巖を申したものである。どうちや翠巖と云ふ賊は妙なことに一點の瑕玷もなき白圭の如くであるが、此の玉は正しく本物であるか或は偽物であるか、誰れぞ辨する底のものはないかな。長慶相諳せり。イヤそれは長慶和尚が能く知つて居られる、何んと知つて居るであらうのふ。眉毛生せり。そら毛か生へたぞ、確かに毛か生へたぞと謠ひ收めて、諸人何處に生へたの、鼻の先きにかのふ。又しは臍の上にかのふと其の端的を看せしめる雪竇の老婆心切である。

第六節 頌評唱和譯

雪竇若し恁麼に慈悲に頌出して人をして見せしめずんば、争でか善知識と名づくることを得ん古人此くの如く一一皆是れ事已むことを獲ず。蓋し後學他の言句に著して轉た情解を生するがためなり。所以に古人の意旨を見ず。如今忽ち箇の出て來つて禪床を掀倒し大衆を喝散するあらば、他を怪しむを得ず。然かも此くの如くなりとも雖も、也た須らく實に這の田地に到つて始めて得べし。雪竇道く、千古對なし。他只道ふ。着よ翠巖が眉毛ありやと。什麼の奇特の處あつてか便乃ち千古對なき。須らく知るべし、古人一言半句を吐き出し來るも是れ造次ならず。須らく是れ乾坤を定むる底の眼ありて始めて得べし。雪竇一言半句を著くる金剛王寶劍の如く、踞地の獅子の如く、擊石火の如く閃電光に似たり。若し是れ頂門に相を具するにあらずんば。争かでか能く他の古人の落處を見ん。這箇の示衆直ちに得たり千古對なきことを。徳山の棒臨濟の喝に過ぎたり。且らく道へ雪竇爲人の意什麼の處にか在る。爾且らく作麼生が會せん、他の千古對なしと道ふことを。關字相酬ふ。失錢遭罪。這箇の意如何。直鏡是れ透關底の眼を具するも這裏に到つて也た須らく子細にして始めて得べし。且らく道へ是れ翠巖が失錢遭罪か。是れ雪竇が失錢遭罪か。是

れ雲門が失錢遭罪か、備若し透得せば汝に許す眼を具することを。潦倒たる保福抑揚得がたし。自己を抑するか古人を揚するか。且らく道へ什麼の處か是れ抑。什麼の處か是れ揚。嚙々たる翠巖分明に是れ賊。且らく道へ他什麼をかぬすみ來つて雪竇却つて道ふ是れ賊と。切に急む他の語脈に隨つて轉却することを。這裏に到つて須らく是れ自ら操持あつて始めて得べし。白圭玷なし。翠巖の大いに白圭に以て相似て更に些の瑕翳なきことを頌す。誰れか真偽を辨せん。謂つべし人の辨得するあること罕なりと。雪竇大才あり、所以と頭より尾に至つて一串に穿却す。末後却つて方に道ふ、長慶相諳んず眉毛生せりと。且らく道へ生せりとは什麼の處にか在る。急に眼を着けて看よ。

【字解】一。此の評唱解し易し頌の講義と相まつて了解すべし。

第九則 趙州四門

第一節 垂示

垂示云。明鏡當臺。妍醜自辨。鑊錮在手。殺活臨時。漢去胡來。胡來漢去。死中得活。活中得死。且道。到這裏。又作麼生。若無透關底。眼轉身處。到這裏。灼然。不奈何。且道。如何。是透關底。眼轉身處。試舉看。

【讀方】明鏡臺に當つて妍醜自ら辨す。鑊錮手に在り殺活時に臨む。漢去り胡來り胡來り漢去る。死中に活を得、活中に死を得。且らく道へ這裏に到つて又作麼生。若し透關底の眼、轉身の處なくんば這裏に到つて灼然として奈何ともせず。且らく道へ如何なるか是れ透關底の眼、轉身の處。試みに舉す看よ。

【講義】明鏡臺に當つて妍醜自ら辨す。此の一句は明眼の宗師家の智見の曇りなきことを申したもので、凡そ佛祖の位中に在つて一切衆生の導師となる人には、明鏡の臺に當るが如き知見がなければならぬ。之れを大圓鏡智と申し又海印三昧とも云ふ。此の大圓鏡の前にあつては、美となく醜となく正となく邪となく、善人も悪人も邪正共に覆いかくす處なく自然に映現するものであるから、一見して忽ち妍醜を辨することが出来る。鑊錮手に在り殺活時に臨む。この二句は宗師

家の作略の縦横自在なることを云ふたもので、鑢鑢は即ち寶劍の名で日本でならば先づ正宗の銘劍と云ふところ。鑢鑢干將と並び稱して支那では先づ代表的の寶劍となつて居ると見へる。ことの由來は蜀志に詳しく記されてある。宗師家が學人を接化するには、時に臨み氣に應じて、或は折伏或は攝受、把住放行。殺すも活かすも自由自在思ふとほり望むとほりであるが之れは鑢鑢の寶劍とも申すべき般若の智見を持つて居ることである。漢去り胡來り胡去り漢來る。既に曇りなき大圓鏡を持つて居るから、漢でも胡でも美醜正邪となくどのやうなものか映つて來ても少しの滯りもなく去來自由で來るがまゝ、去るがまゝ、月も映つれば花も映る、美人もうつれば片眼もうつる。死中に活を得活中に死を得。既に鑢鑢の寶劍が手裡にあるから、死中に活を得させやうとも活中に死を得させやうとも是れ又自由自在思ひの儘である。且らく道へ這裏に到つて又作麼生、サア筒様な場合に望んでは何としたものであらうぞ。若し透關底の眼轉身の處なくんば、佛々祖々が夫れ々經歷して來られたところの難所逢坂の關や天龍川の渡しを何の苦もなく通り抜けた眼力もなく、又愈々絶對絶命、進退これ谷まると云ふ大變な所へ行き當つてもヒラリと身を轉して自由に働く底の手腕がなくなつては、這裏に到つて灼然として奈何ともせず、筒様な場合に臨んでは何とも角とも致し方のないことは鏡にかけて見る如く明かなことであるか、何んと諸人其の透關底の眼と云ひ、轉身の處と云ふは抑も如何なる眼で又どのやうな處であらうぞ。山僧が耳底さら

へて聞かう程にそれ一言云つて御覽じ。若し云ふことが出來ずば、今日趙州四門の話を舉揚するから子細に參究して見よ。必ず透關底の眼轉身の處をうるであらうにと云ふて、試みに擧す看よと本則を喚び出した。

第二節 本則

擧僧問趙州如何是趙州河北河南。總說不着。滌泥裏州云。東門西門南門北門

開也。相罵。饒爾。接賢。相唾。饒你。潑水。見成。公案。還見麼。便打。

【讀方】僧趙州に問ふ如何なるか是れ趙州河北河南。總說不着。滌泥裏に刺あり。總說不着。河南に在らずんば正に河北に在り。州云く東門西門南門北門開なり。相罵しることは汝に任す。嘴を接け相唾することは爾に饒す水を潑け。見成公案。還つて見るや。便ち打す。

【字解】趙州は第二則の下で詳しく話した通り、趙州の趙州城と云ふ處に觀音院と云ふ寺があつて、其寺の住持に従禪師と云ふ名僧が居られた。六十歳の時に始めて發心修行の志をおこし八十まで行脚せられたと云ふから、實に中々ならぬ大菩提心で、其の結果遂に南泉和尚の法を嗣いで、世間で趙州と其の居られる處をさへ云へば、はや從禪師ぢやなと云ふ位有名な大徳になられた。

二。河北河南。河南を問ふたのか河北を問ふたのか、どちらを問ふたのやらと分らんと云ふ。これ此の僧が如何なるか是れ趙州と問ふから、趙州和尚かウツカリと自分のこととして答ふればイヤお前のごとでない趙州城を問ふたのぢやと云ふであらうし、又趙州城のこととして答ふればイヤ土地のことぢやない一本食はせるつもりであるらしい。そこで問話の

語脈が兩方に跨つて居るから圍管老人が此の著語をしられたものと見へる。

三。濁泥裏に刺あり。ドロ／＼した泥ぬかみの中に刺があると云ふのであるから、皆のものウツカリと足を入れるなよ。とんだ憂目に逢ふであらう。

四。總に耽不着。何とも會點のゆきかぬる問頭であるか。諸人會せるかなと會下を見廻はす。

五。河南に在らずんば正に河北に在り。どちらか一方にあるであらう。爰まこつてならぬ處。ウカツに往けば地獄街であるぞ。

六。開なり。ソレ東西南北の四門が一時に開かれた。何の門からなりと入つて見やれと云ふて、ウツカリすると圍管の法庭であらうぞ。

七。相罵しることは汝に任す嘴を接し相唾することは爾に饒す水を潑け。云いたい放題したい放題、何となりと云いたいやうに勝手に云い。したいやうに勝手にしたか好いと云ふ。是れ原量の大なるところ。

八。見成公案。此れが見成公案で事實だから仕方がない。

九。選つて見るや。皆の者それこの見成公案が見へたかなと云ふて、

一〇。便ち打す。何をツロ／＼とまこつくのぢや。見と云ふも三十棒、不見と云ふも三十棒。爰許さぬところ。

第三節 本則提唱

僧問^ツ趙州^ニ如何^{ナルカ}是^ナ趙州^ノ城^ヲ。下語云。句裏呈機。

此の僧コソ者で趙州が人を以つて答へは國を問ふべし。國を以て答へは人を問ふべしと思ふて問ふたぞ。

州云。東門^ヲ西門^ヲ南門^ヲ北門^ヲ。下語云。盤在機前。深辨來風。

此の僧句中の方から趙州とまぎらかして問ふたほどに、答へも一つも取り定めず、東門西門南門北門と答へたぞ。是れ句中を勘破したもの。

【請益】僧云。某甲不問^ス這箇^ヲ趙州^ヲ。下語云。案中。果然。

這の僧爰にて句中を云いあらはしたなり。必ずこう云はうぞと思ふたれば案中ぞと云ふ義なり。

州云。爾問^ツ那箇^ヲ趙州^ヲ。下語云。提撥見肘。

臨濟宗ならば爰では棒喝をも行すべき處を、鋒銚をあらはさず、句中を押藏して、何となふ平々なやうに云はれたは趙州底の問答なり。

第四節 本則評唱和譯

大凡を參禪問道は自己を明究す。切に忌む言句を揀擇することを。何か故ぞ、見すや趙州舉して道ふ。至道無難唯嫌揀擇と。又見すや雲門道ふ。如今の禪和子、三箇五箇頭をあつめて、口喃喃地にして便ち道ふ。這箇は是れ上才の語句那箇は是れ身處に就いて打出する語と。知らず古人方便門の中初機後學の未だ心地を明めず未だ本性を見ざるがために已むことを得ず箇の方便の語句を立することを。祖師西來單傳心印直指人心見性成佛の如き那裏にか此くの如く葛藤せん、須

らく是れ語言を斬斷し格外に見諦して透脱得し去るべし。謂つべし。龍の水を得るが如く虎の山に靠るに似たりと。久參の先德見て未だ透らず未だ明めざるあり。之れを請益と謂ふ。苦し是れ見得透する請益ならば却つて語句上に周旋して疑滯あることなからんことを要す。久參の請益は賊のために梯を過ぐす。其の實は此の事言句上に在らず。所以に雲門道く此事若し言句上に在らば三乘十二分教豈に是れ言句なからんや。何ぞ達磨の西來をまたんと。汾陽の十八問の中此の間は之れを驗主問と謂ひ亦之れを採抜問と謂ふ。這の僧箇の間頭を致す。也た妨げず奇特なることを。若し是れ趙州にあらずんば、也た他に祇對しがたからん。這の僧問ふ。如何なるか是れ趙州と。趙州は是れ本分の作家、便ち向つて道ふ東門西門南門北門と。僧云く、某甲這箇の趙州を問はず、州云く那箇の趙州をか問ふ。後人喚んで無事禪の人を賺すこと少なからずと作す、何か故ぞ他趙州に問ふ、州答へて云く東門西門南門北門と、所以に只他趙州を答ふと、爾若し恁麼に會せば、三家村裏の漢も更に是れ佛法を會し去らん。只這便ち是れ佛法を破滅す、魚目をもつて明珠に比況するが如し。似たることは則ち似たり是なることは則ち是ならず。山僧道ふ河南に在らずんば正に河北に在らんと、且らく道へ是れ有事か是れ無事か。也た須らく是れ子細にして始めて得べし。遠錄公云く、最後の一句始めて牢關に到ると、指南の旨言詮に在らず。十日一風五日一雨、邦を安んじ業を樂しみ腹を鼓して謳歌す。之れを太平の時節と謂ひ之れを無事と謂ふと。是れ拍

盲にして便ち無事と道ふにあらず、須らく是れ關板子を透過し荆棘林を出得して淨裸裸赤灑灑たるべし。依前として平常の人に似たらば爾に由つて有事もまた得たり無事も也た得たり。七縱八横終いに無を執し有を定めず。有る般底の人は道ふ。本來一星事なし。但只た茶に遇はば茶を喫し飯に遇へば飯を喫すと。此れは是れ大妄語之れを未得謂得未證謂證と謂ふ。元來會つて參得透せず、人の心と説き性と説き玄と説き妙と説くを見ては便ち道ふ只是れ狂言なり本來無事と。謂つべし一盲衆盲を引くと、殊に知らず祖師未た來たらざる時、那裏にか天を喚んで地と作し山をよんで水となし來る。什麼の爲めにか祖師更に西來する。諸方陸堂入室箇の什麼をか説く。盡く是れ情識の計較。若し是れ情識計較の情盡きば方に見得透せん。若し見得透せば舊に依つて天は是れ天地は是れ地山は是れ山水は是れ水。古人道く、心は是れ根法は是れ塵、兩種は猶ほ鏡上の痕の如し。這箇の田地に到らば自然に淨裸々赤灑灑たらん。若し極則に理論せば也た未だ是れ安穩の處ならざることあらん。這裏に到つて人多く錯りて會して無事界裡に打在して、佛も亦禮せず香も也た焼かず。似たることは則ち也た似たり、爭奈せん脱體不是なることを。纔に問著すれば却つて是れ極則に相似たり。纔に拶著すれば七花八裂空復高心の處に坐在す。臈月三十日に到るに及んで、手をよんで胸を槌つとも已に是れ遲了也。這の僧恁麼に問ひ趙州恁麼に答ふ。且らく道へ作麼生か摸索せん。恁麼も也た得ず不恁麼も也た得ず。畢竟如何ん。這の些子はれ難處。

所以に雪竇拈出し來りて當面に人に示す。趙州一日坐する次で侍者報して云く、大王來也。趙州豊然として云く大王萬福と、侍者云く未到和尚と、州云く又道ふ來也と。參して這の裏に到り見て這の裏に到らば妨げず奇特なることを。南禪師拈して云く、侍者只客を報することを知つて身の帝郷に在ることを知らず。趙州草に入つて人を求む。覺えず渾身泥水なることを。這の些子の實處。諸人還つて知るや。雪竇の頌を看取せよ。

【字解】一。自己を明究す。參禪辨道の要は他人の言語文字を詮索することではない。直ちに自己之れ何者ぞと參して見よ。淨土門の聖者すら、念佛よりほかに往生の道をも存知した法門等をもしりたらんと心にく、おほしめしておはしましてはんべらんはおいきなるあやまりなり、もし然らば南都北嶺にもゆいしき學生たちおほくおはせられて候なれば云と云はれてある。爰參禪のもの、一番返照すべきところ。

二。這面は是れ上才の語句。上才は學才あるものと云ふことであるから。如何にも文才のあるもの、語句であるなど、詩作り坊主のやうなことを云ふは、畢竟、自己元來不立文字なることを知らず、古人の言語は爲人方便説なることを知らざるが故である。

三。見て未だ透らず透つて未だ明めざるあり之れを請益と謂ふ。請益はもと儒典の語であつて即ち論語子路篇に子路政を問ふ子の曰くそれを先きにしそれを勞せよ益を請ふて曰く倦むことなれとある、この語を借りて既に教へられたのを、其の上更に重ねて教を請はんとするに名けたものである。教修清規には、請益の方式を示して凡そ請益せんと欲する者は先づ侍者もうして住持に通覆せしむ。某甲上座今晚方丈に詣り請益せんと欲す。如し所請をゆるさるれば、定鐘の後侍者に詣り方丈に候し。燭をとり香を裝ふ。侍者引いて入る、住持の前にて問訊して合掌すること、香を挿み大展九拜。坐具を收めて進んで云く、某生死事大無常迅速のために、伏して望むらくは承上慈悲に方便開示せよ。肅恭側立あきらかに垂聽

を聽く、畢つて前に進んで挿香大展九拜。之れを因縁を謝すと謂ふ。免することきんば爾禮、次ぎに侍司に詣りて謝を致すと申してある。評唱のこの下に四位五様の學者を出してある、少し解し苦い様であるから圖を畫いて示して見やう。

様 (一) 未だ心地を明めず未だ本性を見ざる者。此れ即ち一向の始。
 (二) 見て未だ透らざる者。此れ即ち解悟にして未だ漆桶を脱却せざる者。
 (三) 透つて未だ明めざるもの。始めて門に入ることを得たるも未だ大法を明めず應機接物事に觸れて未だ無碍なることと能はざるもの。

四 (一) 見得透の者。此れ即ち古人の語訛公案差別目錄を參盡せんと欲するもの。
 (二) 賊のために梯を過すもの。之れ即ち十成の稱僧種々に方便して人を化すもの。

四 (四) 驗主問。探抜問。人天眼目に出て居る汾陽禪師の十八問の一つで主人公を勘驗しやうとしての問端であるから驗主問と云ひ、又探りを入れて句中で問ひかけるのであるから探抜問とも名けてある。

五。東門西門南門北門。之れが如何なるかは趙州と問はれての答語である、之れは趙州城のことであらうか、或は又趙州和尚のことであらうか。趙州城には間違ひもなく東西南北の四門がある趙州和尚の方にも發心門修行門菩提門涅槃門と云ふ四門があつて東西南北に配當されてあるし、其の外有門空門亦有亦空門、非有非空門と云ふ四門もあり、或は又理入門に入門、聖道門に淨土門と色々の門があるが、門は云ふ迄もなく通入の義であるから、彼の趙州城の四門は馬も通れば牛も通り天子も通れば乞食も通る。此の佛祖の法城の四門も同じく門であるから彌陀も通れば藥師も通り觀覺も通れば地藏も通るそこで同じく門と云ふ。サテ趙州の四門は抑も如何なる門であらう。

六。遺錄公。舒州浮山の法遠圓鑑禪師は法を汾陽の歸省禪師に嗣いた人で。能く官吏の事務に通して居られたから人が喚んで遺錄公と稱したと云ふことである。

七。是れ拍盲にして便ち無事と道ふにあらず。手たき盲の儘で居るのを無事と云ふのではない、一度透得して所謂の圖

林遊戯地と出かけたところ、人生功なり業とげて最早何の望むところもなくなつた上に田園に起臥して思ひの儘に蝶と戯れ鳥と語ふと出かけたところ始めて眞の無事安穩底の人と云ふものである。

八。未得謂得未證謂證。これは首楞嚴經に出て居る言葉であつて、慈恩の法華方便品の支証に増上漫と云ふ語を釋して、漫に七種あり、一には漫、二には過漫、三には漫過漫、四には我漫、五には増上漫、方には卑漫、七には邪漫なり。今の増上漫は即ち是れ第五なり。己れ實に徳少なくて己れ徳多しと謂ふ世間涅槃禪定等を得るが故に、未だ多く得たるを多得と謂ひ未多證を多證と謂ふ。得は有爲道を謂ひ證は無爲の滅を謂ふと云ふのである。

九。古人道く。永嘉の眞覺大師の證道歌に出てたる文。
一〇。龍月三十日に到るに及んで手を喚んで胸を捶つとも己に是れ遲了也。平生丈けばそれでも通れようか即今斷末魔と云ふ今はの際には何とするぞ。火車來現を見た上で何の角のと睡いても早や遅かりし由良之助。何とも取り返しはつかうまいぞと云ふ。

一一。趙州一日坐する次で。古尊宿の趙州録に、因みに鎮州大王來つて師を訪ふ。侍者來つて師に報じて云く、大王來る師云く大王萬福、侍者云く未だあらす三門下に到る。師云く又大王來と道ふなりと見へてある。巽然ば驚く貌で、萬福は御目出度いと云ふほどのこと。

一二。南禪師云く。黃龍慧南禪師の語で始めの句は頭々漏泄すれとも佛陀に遇ふこと罕なりと云い次下は爰に出づる通りである。

第五節 類則提唱

其一 末後牢關

遠錄公云、末後一句始到牢關。下語云、這老賊。

本分上には末後の一句と云ふことも到牢關と云ふこともないぞ。其れをあるやうに云ふたが賊ぞ。

五祖演云、誠哉斯言。下語云、是精識精。

知音して誠なる哉や斯の言と云われたなり。

其二 大王來也

趙州一日坐次侍者報云、大王來也。下語云、要擇虎鬚。

只今天子が爰へ御出て候ふと云ふて州を勘辨せんとしたは虎鬚をなでんとするものよ。

趙州巽然云、大王萬福。下語云、鑑在機前、深辨來風、勘破了也。

巽然はツバラメと讀むなり驚く貌なり。文選にあり。萬福はメデタイと云ふ心ぞ。言は天子の御來臨と云ふか目出度やと云ふて驚いた體をしたは句中を勘辨して云ふたものぞ。

侍者云、未到和尚。下語云、賊心已露、彩穿肘露。

初問には大王の御出て候ふと云ふて、爰ではイヤマダ御出て候はぬと云ふたは句中を露したものだ。

州云、又道來也。下語云、騎虎頭、收虎尾、首正尾正。

先きには來也と道つるはと云ふたは侍者の句中をよく勘破したるものぞ。又言句に涉ふよりも何故に打たぬぞ。趙州は尋常棒喝を行せぬと碧巖主も評したれども、又時々は令を行することもあるぞ。爰はいつもの趙州の手段で句中を云ひかくいて收めたぞ。

第六節 頌

句裏呈機劈面來響魚行水濁。爍迦羅眼絕織埃撒沙撒土。英帶累趙。東西南北門相對却趙州城向什麼處去無限輪鎚擊不開不自是箇輪鎚。

【讀方】句裡に機を呈して劈面に來る響あり。魚行けば水濁る。趙州を誘する莫くんば好し。爍迦羅眼織埃を施す。沙を撒し土を撒す。趙州を帶累すること莫れ。天を撈し地を摸し什麼をか作さん。東西南北門相對す。開也。那裏にか許多の門あらん。趙州城を背却して什麼の處に向つてか去る。限りなき輪鎚擊ても開けず。自らはれ輪鎚到らず。開也。

- 【字解】 一。響あり。此の僧確とは云いあらはさぬけれども、タシカに句裡に響がある。手こたへがあるぞ。
- 二。魚行けば水濁る。ソリヤ蹤跡があらはれた。追つかけて看よ。
- 三。趙州を誘する莫くんば好し。句裡に機を呈するなど、後學の分際としては失禮であらうぞとたしなめる。
- 四。沙を撒し土を撒す。織埃を絶したのか何故にありがたいぞ。沙をまきちらせ土をまきちらせと云ふ。
- 五。趙州を帶累すること莫れ。雪寶ヒイキの引き倒し、選つて趙州が迷惑するであらうぞ。

六。天を撈し地を摸し什麼をか作さん。それをもかまはずにその様なことを云ふて趙州を讚嘆するが、それは實に無要なことであらうぞ。

七。開也。ソレ御門が開けた。此の期のがさすはいり込んで往けと云ふて、何も今始めてあいたのでない、無始劫來未來永劫決して開閉はない門であるぞと教へる。

八。那裏にか許多の門あらん。諸人動くなれしむくな。進むこともいられば退くこともない、元來靈十方法界總べて是れ趙州城であるぞ。

九。趙州城を背却して什麼の處に向つてか去る。趙州城を背却してはどこへも往けることでないぞ。それを何んとしてうろたへまはるぞ。それ此の門より向ふに進んで往け、汝一心正念にして來れと勅命が下つて居るではないかと云ふ。

一〇。自らはれ輪鎚到らず。ソレは貴公の打ちやうが悪いからぢや。爰の處一二三と打ち破つて看よ。必ず死の難を免れるであらう。

一一。開也。ソレ開いたぞ。通らば通れ、水も流れる風も吹く。何故に人間が通れぬのであらうと一工夫をすゝめる。

【講義】句裡に機を呈して壁面に來る。此の僧が如何なるか是れ趙州と問いかけた處は中々難關で並大抵のものでは容易に通行の出来る關所ではない。爍迦羅眼織埃を施す。爍迦羅は梵語で此には金剛とも堅固とも翻譯をする。サスがは趙州和尚の眼玉である。能く見透された讚嘆する、之れが垂示に明鏡臺に當つて妍醜自ら辯すとあるところ。東西南北門相對す。通るものにはいつでも通られ、通れぬものは萬劫にも通れないと云ふ趙州大城の一路涅槃門があいたぞ。皆のもの何として透過したものであらうぞ。此の期を逸せず早く目的のところまで通りぬけるやうにせら

れよと勵める。限りなき輪錠うてども開かず、如何なる輪錠で打ち破らうとしても中々容易に開けられないのが此の關門であるから、三世の諸佛も天下の衲僧も未だ曾つて開不得。何んと諸人何んとしたならば此の門が開かれやうぞ、人人各自に工夫を凝して來よ。山僧と雖も又開不得候ふと謠い收める。

第七節 頌評唱和譯

趙州機に臨んで一に金剛王寶劔に似たり。擬議すれば即ち備が頭を截却せん。往々更に當面に備が眼睛を換却す。這の僧也た敢へて虎鬚を將ち箇の問頭を致す。大いに無事に事を生ずるに似たり。爭奈せん句中に機あることを。他既に機を呈し來る。趙州也た他の問頭に辜負せず。所以に亦機を呈して答ふ。是れ他特地に此くの如くなるにあらず。蓋し透底の人なるがために自然に轍ちりに合ふ。一に安排し來るに以て相似たり。見ずや一の外道あり手に雀兒を握り來つて世尊に問ふ。且らく道へ某甲が手中の雀兒、是れ死か是れ活か、世尊遂いに門闔もんかんに騎つて云く、備道へ我れ出か入か一本に云く世尊拳頭を豎起して云く開か合か外道語なく遂に禮拜す。此の話は便ち這の公案に似たり。古人自らは是れ血脈不斷。所以に道ふ問は答處にあり答問處に在りと。雪竇此くの如く見得透して便ち道ふ。句裡に機を呈して壁面に來ると。句裡に機あり。兩意を帶ぶるが如

し。又人を問ふに似たり。又境を問ふに似て相似たり。趙州一絲毫を移易せず。便ち他に向つて道ふ、東門西門南門北門、爍迦羅眼塵埃を絶すと。此れは趙州の人境俱に奪つて句裏に向つて機を呈して他のために答ふことを欲するなり。此れそれを機あり境ありと謂ふ。纔かに轉すれば便ち他の心膽を照破す。若し此くの如くならずんば他の問頭を塞きがたし。爍迦羅眼しつからけんは是れ梵語、此には堅固眼けんこがんと云ひ亦是金剛眼こんごうがんと云ふ。照見無碍唯に千里に明にして秋毫を察するのみにあらず乃ち邪を定め正を失し得失を辨じ機宜を別ち休咎を識る。雪竇云く、東西南北相對す。限りなき輪錠撃てども開かず、既に是れ限りなきの輪錠。何が故を撃てども開かざる。自らは是れ雪竇の見處此くの如し。備諸人又作麼生が此の門開ることを得ざらん。請ふ參詳して看よ。

【字解】一。趙州機に臨んで等。之れが即ち垂示に鑿鐸手に在りと云ふたところ。趙州老漢の作略の出格なるを云ふ。二。一外道あり。増一阿含經に出てたる因緣。

第八節 類則提唱。(其二)

其二。外道雀兒

有一外道。手握雀兒來問世尊云。且道某甲手中雀兒是死耶是活耶。下語云。毒氣傷人。惑亂多少人。逼殺人。

死と云は、放ち活と云は、ハシメ殺すべし。何篇にさではないと云ふて佛に手を失はせうとしたぞ。大我慢を以つて云ふたぞ。我慢を毒氣と云ふぞ。螻蟻搖鐵柱と云ふも得たり。世尊を試みんとしたは螻蟻の鐵柱を動かさうとしたものよ。

世尊逐騎門闔云。備道。我出耶入耶。下語云。得一人一手。還一人一馬。

出と云へば内へ入るべし。入と云へば外へ出づべしと思ふてせられたぞ。外道は我慢を以つて佛をクジカウとする。佛は慈悲を以つて外道をクジカウとする。心は別なれども趣きが一つぢやほどもに一手一馬ぞ。

外道無語逐禮拜。下語云。知過必改。

善き禮拜のしところなり。

第十則 睦州問僧

第一節 垂示

垂示云。恁麼恁麼。不恁麼不恁麼。若論戰也。箇箇立_ニ在轉處。所以道若向上轉去。直得釋迦彌勒。文殊普賢。千聖萬聖。天下宗師。普皆飲_レ氣吞_レ聲。若向下轉去。醜雞蠛蠓。蠢動含靈。一一放_ニ大光明。一一壁立萬仞。儼或不上。又作麼生。商量有_レ條攀_レ條。無_レ條攀_レ條。例。試舉看。

【讀方】 恁麼恁麼。不恁麼不恁麼。若_ニ戰を論せば箇々轉處に立_ニ在す。所以に道_ニ若し向上に轉し去らば直に得たり。釋迦彌勒文殊普賢千聖萬聖天下の宗師も普_ニ皆_ニ飲_レ氣を吞_レむことを。若し向下に轉じ去らば醜雞蠛蠓蠢動含靈一一大光明を放つて一一壁立萬仞ならん。儼し或は不上不下ならば又作麼生が商量せん。條有れば條を攀ち條無ければ例を攀づ。試みに舉す看よ。

【講義】 恁麼恁麼不恁麼不恁麼。會元の七に保福和尚が羅山岩頭に向つて恁麼恁麼不恁麼不恁麼意をもさんと撈しかけたれば、羅山和尚、一聲高く保福とよんだ。それに對して保福和尚ハイと答へるや否や、羅山和尚。双明また双暗と拈提せられたことが出である。これ等は宇宙萬物何によらずすべて皆雨々双々相對して、白と黒、晝と夜。苦と樂。貧と富、智と愚。迷と悟。凡と聖。

向上と向下。と云ふ風に何れ一方とも遍して居らぬから、その兩々双々の間に誰人もマゴツカないものはないから、佛々祖々色々に方便せられて吾々をマゴツカない様にして下されるのである。借恁麼はいつも云ふ通り此の如しと云ふ様な詞であるから、ソウちやソウちやと云ふ程のこと。不恁麼はソウでないソウでないといふ程のこと。そこで此の十字はソウちやソウちやソウでないソウでないといふのであるから、或る一つの問題に對してソウちやソウちやと肯けかうかと思へば又ソウでないソウでないといふ否定する。然らばどうすれば宜いのであるかと云へば何のことはない其の身その儘なりでどうもせんでも宜いので甚だナマクラな様ではあるが、畢竟ドウでも宜いからドウもせんでも宜いのである。山は山の高いまゝ、谷は谷の深い儘。花は紅いの儘、柳は緑の儘各々に其れ自らに獨立自尊でありて、山を低うするの必要もなく谷を高うする必要もない。花か緑になれば花の花たる妙處はなく柳か紅いになれば柳の柳たる所以を失ふことになるのである。そこで次の句に若し戰を論せば箇々轉處に立在すとあつて。ドチラからドノ様に論じて見ても各箇各箇に獨立自尊で、何物と雖も物々箇箇みな絶對である。所以に道ふ若し向上に轉し去れば直に得たり釋迦彌勒文殊普賢千聖萬聖天下の宗師普ねく皆氣を呑み聲を呑む。大聖と云はれる釋迦文佛も、當來下生の彌勒菩薩も偕ては獅子に騎つた文殊。象に跨つた普賢。千聖萬聖。佛々祖々。何人も氣を飲み聲を呑んで皆を下すに處なくキツともスウとも云ふことは出來ぬ。苦

提が何ぞ涅槃が何ぞ。山僧の處では菩提も涅槃も何の役にも立たぬワ。諸人何んと此の時には俄鬼や無間地獄の衆生はドウぢや。ドンな面附で何をして居るぞ。花の紅い時には柳はどんな面附であるぞ。雀が忠々と啼く時には鳥は何と云つてなんとなくぞ。文殊か獅子に騎つた時には普賢と何として何に騎るぞ。鳥は孝行象はもうく。定めしカアノと姦ましい。口をふさいで縫い附けて置かうぞ、山僧などモウく聞かまいと云ふであらうぞ。若し向下に轉し去れば醜鷄蠖蠖蠢動含靈一一大光明を放つて一一壁立萬仞ならん。蠖蠖は列子に蠖蠖は朽壤の上に生ず。雨に因つて生し陽をみて死すとあるから極細かなウヂ蟲のこと、見へる。醜鷄は、字書に蟲の名、酒に生ず蠖蠖一名醜鷄とあるから蠖蠖と同じものであるらしい。醜はシ、ヒシホと云ふ字であるから鹽辛い醬油樽とか漬物桶とかに生くウヂ蟲のことであらう。蠢動含靈は蠢動はウヂくすることであるから蛭とか蚯蚓とか乃至は蜂。蜻蛉。グヂくカマキリと云ふ類のもので何でも極めて下等動物を指したものである。そこで若し向下に轉し去ればアラ不思議や今迄ウヂ蟲と思つて居つた最下等動物迄も一一大光明を放つて遍ねく十方世界を照し。三十二相八十隨形と結構なお相好を具へた有り難い如來様で之れを仰げば愈々高く壁立萬仞と中々吾れ人のよりつけることでない。諸人何んと之れはドウしたものであらうぞ。本來自性天然佛。何も驚くことはない。何も恐れることはない。本來最初から此の通りでありて別段驚くべき奇蹟でもなければ格別恐るべき

怪物でもないのである。儼し或は不上不下ならば又作麼生が商量せん。従上來は向上とか向下とか云ふ風に兩々相對して申したことであるか今更に其の向上でもなく向下でもない。即ち不上不下と云ふ立場からであつたならばサー何んとしたものであらうぞ。條あれば條を攀ち條なければ例を攀づ。何か裁判官か辯護士の様な申し分であるが何のことはない。山は高いもの谷は深いもの。蟬は樹上に啼くもの蛙は水田に啼くもの。鶏の冠は赤い螢の尻は光る。一大藏經に若し然るべき條例があれば其れによる迄のことであるが、若しなかつたならば茲に面白い昔話がある。小僧共ねむらずに山僧の話を聞けと云ふので試みに擧す着よとお伽話を始める。

第二節 本則

擧 睦州問僧。近離甚處。探草僧便喝。明作家。且莫許州云。老僧被汝一喝。一喝。虎。人作麼。僧又喝。未是只恐龍頭蛇尾。則州云。三喝四喝。後作麼。生逆水之波。未嘗有一僧無語。果然。機州便打云。若使睦州盡令面行。盡這掠虛頭。漢。放過。一着。落。在。第二。

【讀方】 睦州僧に問ふ近離甚の處ぞ探草僧便喝す。作家の禪客。且らく許明頭なることなしや。也た恠に去ることを解す。州云く老僧汝に一喝せらる。陷虎の機。人を探して作麼。僧又喝す。頭角を看取せよ。似たることは則ち似たり是なることは則ち未だ是ならず。只恐くは龍頭蛇尾ならん。州云く三喝四喝の後作麼。生逆水の

波。未だ曾つて一人の出得頭なるあらず。那裏にか入り去る。僧語なし。果然として機索不着。州便より打て云く。若し睦州をして令を盡して行せしめば。盡大地の草木悉く斬つて三段となさん。這の掠虚頭の漢。一着を放過すれば。第二に落在す。

【字解】 一。睦州。睦州の陳尊者は諱を道明(或は道蹤)と云ふた人で江南の人陳氏の出である。法を黃檗希運大師に嗣いたと云ふから即ち吾が臨濟大師とは弟子兄弟の間柄で睦州の龍興寺に住して居られたが後述を晦まして諸方を巡歴され自ら草履を製りて行人のために道路に棄て居られた、そこで時の人が陳蒲鞋と呼んだといふことである。

- 二。探草。探草。睦州老人が此の僧の脚底をサカられる處を評したもので古語に探草在手。草履隨身とあるに依つたものである。
- 三。作家の禪客。サスかは偉い禪客であると賞める。
- 四。且らく許明頭なることなしや。許明頭は知りもせぬことを知つたふりをするのであるから、この僧イカサマ作家らしいか。然し許明頭ではないかの。其の一喝かりものであらうと云ふ。
- 五。也た恠に去ることを解す。此の僧一くせありそうな。見事な働き振。諸人よく看よ。
- 六。陷虎の機。睦州。ヲナを設けられた。諸人氣をつけて看よ。
- 七。人を探して作麼。睦州其のやうに人をたぶらかして何にし召さるぞ。罪造りで御座らう。
- 八。頭角を看取せよ。ソレ諸人此の僧に角があるかないかを調査して見やれ。活龍かの。
- 九。似たることは則ち似たり是なることは則ち未だ是ならず。イカサマ眞の活龍では無い。そんな。蛇の化したのであらう。イヤ蛇蝎であるらしい。
- 一〇。只恐くは龍頭蛇尾ならん。イヤ見苦しいこと。尻尾が御座らぬ。

- 一一。逆水の波。睦州和尚見たところ猫なで聲であるが其の氣は已に狼虎を丸呑みにして居られる。サテノ恐ろしい。
- 一二。未だ曾つて一人の出得頭あらず。此の僧は申すに及ばず。何人と雖も顔出しはなるまい。
- 一三。那裏にか入り去る。此の僧何處へ逃げ出すであらう。諸人足元をしかと見やれ。
- 一四。果然として模索不着。案の條似せ者であつた。先きの一喝再喝は取り消しかのふ。
- 一五。若し睦州をして令を盡して行せしめば盡大地の草木悉く斬つて三段となさん。睦州掠虚頭と計り叱りつけて佛祖の正令を行せられぬところ。此の僧如何にも仕合せ者である。若し行せられたら盡大地悉くなげ出されたであらうにと評して。
- 一六。一着を放過して第二に落在す。打つて打つて打ちつけて臘月三十日になつても閻魔老子から宿債を取りに来ぬ様にしてやられるれば宜いに。と評して眞箇の參禪は眞に命がけで無ければ成らぬことを諷められる。

第三節 本則提唱

舉睦州問僧近離甚處下語云。似要知來處。

來處をば不問ゾ、似の字肝要なり。先師下語に、爛泥裏有棘、打草驚蛇。

僧便喝下語云。勘破了也。

句中を好く心得へて喝したゾ。又云、作家禪客。何も僧の働きを褒讃したゾ。作家は家を興こすと云ふ也。

州云、老僧被汝一喝下語云。捉襟見肘。

此僧を見届ん爲めゾ。先師下語に句裏呈機、藏身顯彰。

僧又喝下語云。初心不改。

一片の漢なる程に句中を不レ休喝したゾ。不改也、先師下語に、見義亡利、這裏是什麼。

州云、三喝四喝後作麼生下語云。逼狗透牆。

此僧を鈍漢と見へ、猶問ひ究めむとて三喝四喝の後作麼生と云ふたは、逼レ狗透レ牆レした程のこと。先師下語に痛處下ニ針錐一。

僧無語下語云。龍頭蛇尾。

初問の答話に違ふて尾だれになりたゾ。先師下語に、吞氣飲聲、漆桶不レ會。

州便打云、這掠虚頭漢下語云。頭正尾正。撥款結案。

此僧前は見事に働いて喝したが、後に不足なる處を州の見かけて白狀して云はれたゾ。掠虚はカスメイツハル也。又云騎虎頭收虎尾。此下語の時は收めた方也、先師下語に無孔鐵錐當面擲ニ邪法難レ扶一。

第四節 本則評唱和譯

大凡そ宗教を扶たせんにには須らく是れ本分の宗師の眼目あり本分宗師の作用あるべし。睦州の

機鋒閃電の如くに相似たり。愛して座主を勘す。尋常一言半句を出すに箇の荆棘叢に似て相似たり。脚手を著ることを得ず。他纔に僧の來るを見て便ち道ふ。見成公案爾に三十棒を放すと。又僧を見て云く、上座。僧首を回らす。州云く、擔板漢。又衆に示して云く、未だ箇の入頭の處あらず。須らく箇の入頭の處を得べし。既に箇の入頭の處を得ば老僧に辜負することを得ず。睦州人の爲にする事多く此くの如し。這の僧也た善く雕琢す。爭奈せん龍頭蛇尾なることを。當時若し是れ睦州にあらずんば亦た他に惑亂一場せられん。只他の近離什麼の處と問ふて僧便ち喝するが如くんば、且らく道へ他の意作麼生。這の老漢也た忙しからず、緩々地に他に向つて道ふ。老僧汝に一喝せらると。他の話を領して一邊に在くに似たり。又他を驗するに似て相似たり。身を斜にして他を如何と看よ。這の僧又喝す。似たることは則ち似たり。是なることは則ち未だ是ならず。這の老漢に鼻孔を穿却し來らる。遂いに問ふて云く、三喝四喝の後作麼生。這の僧果然として無語。州便ち打して云く、這の掠虚頭の漢。人を驗する端的の處口を下せば便ち知音。可惜許。這の僧無語。睦州の掠虚頭の漢と道ふことを惹き得たり。若し是れ諸人ならば睦州に三喝四喝の後ち作麼生と道はれて合に作麼生か祇對して他に掠虚頭の漢と道はるゝことを免れ得ん。這裏若し是れ存亡を識り休咎を別ち脚實地を踏む漢ならば。誰か三喝四喝の後作麼生と云ふを管せん。只這の僧無語のために這の老漢に便ち款に據つて案に結せらる。雪竇の頌出するを聽取せよ。

【字解】一。座主。座主は一座の主或は高座の主と云ふの略語であつて即ち學解優贖類なるものを稱するのであるが、爰では禪僧にして然も經論を講説するものと呼んで座主と稱したのである。彼の天臺宗などで座主と云へば即ち一山の寺務を總理するものを稱したもので天臺座主とか山の座主など稱して延曆寺などで此の稱號を用ひて居るが之れは今と全く別意である。

- 二。他纔に僧の來るを見て。之れは傳燈錄の睦州章に、師僧の來るを見て云く見成公案汝に三十棒を放さん。僧云く某甲是くの如し。師云く三門の金剛什麼としてか拳を擧す。僧云く金剛尙ほ乃ち是くの如し。師僧便ち打すとある因縁を拈提し來つたものである。金剛は即ち山門の左右に對立して居る仁王を指したるもの。
- 三。又僧を見て云く。傳燈錄に、師尋常或は衲僧の來るを見て即ち門を閉づ。或は諸僧を見ては乃ち召して云く座主。其の僧應諾す。師云く擔板漢。或は云く、這裏に桶あり我がために水を取れとある因縁をあげたもの。
- 四。又衆に示して云く。同じく睦州章に、師晩參に因つて衆に謂つて曰く、汝等諸人箇の入頭を得ず、須らく箇の入頭を得べし。若し箇の入頭を得ば己後に老僧に孤負することを得ざれ。時に僧あり出でて禮拜して曰く、某終ひに敢へて和尚に孤負せず。師曰く早く是れ我れに孤負し了れりとある因縁を指したるものである。これは何れも睦州老漢の化風を示したもので如何にも親切な提擲ぶりである。
- 五。老僧汝に一喝せらる。ヤア一貴公は中々偉いな。老僧もその一喝にはビックリ致したぞと云はれた處。諸人ドんな面をして言はれたか。此の一言これは向上であらうか向下であらうか、眼をわいて參して見よ。
- 六。身を斜めにして他を如何と見よ。諸人能く睦州老漢の梅干面を眺めて見よと云ふ。
- 七。三喝四喝の後作麼生。お前は頻りに大喝して一喝再喝エライ勢いであるが更に三喝四喝の後は何んとするつもりであるぞ。サア云ふて見なさいと猫なで聲で一僧を見つめる。
- 八。掠虚頭の漢。掠は奪掠など云ふて人の財物をかすめると云ふ文字であるから、此の空腹高心のカラハラ外道奴。生

死の一大事を決定すべき肝要の場でありながら、似て非なる一喝再喝が何になるぞ。たとへ陸州は放しても臘月三十日に至つて閻魔老子から宿債の催促を受けた時には何とするぞ。と眞参眞悟の切要なることをいましめられたもの。
九。這の老漢に款に據つて案に結せらる。此の僧到頭陸州老漢のために警審調査を作りあげられた。定めし重罪公判に附せらるゝであらうぞ。

第五節 頌

兩喝與三喝雷聲浩大兩點全無。自作者知機變。若不是作家爭論。若謂騎虎頭。
漢。虎頭如何騎多少人恁二俱成瞎漢。親言出親口。何止誰瞎漢。教誰辨。賴有未後。拈
來天下與人看則兩手拈空。恁麼舉且道是第幾機。

【讀方】兩喝と三喝と雷聲は浩大なれども兩點は全く無し。古より今に至るまで人の恁麼なる有ること罕なり。作者機變を知る若し是れ作者に在らずんば争でか驗得せん。只恐くは恁麼ならざらん。若し虎頭に騎ると謂はゞ。因。瞎漢。虎頭如何が騎らん。多少の人恁麼に會す。也た人の這の見解を作すあり。一たり俱に瞎漢と成らん。親言は親口より出づ。何ぞ止だ兩箇のみならん。自領出去。誰か瞎漢なる。誰をして辨せしめん。頼ひに末後の句あり。洎んど人を賺殺す。拈じ來つて天下人に與へて看せしむ。看ることは即ち無きに非ず。觀着すれば即ち瞎す。關梨若し眼を着けて看ば則ち兩手に空を拈るならん。恁麼に舉す且らく道へ是れ第幾機ぞ。

【字解】一。雷聲は洪大なれども兩點は全く無し。カラ雷喝で聲計り高くても雨とては一滴も降らんから早苗勃然として此に起さんと云ふわけにも往かんと云ふので果して似せ者であつたと評する。

- 二。古より今に至るまで人の恁麼なる有ること罕れなり。三喝四喝の後作麼生と此の僧の一喝再喝をハネノケられたところ、サスガは陸州老漢、如何にも見事なお手際で御座ると評する。
- 三。若し是れ作者に在らずんば争でか驗得せん。サスガは陸州能く驗得せられたと云ひ、又一僧を顧みて、法を知るものは擡るとやら老漢に一抄せられてマト喝ば發せないのでみならずモハヤ憤んで一語も出さない處如何にも見上げた態度であると評する。兩方にかけて見るがよし。
- 四。只恐くは恁麼ならざらん。此の僧中々の機變。多くの禪侶たち恐らくは空見地ばかりであれほどの機變はなるまい。
- 五。因。諸人今一と力出すべきところ。ウンと氣張つて虎頭にでも騎つて見よ。
- 六。瞎漢。此の上にもウ一喝でもしやうものならそれこそ瞎漢。目かつぶれやうぞ。
- 七。虎頭如何が騎らん。諸人何として虎頭に騎らうぞ、それでは騎ることなるまいと云ひ、
- 八。多少の人恁麼に會す。多くの人は此の僧が陸州に三喝四喝の後また作麼生と彈ねられた時にマタ大喝一聲したならばそれこそ好つたやうにと思ふであらうが若しそんなことでもしたものであればソレこそ大變二人とも盲目になつてしまふたであらうと評し。
- 九。也た人の這の見解をなすあり。然しそれは只喝喝と云ふのみで空腹高心の虚見識と申すもの。そう云ふ見識の人もないてはないが、ハテサテ困つたものと嘆する。
- 一〇。親言は親口より出づ。雪竇禪師の大慈大悲より出た一言。諸人あだに聞くなよと誡める。
- 一一。何ぞ止だ兩箇のみならん。何も二人と限つたことはない。盲目千人でサテ／＼困つたもの。
- 一二。自領出去。然し雪竇それはお手前のことよ。この圓語こそお手引き申さうと重ねて雪竇を讃仰する。

一三。誰をして辨せしめん。サア誰れ人が瞎漢であるか、雪竇それを誰れに辨驗させやうと云ふ思召で御座るぞと野次り。

一四。頼いに末後の句あり。睦州和尚此の掠虚頭漢とな。誠に結構な末後の水で御座る。

一五。泊んど人を賺殺す。雪竇餘りに人をたまされるなよ。罪なこと御座るぞとたしなめる。

一六。看ることは即ち無きに非ず觀着すれば即ち瞎す。ナル程諸人看やるか好い。然しながら一念如何んか看んとすれはソリヤ瞎漢。看そこなふぞよ。

一七。闇梨若し眼を着けて看は則ち兩手に空を捨るならん。諸人兩手に空を捨るか如くぢやと。サテ何として見やうのふ。見らるゝものでなさそうな。

一八。恁麼に擧す且らく道へ是れ第幾機ぞ。ハテサテ此れ何の機變ぞ諸人參究し來れと評によせての垂誡である。

【講義】 兩喝と三喝と。此の僧が睦州和尚に向つて一喝又一喝。カアーツカアーツと兩喝を食はせた。ソコで睦州和尚逆水の波と出かけて三喝四喝の後作麼生と拶しかけられたので此の僧無語と爰グウの音も出なかつた様子を一句にまとめて兩喝と三喝と五言にして頌の始めに置かれた。作者機變を知る。これは此の僧が最初に睦州和尚から近離甚の處ぞと拶しかけられた時にスカサズ喝と一喝を下した様子と云ひ、又老僧汝に一喝せらる、其の一喝には老僧もビツクリしましたわいと言はれた言下に更に喝と再喝した按梅と云ひ、實に間に一髪を容れぬ處が中々の舊參の衲僧と見えることぢやが、その上又、睦州和尚に三喝四喝の後作麼生お前はカアーツカアーツと一喝又一喝すさましい勢いであるが三喝四喝した後にはどう收めるつもりであるぞと猫撫で聲で

云はれてから後は、マタと喝を發しないのみならずモハヤ慎んで一語も出さなかつた處は如何にも見上げたもので所謂法を知るものは懼ると云ふ慨がありでイカサマ機變を知るものと思はれると謠つて此の公案を頌し畢つて、更に、若し虎頭に騎ると謂はいと、世人が此の公案を曲解して居るのを勘驗にと出かけられた。爰等が雪竇の如何にも慈悲深いところである。二俱に瞎漢とならん。人或は此の僧が睦州に三喝四喝の後また作麼生と彈ねられた時にマタ候カアーツと一喝やらかせばよかつたものと思ふことぢやが、イヤハヤとんだ了見違ひ、それこそ二人共に盲目になつて仕舞はねばならん。誰か瞎漢なる。然らばサア虎頭に騎れと云ふたのか瞎漢であるか將又騎れと云ふたのに騎らないのが瞎漢であるか。人人皆眉の下鼻の上には一雙の眼があらう。釋迦も二つ達磨も二つ。小僧も二つなれば貴公等も二つであらう。二つの眼には誰も替ふことはない筈ぢやが、ハテサテ誰が瞎漢であらうぞ。諸人よう眼をむいて見よ。見そこなふなよと云ふて、拈し來つて天下人に與へて看せしむ。看よと云はれたからとて見やうとすれば目が墮ぶれるぞ。諸人親ゆづりの眼ではいかぬ。汝が本來の面目を以てながめて見よ。必ず見えることであらうぞと云ふて、諸人相かまへて看やるなよ。ウツカリ見れば眼が墮ぶれるぞ。と評をつける。

第六節 本則評唱和譯

雪竇妨げず爲人の處あることを。若し是れ作者にあらすんば只是れ胡喝亂喝せん。所以に古人道ふ。有る時の一喝は用を作さず。有る時の一喝は却つて一喝の用を作す。有る時の一喝は踞地の獅子の如く、有る時の一喝は金剛王寶劔の如しと。興化道く、我れ彌諸人を見るに東廊下にも也た喝し西廊下にも也た喝す。且らく胡喝亂喝すること莫れ。直饒興化を喝し得て三十三天に上せて却つて撲下し來つて氣息一點も也た無くとも、我が甦醒し起き來んを待つて汝に向つて未在と道はん。何か故そ。興化未だ會つて紫羅帳裏に向つて眞珠を撒して彌諸人に與へざること有り。只管に胡喝亂喝して什麼をか作さん。臨濟道く、我れ聞く汝等總に我が喝を學ぶと。我れ且らく彌に問はん。東堂に僧あり出で、西堂に僧あり出で、兩箇齋しく喝を下す。那箇か是れ寶那箇か是れ主。彌若し寶主を分つことを得ずんば已後老僧を學ぶことを得ずと。所以に雪竇頌して道く、作者機變を知る。這の僧睦州に收めらると雖も他却つて機變を識る處あり。且らく道へ什麼の處か是れ這の僧機變を識る處。鹿門智禪師這の僧を點して云く。法を識る者は懼る。嵩頭道く若し戰を論せば也た箇々轉處に立在す。黃龍の心和尙道く、窮するときは則ち變し變するときは則ち通すと。這箇の些子はれ祖師天下の人の舌頭を坐斷する處なり。彌若し機變を識つて舉着せば便ち落處を知らん。有る般の漢は云ふ。他の三喝四喝と道ふを管して什麼かなさん。只管に喝し將ち去れ。什麼の三十二喝とか説かん。喝して彌勒佛の下生に到る。之れを虎頭に騎ると謂ふ。若

し恁麼の知見ならば相州を識らざることば則ち故らに是。這の僧を見んと要すとも太だ遠きこと。在ん。人の虎頭に騎るか如くんば須らく是れ手中に刀有り兼ねて轉變あつて始めて得べし。雪竇道く。若し恁麼ならばふたり俱に瞎漢とならん。雪竇天に倚る長劔の凜凜たる全威に似たり。若し雪竇の意を會得せば自然に千處萬處一時に會して便ち他の雪竇の後面の頰只是れ注脚を下すことを見ん。又道く誰か瞎漢と。且らく道へ是れ寶家瞎するか是れ主家瞎するか、是れ寶主一時に瞎することなしや。拈し來つて天下人にあたへて看せしむ。此は是れ活處。雪竇一時に頰し了れり。什麼としてか却つて道ふ拈し來つて天下人に與へて看せしむと。且らく道へ作麼生か看ん。開眼も也た着得たり合眼も也た着得たり。還つて人の免れ得る有りや。

【字解】一。所以に古人道ふ。臨濟大師の四喝と云ふて有名なものである。只何とはなしにカアツカアツと大聲喚呼する丈けのことなれば田夫野老と雖も能くすること出来る。それを胡喝亂喝と云ふ。別にカアツと云ふに胡喝の眞喝の亂喝の本喝のと云ふ區別はなければん。機に應し時に臨んで其の喝の品類が違ふ。只無性矢たらに大喝するは雀か思々鳥の孝行と一般只口先きの泡汁どば汁に過ぎないので何の役にも立つものではない。

二。興化道く。魏府の興化存獎禪師は臨濟大師の法嗣であつて大覺禪師と證號を賜つた高徳である。此の語一本には興化禪師の示衆の語として、我れ聞く前廊下にも也た喝し後架裏にも也た喝す。諸子汝旨喝亂喝すること莫れ。たとい興化に喝し得て虚空裏に向つて卻つて撲下し來つて一點の氣也た無けれども我が蘇息し起き來るを待つて汝に向つて未在な道はん。何か故ぞ我れ未だ會つて紫羅帳裏に向つて眞珠を撒し彌諸人にあたへ去ることあらず。胡喝亂喝して作麼せんとなつてあるか意味合は同じことである。紫羅帳裏に向つて云云と云ふは方語に情をつくして揭示すと云ふ意味である。無

價の寶珠を與へぬからには諸人の喝喝は何の役にも立たぬ。盲喝亂喝と申すもの。眞の喝ではないと云ふ。

三。臨濟道く。之れは臨濟録に見えてある有名な語であるが、何も東西兩堂兩箇齊しく喝を下すと限つたことはない。天下の人同時に喝を下す其の端的に主賓を辨得する底でなくば納僧とは申されぬことよ。

四。鹿門智禪師の僧を點して曰く。此の僧の睦州に三喝四喝の後作睦生と抄しかけられてマタと喝を發しないのみならずマハヤ慎んで一語も發せぬところは如何にも見上げたもので眞に法を知るものは懼るの概があると評したものの。之の語は天童の覺禪師が大隋の公案を拈する語に、法を識るものは懼る。敵を欺くものは亡ぶ、水中に乳を辨す。須らく之れ鶴主なるべしとあるに依つたもの。

五。黃龍の死心和尙道く。黃龍死心禪師は黃龍悟蘄禪師の法嗣である。此の語は周易の下係の辭によつたもの。

六。開眼も也た着得たり合眼も也た着得たり。目あいても見眠つても見ることが出來てこそ始めて雪竇に瞎漢と罵られることを免れやうと云ふ。諸人どの眼で看やるかのふ。

第七節 類則提唱

第一 臨濟道學喝

臨濟道我聞汝等總學我喝我且問爾東堂有僧出西堂有僧出兩箇齊下喝那箇是賓那箇是主。下語云。直不掩偽曲不藏直。

賓と云ふは色相ぞ。賓は客人ぞ。客人と云ふ者は變してかはるぞ。假なる處を權に用ゆるぞ。

又主と云ふは本分ぞ。主は主人の方ぞ。變らざる處を實に用ゆるぞ。斯様に辨する時は權實備る

なり。

爾若分賓主不得已後不得學老僧下語も辨もなし。

第十一則 唾酒糟

第一節 垂示

垂示云。佛祖大機全歸掌握。人天命脈悉受指呼。等閑一句一言驚群動衆。一機一境打鎖敲枷。接向上機。提向上事。且道什麼人曾恁麼來。還有知落處麼。試舉看。

【讀方】 佛祖の大機全く掌握に歸す。人天の命脈悉く指呼に受く。等閑の一句一言群を驚かし衆を動かす。一機一境、鎖を打ち枷を敲く。向上の機を接し向上の事を提く。且らく道へ。什麼人が會つて恁麼にし來る。還つて落處を知るありや。試みに舉す看よ。

【講義】 佛祖の大機全く掌握に歸す。此の一節は善知識と云はれる作家の平生の活機を稱揚せられたもので其の中初めに其の大智惠門を讚嘆せられた一段である。佛祖の大機と云ふは即ち三世の諸佛歴代の祖師の浩大なる活機輪で、それを全く掌握に歸すると云ふから、一部分ではなく全分で、薬師の十二大願も彌陀の四十八願も、釋迦の拈華も觀音の普門示現も、偕ては達磨の西來も傅大士の講經も、山の高さ谷の深き。蝶の舞ふも鳥の謠ふもありとしあらゆるもの一切悉く作者の手中にあつて更に餘す處はないのである。されば人天の命脈悉く指呼にうく。上は梵天帝釋よ

り下は人天鬼畜に至り、樹上に鳴く蟬も、荷葉に止まる蛙も蚊虻蚯蚓のたぐいに至る生けとし生けるもの、命脈は悉く宗師家の掌握中にありて殺さうとも生かさうとも思ひの儘で丁度主人か下男や下女を自由自在に召し使ふが如しである。等閑の一句一言悉く群を驚かし衆を動かす。之れからは上の大智恵門に對する大慈悲門でありて、禪師が自利極りて利他の大行を行せらるゝところ、園林遊戯地と衆生濟度に出かけらるゝ一段である。等閑は別に分別思慮を煩はさぬ所謂ナヲザリと云ふことであるから、禪師の一言一句ウフンと云はれてもエヘンと云はれてもそれがその儘にして驚天動地の大説法となりて、所謂四辨八音を六趣に振ふと云ふ概があるのである。一機一境鎖を打し枷を敲く。前は言説の上を言ふたのであるが爰は機境の上で即ち禪師の一舉手一投足。眉をあげらるゝも目を瞬たゝかれるも行住坐臥悉くそれか早や有情利益の手段方便となつて、煩惱の繫縛を解き忘想分別の枷をたゝき碎して下さることゝなるのである。向上の機を接し向上の事を提ぐ。されば是くの如きの手段が悉く之れ向上の大機を接し向上の大事を拈提することゝなるのでありて、彼の俱胝和尚が一指頭に宇宙の萬象山河大地を思ひの儘に左右せられたと同様實に妙とも不思議とも云ふて見様のないことである。且らく道へ什麼人が會つて恁麼に來る。然らば果して従上來説明し來つた様な大人物があつたかどうか、還つて落處を知るありや。そもくどころへんがその落着のところであらう。試みに擧す看よ。それには幸ひ爰に黃檗大師の

爲人の作略があるから能く拜見して見るか宜しいと結ぶ。

第二節 本則

擧 黃檗 示 衆 云 天下打水碍盆。一口吞盡。汝等 諸人 盡 是 囉酒糟漢。恁麼 行脚 踏破 草鞋。歇 何處 有 三今日 不妨 驚群動衆。還 知 大唐國 裏 無 禪師 麼。老僧 不會。一口吞 大搖地。時 有 僧 出 云。只 如 諸方 匡徒 領衆 又 作 麼 生。機 不得 不 恁麼。檗 云。不 道 無 禪 只是 無 師。直 得 分 疎 下。瓦 解。

【讀方】 黃檗衆に示して曰く、水を打ちて盆に碍えらる。一日に吞盡す。天下の衲僧も踏破す。汝等諸人盡く是れ囉酒糟の漢恁麼に行脚せば道着す。草鞋を踏破す。天を歇し地を搖す。何の處にか今日あらん。今日を用ひて什麼にかせん。妨げず群を驚かし衆を動かすことを。還つて大唐國裡に禪師なきことを知るや。老僧不會。一口に吞盡す。也た是れ雲居の囉漢。時に僧あり出で、云く、只諸方の徒を匡し衆を領するが如き又作麼生也。た好し一擧を與ふるに。機を臨んでは恁麼ならざるを得ず。檗云く禪なしとは道はず只是れ師なし直ちに得たり分疎下なることを。瓦解水消。龍頭蛇尾の漢。

【字解】 一。黃檗。名は希運と云ふた方で法を百丈大智禪師に嗣いで弟子には臨濟義玄禪師と云ふ大家匠があつた。前則の睦州和尚も又禪師の法嗣である。傳に身の長け七尺額に圓珠ありとあるから肉體も餘程の偉丈夫であつたと見える。入寂

- は唐の宣帝皇帝の大申三年(或は云ふ四年、或は云ふ九年)であつて勅號を斷際禪師と賜つた。
- 二。水を打して盆に碍えらる。水を打すと云ふは水を汲むことで水は幾らでも井戸にあるけれども其の水を汲む盆即ち水桶には限りがあるから限りなき水も限られることになる。それと同じく黄檗禪師が佛祖の大機全く掌握に歸するの大力量な以て示されても文句言句には限りがあり。又其の示しを受ける衆徒が凡庸ばかりであるからして、切角の事も示し甲斐があるまいと評する。
 - 三。一口に吞盡す。三世の諸佛も一呑みと云ふ大見識である。蛙公曰く、私しや成佛これみやしやんせ。花の臺にあぐらをかいて、口を開いて說法獅子吼。三世諸佛も此の口あいて、呑んで碎いて黄金にします。借もヨイ／＼ヨイ此の坊主。言語文字はチヨト借て置いて、私のなり見て座禪をくんで。時に如意でも手前に据ゑて、腹一ぱいにりきんでみやれ。之れを見性成佛と云ふ。
 - 四。天下の稱僧も跳不出。此の黄檗に口を開かれては、如何なる名僧でも知識でも自由を得ることはなるまい。
 - 五。瞳酒糟の漢。瞳は喫と同字であるけれども極く下品な意味に用いる語で糞でも食へなど云ふ時に用ふる字である。酒糟は讀んで字の如く酒の糟と云ふことであるから、本統の正宗や劍菱の味を知らない。濁酒や酒の糟に舌鼓を打つて居るやくざもの計りであると云ふ。
 - 六。道看す。よくも云ひ當てられた。
 - 七。草鞋を踏破す。そう一概に仰せられたものでもない。これでも随分諸方を遍歴して澤山な草鞋を踏破つて居ります。
 - 八。天を掀し地を揺かす。恰も白象の搖き出すか如く天地も爲めに震動する計りであると冷かす。又云く。借々行脚僧の多いことぢやと嘆息する。
 - 九。今日を用ひに什麼にかせん。黄檗は勿體らしく今日などい云はれるか何も今日も明日もあつたものでない。父母未生以前と云ふことを御存じないと見えると云ふ。

- 一〇。妨げず群を驚かし衆を動かすことを。如何にも宗師の作略。威風凛々と見事なことで御座る。
- 一一。老僧不會。拙僧など一向そんなことは心得て居りませんとそらげける。
- 一二。一口に吞盡す。借々恐ろしい大言で御座る。
- 一三。也た是れ雲居の羅漢。雲居寺の羅漢堂に大層鼻の高い羅漢の像があつたと云ふので、それが一般に高慢な奴ぢやと云ふ程の意味に使はれて居る。
- 一四。也た好し一歩を與ふるに。丁度好い捗處と野次る。
- 一五。機に臨んでは恁麼ならざるを得ず。斯様な場合には行き掛り上是非どう斯う出なければならぬとおだてる。
- 一六。直ちに得たり分疎不下なることを。どうも申し譯が立ちそうにもないと云ふ。
- 一七。瓦解氷消。ヤレ／＼／＼ヒルに鹽花であはれなことぢやと評する。
- 一八。龍頭蛇尾の漢。ウンと此の僧を抑へて實は後學に大疑團を起させる團悟の大慈大悲である。

第三節 本則提唱

舉黄檗示衆云。汝等諸人盡是瞳酒糟漢。恁麼行脚何處有今日。先師下語云。擁不聚牙如劍樹。還知大唐國裏無禪師麼。下語云。挽鈎搭衆

辨して云く、盡是瞳酒糟漢。恁麼行脚何處有今日と云ふて置いて、又還つて大唐國裏に禪師なまいことを知るやと云ふたは、重々諸人を如何んと試みた也。

時有僧出云。只如諸方匡徒領衆又作麼生。下語云。要將虎鬚不願喪身

黄檗の心をかけはかつて見事問ふたぞ。

檗云、不道無禪只是無師。下語云、衫穿肘露。

黄檗の爰で句中を露はして無禪とは道はぬぞ、禪と云ふ物はあれども比奥なる悪知識斗りにて大善知識が無いぞと云へり。爰諸人を平吞して云ふた也。

第四節 本則評唱和譯

黄檗の身の丈七尺、額に圓珠あり、天性禪を會す。師昔し天台に遊ぶ。路に一僧に逢ふ。それと談笑すること故く相識るが如し。熟ら／＼之れを視るに目光人を射て頗る異相あり。乃ち偕に行く。淨水の瀑漲するに屬ふて乃ち杖を植て笠を捐て止る。其の僧師を率いて同しく渡んとす。師曰く請ふ渡れ。彼れ即ち衣を褰けて波を躡むこと平地を履むが如し。回顧して云く渡り來れ渡り來れと。師咄して云く、這の自了の漢吾れ早く捏怪なることを知らば當に汝が脛を斫るべし。其の僧歎じて云く、真に大乘の法器なりと。言ひ訖りて見えす。初め百丈に到る。丈問ふて云く、巍々堂として什麼の處より來る。檗云く、巍々堂々として嶺中より來る。丈云く、來ることは何事のためぞ。檗云く、別事の爲めならず。百丈深く之れを器とす。次の日百丈を歸す。

丈云く、什麼の處にか去る。檗云く、江西に馬大師を禮拜し去る。丈云く馬大師既に遷化し去れり。彌道へ。黄檗恁麼に問ふ。是れ知り來つて問ふか是れ知り來らずして問ふか。却つて云く、某甲特地に去つて禮拜せんとなす。福縁淺薄にして一見するに及ばず、未だ審かし平日何の言句かありし、願くは擧示を聞かん。丈遂に再び馬祖に參する因縁を擧す。祖我が來るを見て便ち拂子を豎起す。我れ問ふて云く。此の用に即するか此の用に離するか。祖遂に拂子を禪床角に掛けて良や久しうす。祖却つて我れに問ふ。汝已後兩片の皮を鼓して如何んが人のためにせん。我れ拂子を取つて豎起す。祖云く、此の用に即するか此の用を離するか。我れ拂子をもつて禪床角に掛く。祖威を振つて一喝す。我れ當時直に得たり三日耳聾することを。黄檗覺へず悚然として舌を吐く。丈云く、汝已後馬大師に承嗣すること莫しや。檗云く然らず。今日師の擧するに因つて馬大師の大機大用を見ることを得たり。若し馬師に承嗣せば他日已後汝が兒孫を喪せん。丈云く、如是如是。見師とひとしきときは師の半徳を減す。智師に過ぎて方に傳授するに堪へたり。子が今の見處宛かも超師の作あり。諸人且らく道へ、黄檗恁麼に問ふ是れ知つて故さらに問ふか。是れ知らずして問ふか、須らく是れ他家の父に行履の處を見て始めて得べし。黄檗一日又百丈に問ふ。從上の宗乘如何んか指示せん。百丈良久うす。黄檗云く、後人をして斷絶し去らしむべからず。百丈云く、將に謂へり汝は是れ箇の人と。遂に乃ち起つて方丈に入る。檗表相國と方外の友とな

る。裴宛陵を鎮す。師を請して郡に至らしめ所解一編を以て師に示す。師接して座に置いて略ほ披閱せずして良久して乃ろ云く、會すや。裴云く不會。裴云く、若し便ち恁麼に會得せば猶ほ些子に較れり。若し也た紙墨に形さば何の處にか更に吾が宗あらん。裴乃ち頌を以つて贊して云く、大士心印を傳へしより額に圓球あり七尺の身錫を掛けて十年蜀水に棲む。盃を浮べて今日漳濱を渡る。八十の龍衆高歩に隨ひ、萬里の香花勝因を結ぶ。師に事へて弟子とならんと擬欲す。知らず法を得つて何人にか付せん。師亦喜色なくして云く、心は大海の邊際なきが如し。口紅蓮を吐いて病身を養ふ。自ら一雙無事の手有り、曾つて等閑の人を祇揖せずと。裴住して後機鋒峭峻なり。臨濟會下にあり、睦州首座たり。問ふて云く、上座此に在ること多時、何ぞ去つて問話せざる。濟云く、某甲をして什麼の話を問はしむれば即ち得てん。座云く、何ぞ去つて如何なるか是れ佛法的々の大意と問はざる。濟便ち去つて問ふ。三度打ち出さる。濟座を辭して曰く、首座の三番去つて問はしむることを蒙つて打ち出さる。恐くは因縁這裏に在らざらんことを。暫且らく山を下らん。座云く、子若し去らば須く和尚を辭し去つて方に可なるべし。首座預しめ去つて葉に白して云く、問話の上座甚だ不可得たり。和尚何ぞ穿鑿して一株樹と成し去らしめて後人のために陰涼となさざる。葉云く吾已に知れり。濟來り辭す。葉云く汝別處に向つて去ることを得され。直ちに高安灘頭に向つて大愚に見みえ去れ。濟大愚に到つて遂に前話を擧す、知らず某

甲の過が什麼の處にか在る。愚の云く葉與麼にも老婆心功働が爲めにする可く微困なり。更に什麼の有過無過とか説かん。濟忽然として大悟して云く、黃檗の佛法多子なしと。大愚搦住して云く、備適ま來りて又過ありやと道い今は却つて佛法に多子なしと道ふ。濟大愚の脇下に於いて壘こと三拳。愚拓開して云く、汝が師は黃檗なり。我が事に干るに非ず。一日葉衆に示して云く牛頭の融大師横説堅説猶ほ未だ向上の關振子を知らざることあり。是の時石頭馬祖下の禪和子、浩浩地に禪を説き道を説く。他何か故ぞ却つて與麼に道ふ。所以に衆に示して云く、汝等諸人盡く是れ瞳酒糟の漢。恁麼に行脚せば笑を人に取らん。但八百一千人の處を見て便ち去る。只熱鬧を圖るべからず。この中總に汝が此の如く容易なるに似たらば何の處にか更に今日の事あらん。唐の時愛して人を罵るに瞳酒糟の漢と作す、人多くよんで黃檗人を罵ると作す、具眼の者は自ら他の落處を見ん。大意一釣を垂れて人の問を釣る。衆中に身命を惜まざる底の禪和あつて便ち恁麼に衆を出で、他に問ふことを解して道く、只諸方徒を匡し衆を領するが如くんば又作麼生と。也た好し一撈するに。這の老漢果然として分疎不下。便ち却つて漏逗して云く、禪なしとは道はず只是れ師なしと。且らく道へ意什麼の處にか在る。池の從上の宗旨、有る時は擒、有る時は縱。有る時は殺、有る時は活。有る時は放、有る時は收。敢へて諸人に問ふ作麼生か是れ禪中の師。山僧恁麼に道ふ。已に是れ頭に和して沒却し了れり。諸人の鼻孔什麼の處にか在る。良久して云く、穿

却し了れり。

【字解】一、這の自了の漢音早く捏怪なることを知らば當に汝が塵を研るべし。這の手前一分すましのしみたれ奴が。我れ早く汝の怪け物であることを知つたならば足の骨組みを打ち折つてくれやうものなと云ふ。

二、巍々堂々として什麼の處よりか来る。巍々は廣大の貌。堂々は威儀の盛なる貌であるから、此の青坊主奴。勿體らしく何處からうせたぞと云ふ。

三、黄髮覺えず悚然として舌を吐く。黄髮ノソツとしてペロリと舌を吐いた端的に百丈黄髮親子一體となり了した。

四、裴相國。裴休居士字は公美と申した人で深く黄髮禪師に歸向して師の爲めに禪苑を創立して朝夕師の供侍をせられた。有名な傳心法要の序は居士が作られたものである。

五、高安灘頭に向つて大愚に見み去れ。高安大愚禪師は歸宗寺の智常禪師の法を嗣いた人であるから即ち馬祖の孫に當る人である。弟子に筠州の末山の尼了然と云ふがありて此の尼のことは傳燈錄にも見へてあるが大愚禪師のことは機縁の傳ふべきものがなかつたと見へて、只名前丈けで傳はつて居らぬやうである。

六、牛頭の融大師。牛頭山の法融禪師は四祖道信大師の法を嗣いた人で彼の傳教大師が禪林寺の脩然大德から法を傳へられたと云ふ系統は此の人の法脈である。

七、禪なしとは道はず只是れ師なしと。此の一句が此の公案の眼目でありて、一僧があなたは大唐國裏に禪師なしと仰せらるゝが、今日隨分至る處で坊さんが多くの雲衲を集めて坐禪たの接心だの入室だの工夫だのと云ふて居られるがあれは抑も何としたもので御座ると一本つき込んで来たものだから、イヤ貴公は禪師なしと云ふことを何と聞きて居るぞ。禪と云ふものは宇宙に先き立ちてあり萬物が滅盡しても決してなくなる筈のないものであるから決して禪なしなとは云ひませぬ。只師なしと云ふたのみで、禪は元より師匠より教へらるべきものでなければ傳へらるべきものでもない。人々箇々具足圓成底のものであるからして従上來未だ曾つて禪の師なしと云ふべきものがあらう筈はないか。それを如何にも禪の師

がある様に心得へて處々方々酒の糟を食つてあるくとは偕も汝は間違け者であるなと黄髮禪師が向上の機を接せられる處。爰が最も注目すべき點なのである。

第五節 類則提唱

其一 百丈參再

百丈遂舉下再參馬祖。因緣祖見我來便豎起拂子。下語云。無孔鐵鎚當面擲。

拂子を本分と用ゐて、豎起したは爲人なり。斯様に辨する時は本分を爲人して無孔鐵鎚當面擲と見るぞ。

我問云。即此用離此用。下語云。突出難辨。彼此難辨。

本分上をば即するとも離するとも云はれざる處を突出難辨と云ふなり。彼此難辨は彼れ此れ辨し難しと云ふ。彼は即すると云ふ方。此は離すると云ふ方なり。

祖遂掛拂子於禪床角良久。下語云。鐵丸無縫罅。

本分上をば言説で述べられぬところを拂子を本分と用いて禪床角にかけて良久せられたぞ。鐵丸は本分を指す。本分には縫目もなしと云へり。

祖却問我汝已後鼓兩片皮如何為人。下語云。捉襟見肘。一槌兩當。
爲人せんとは百丈を如何と見た方もあり。爲人して云ふた方もあり。兩面目備りたなり、故に一槌兩當と下語するぞ。捉襟見肘は如何と試みた方ばかりなり。

我取拂子一豎起。下語云。當機觀面。

言中に當つて拂子を豎起したぞ。句中の方ぞ。

祖云。即此用離此用。下語云。青於藍。冷於水。

猶も試みたなり。恐ろしい方ぞ。

我將拂子掛禪床角。下語云。觀面當機。

祖振威一喝。下語云。清風拂明月。

此の一喝は截斷の方ぞ。振威は截斷なり。

我當時直得三日耳聾。下語云。耳聾兩片皮。

聾するは色相なり。

黃檗不覺悚然吐舌。下語云。識法者懼。中毒者知毒用。

何れも馬祖に知音しての句なり。如上の此語は黃檗の百丈の會裡にある時、先師馬祖在日の言句を御聞せあれと云はれたに、百丈此の話を舉揚して黃檗に示されたなり。

其二 黃檗宗乘

黃檗一日問百丈。從上宗乘如何指示。下語云。問得可始得。

先師已來の佛法を某甲には何と御示しあるぞと云ふたなり。

百丈良久。下語云。無孔鐵鎚當面擲。

良久は本分の言句に述べられぬ處を良久して見せられたなり。黃檗はまた初心な程に本分を爲人してみせられたなり。

檗云。不可教後人斷絕去。下語云。蹉過也。不知。

本分を爲人せられたをば心得ずして、そのやうに人の物を問ふに言句も無くて御坐あらば、百丈の兒孫は繼絶し候はふすと何も知らずにおいこないて云ふたは蹉過ぞ。

百丈云。將謂汝是箇人。遂乃起入方丈。下語云。痛處下針錐。掛款結案。

隨分の者と思ふたるに、此れ程のことを得心得ぬよと云ふて案に結したぞ。又隨分の者と思ふたれと一向のものちやと云ふて愧しめて知らしめようとしたは針錐を下したものよ。

第六節 頌

凜凜孤風不自誇。猶自不知有也。端居寰海一定龍蛇。也要別編素也。大中天子曾輕觸。從地起更高中天子任大也。須三度親遭弄爪牙。死蝦蟆多口作什麼。未爲奇特。猶是盡在黃檗處乞命。世界乃至山河大地。

【讀方】 凜々たる孤風自ら誇らず。猶ほ自ら有ることを知らず。また是れ雲居の羅漢。寰海に端居して龍蛇を定む也。た編素を別つを要す。也。た皂白分明ならんを要す。大中の天子曾つて輕觸す什麼の大中天子とか説かん。たとへ太なるも也。た須らく地より起る。又更に高きも天あるを奈何せん。三たび親しく爪牙を弄するに遭ふ。死蝦蟆。多口にして什麼をか作す。未だ奇特となさず。猶ほ是れ小機巧。若し是れ大機大用現前せば。盡十方世界乃至山河大地盡く黄檗の處に在つて命を乞はん。

【字解】 一。猶ほ自ら有ることを知らず。水自ら濕ほすことを知らず。火自ら燒くことを知らず。花自ら紅なるを知らず。柳自ら綠なるを知らず。黄檗自身も亦己れに凜々たる孤風のあることを御存知ないと思へる。實に本分の宗匠であると思ふ。二。また是れ雲居の羅漢。如何にも鼻が高う御座ると黄檗を讚嘆して、一方又雪竇が能くも僅々七字の中に黄檗を讚嘆せられたと褒美する。三。也。た編素を別つを要す。編素は普通僧俗と云ふことに使ふが今は端居して龍蛇を定むと云ふから、本統にそうであるかな。似非ではあるまいかの。注意して眞偽を取り調べて見る必要があるぞと云ふ。四。也。た皂白分明ならんを要す。正邪黑白を分明に調べて見るが好いと云ふので前の著語と同意である。五。什麼の大中天子とか説かん。此の黄檗の手にかゝつては何の大中の天子どころでない。宇宙も虚空も、藥師も彌陀も釋迦も達摩も一樣にビシヤリと御見舞申さるゝことであらう。六。たとへ太なるも也。た須らく地より起る。太は泰山のことで泰山と云へば此の上もない高い山であるが、何のことはな

い此の大地より見れば一の疣にしが過ぎんのであると云ふ。之の語は林希逸の莊子秋水篇の註に任ひ大なる也。た須らく地より起るべしとあるに依つたものと見へる。

七。又更に高きも天あるを奈何せん。之れを林希逸の次の註に高きも猶ほ自ら天あり來るとあるに依つたもので、富士山が幾ら高いと云ふても尙ほ其の上に天と云ふものがある。天子が如何に貴くとも佛祖が如何に尊くとも尙其の上には法性法身の如來様各自本具の妙心と云ふものがあると云ふ。

八。死蝦蟆。ムダ口きいて打たれやつたな。丸で死蝦蟆のやうである。男振りのわるさと冷かす。

九。多口にして什麼をか作す。一體宣宗はおしやべりであるが、實に役に立たぬこと夥だしいと云ふ。

一〇。猶ほ是れ小機巧。これはホンの皆様の御慰みに過ぎぬ。黄檗大夫の藝當はこれから〜と云ふ。

一一。未だ奇特となさず。宣宗をなぐりつける位のこととは朝飯前のこと。今度は虚空の横面をばりとばして見やうと云ふ。

一二。若し是れ大機大用現前せば盡十方世界乃至山河大地盡く黄檗の處に在つて命を乞はん。若しも黄檗禪師が本統に力を出されたならば宇宙法界。地獄も極樂も悉く横面をなぐりつけらるゝであらうと評する。

【講義】 凜々たる孤風自から誇らず。此の頌は今迄の頌の様に直接に本則そのものを頌したのではなくして、全く黄檗の平生を頌したものであるから、圓悟は此の一頌ひとへに黄檗の眞贊に似て相似たりと評して居られる。偕黄檗は前にも出た通り、身の長け七尺額に圓珠ありと云ふから如何にも軀幹長大の偉丈夫で仰ぎ見る計りの大兵であつたらしい。そこで凜々たる孤風で凜々は清寒の貌。孤風はスウと卓立して居る姿であるから恰も彼の天をも磨せん計りの公孫樹の木が遙

かに萬木をぬいて聳立して居る様でありて、而も自ら誇らずで、其の度量の宏大なる恰も彼の天が自ら其の高きを知らず、照るも曇るも全く無關心であるが如くである。寰海に端居して龍蛇を定む。これも黄檗の大機大用を頌したもので、寰は寰中と云ふて即ち幾内で天子の直轄して居られるところ。海は四海とか海内とか云ふから一國全體を指したものであるが、今黄檗禪師は中々そんな幾内とか一國とか云ふ位の處でなく十方法界。此の三千大千世界に端居して天子が九重の禁中に在つて手を拱して一國を始め億兆の民を治し召して御坐るが如く龍蛇を定むと一切衆生の染淨迷悟を定むる大力量を持つて御坐る。大中の天子曾つて輕觸す。之れは單に一場の空言ではないのであつて、それには確かな證據があると云ふので故事を引いて龍蛇を定むる様子を證明せられた。大中は唐の宣宗皇帝の年號で彼の有名な唐武の會昌の法難のあつた年が會昌四年で其の六年の三月には武宗がなくなつたから引き續いて宣宗皇帝が位につかれ年號を大中元年と改めて、此の年の三月には早や佛寺復興の勅令が出た。宣宗皇帝は名を怡と云ふた人で憲宗の第十三子、先帝の武宗とは叔父甥の關係に當る方である。幼時には號を不慧と申して香嚴志閑禪師の弟子になり後に鹽官の齋安國師の室に入つて參禪をして居られた。その時分に丁度黄檗が國師の會下に首座で居られたが、或る日のこと宣宗帝が黄檗の禮佛して居る處へやつて來て、佛に着いて求めず法に着いて求めず衆に着いて求めすと云へり、禮佛して何の求むる所があると拶しかけら

れた。これは維摩經の不思議品に、維摩が舍利弗に向つて夫れ法を求むる者は佛に着いて求めず法に着いて求めず衆に着いて求めすとあるのに依つて問はれたもので一往尤もな質問である。ところが黄檗和尚、直ちに佛に着いて求めず法に着て求めず衆に着て求めず、常に禮すること是くの如し拶し返へした。これが如何にも親切に佛法の佛法たる所以を説きつくしたものであるか、宣宗は尙ほ不伶俐にも禮を用ひて何か爲んと返へして來たので和尚すかさずビシヤリと一つ宣宗の横面を御見舞申した。宣宗非常に驚いて、太龜生、亂暴なことをする男ぢやと云はれたので、黄檗は這裏何の所在ぞ龜と説き細と説く何も亂暴だの丁寧だの云つて居る處でないかと云ふので又候ビシヤリと横面をなぐりとばした。之れが丁度水に向つて何の爲めに濕はすと問ひ火に向つて何のために焼くと云ふのと同じことでイヤハヤさつちもない質問であるから幾ら御見舞を申されても仕方がない。そこを雪竇が頌中に曾つて輕觸と云ひ三たび爪牙を弄するに遭ふと頌せられたところで之れが即ち黄檗大師の一機一境鎖を打し枷を敲くと云ふ所謂大慈悲のあらはれである。

第七節 頌評唱和譯

雪竇此の一頌ひとへに黄檗の眞贊に似て相似たり。人却つて眞贊の會を作すことを得ず。他底の句下に便ち出身の處あり、分明に道ふ凜々たり孚風自ら誇らすと。黄檗恁麼に衆に示す。且つ是れ

人を争い我を負ひ自ら逞たくまうし自ら誇るにあらず。若し這箇の消息を會せば七縱八横なるに一任す。有る時は孤峯頂こほうちゆうに獨立し、有る時は鬧市裏なうしりに身を横ふ。豈に一隅を僻守へきしゆすべけんや。愈々捨れば愈々歇やすまず、愈々尋ればいよく見えず。愈々擔荷たんがすれば愈々没溺ぼつじやくす。古人道く、翼なくして天下に飛び、名あつて世間に傳ふと。情を盡して佛法の道理玄妙奇特を捨却して一時に放下せば却つて些子さしにあたり自然に觸處現成せん。雪竇道く、寰海くわんかいに端居たんきよして龍蛇りうだを定むと。是れ龍是れ蛇。門に入り來れば便ち驗取す。之れを龍蛇を定むる眼虎兒を擒ふる機と謂ふ。雪竇又道く、龍蛇を定むる眼何ぞ正しからん。虎兒を擒ふるの機全からずと。又道く大中の天子曾つて輕觸きやうしやくす。三たび親しく爪牙そうがを弄するに遭ふ。黃檗豈に是れ如今の惡脚手のみならんや。從來此の如し。大中の天子とは續咸通傳ぞくかんつうでんの中に載す。唐の憲宗二子あり一りを穆宗ぼくそうと曰ひ一りを宣宗せんそうと曰ふ、宣宗は乃ち大中なり。年十三、少くして敏黠びんせつなり。常に跣趺座かみざを愛す。穆宗在位の時あさまつりごと罷おむに因つて大中乃ち戯れて龍床に登つて群臣を揖する勢をなす。大臣見て之れを心風と謂へり。乃ち穆宗に奏す。穆宗見て撫歎して曰く、我が弟は乃ち吾が宗の英貴なりと。穆宗長慶四年に於いて晏駕あんがす。三子あり敬宗けいそう文宗ぶんそう武宗ぶそうと曰ふ。敬宗父の位を繼いで二年にして内臣謀つて之れを易ふ。文宗位を繼いで一十四年にして武宗即位す。常に大中を喚んで癡奴ちぬとなす。一日武宗大中昔日戯れに父の位に登りしことを恨んで遂に打殺して後苑の中に致おく。不潔を以つて灌くわんいで復

た魁かゝらしむ。遂いに潜かに通れて香嚴閑和尚の會下に在あります。後剃度して沙彌しゃみとなる。未だ具戒を受けず。後志閑しかんと遊方して廬山ろさんに到る。因みに志閑瀑布に題する詩に云く、雲を穿ち石を透つて勞を辭せず。地遠くして方さに知る出處の高きことを。閑此の兩句を吟して停思すること之れを久しうす。他の語脈を釣つて如何んと看んと欲す。大中續いて云く、溪澗けいかん豈に能く留むとも住ままることを得んや、終に大海だいかいに歸して波濤はたうとなる。閑方かたさに是れ尋常の人にあらざることを知つて乃ち黙して之れを識る。後に鹽官えんくわんの會中に到る。大中を請して書記となす。黃檗彼れに在つて首座となる。檠せう一日佛を禮する次いで、大中見て問ふて曰く、佛ぶつに着て求めず法ぽうに着て求めず衆しゆに着て求めず衆しゆに着て求めず禮らい當たうさに何の求むる所ぞ。檠せう云く、佛ぶつに着て求めず法ぽうに着て求めず衆しゆに着て求めず。常じやうに禮らいすること是の如し。大中云く、禮らいを用いて何かなさん。檠せう便ち掌てうす。大中云く大たい龜きん生せい。檠せう云く、這裏こゝ什麼の所在ぞ。龜きんと説き細こと説くと云ふて檠せう又掌てうす。大中後に國位を繼ぐ。黃檗に賜ふて龜行の沙門となす。斐相國朝に在り。後に奏して斷際禪師と賜ふ。雪竇他の血脈の出處を知つて便ち用ひ得て巧なり。如今還つて爪牙を弄する底ありや便ち打せん。

【字解】一。古人道く。管子くわんしが桓公かんこうに復する書中の語である。

二。續咸通傳の中に載す。宣宗のことは宋の僧傳や佛祖統記の法運通志などに詳しく見へてある。宣宗の系圖を書いて見ると、



三。香殿附和尙。爰では志閑になりてあるが一本には智閑となりてある。此の方が宜しい。即ち偽山靈祐禪師の法を嗣いた人で後に製燈大師と謚號を賜つた高德である。

四。鹽官の會中に到る。鹽官は即ち齊安國師で馬大師の法を嗣いだ方である。

第八節 類則提唱 (其二)

其三 黃檗禮拜

黃檗一日禮佛次大中見而問云、不着佛求、不着法求、不着衆求。禮拜當何所求。檗云、不着佛求、不着法求、不着衆求。常禮如是。下語云、恩大難酬。

佛法正得の恩を受るを別に報すべきやうはない程に報恩に常に恭敬禮拜することなり。今に至

つて佛祖を禮するは此の子細なり。色相をうけたを一句參得の上から截斷して知りたる法恩を報ゆるために佛祖を禮するなり。先師撻して云く其の意旨如何。曰く過去空劫より一念の錯りで色相をうけたるを一句參得の上から截斷して用ゆるに依りて此の下語を付くるなり。又截斷紅塵、水一溪ともつく。截斷してのけて什麼の道理もない處が水一溪ぞ。又の下語に粉骨碎身未足酬。一句參得した知識をば粉骨碎身しても未だ酬ゆるに足らずとなり。一則も百則も一句一言も疎には思ふまいぞとなり。

黃檗一日禮佛次乃至禮拜當何所求。下語云。問得可始得。

黃檗の禮拜の心を大中の得知らいで如何んと問はれたぞ。

檗云不着佛求乃至常禮如是。下語云。恩大難酬。得恩報恩。

先師云く如何なるか之れ恩。曰く斬釘截鐵。又曰く上無攀仰下絶己躬。截斷の理を心得たが佛祖の思ちやぞ。生死截斷の心得こそ思なれ。さるほどに此の心持ちを以つて大善知識なども佛祖へ焼香禮拜するなり。又禮する中にも上に禮すべき佛祖もなく下に禮拜する我もないぞと云ふ心なり。

大中云用禮何爲。下語云。死蝦蟇。

大中の終に心得かゆかさる程に此くの如く下語するなり。

磔便掌。下語云。痛處下針錐。

大中云。大倉生。下語云。棺木裏瞪眼。

無用の閑伎を云はれたと云ふ義なり。

磔云。這裏什麼所在。說龜說細。磔又掌。下語云。白棒不在手那。

掌した計りでは手ぬるいと云ふことなり。黃葉の手段ならば、したたかに棒こぎにせられうるか、折節手元に棒が無つたと云ふ心なり。

第十二則 洞山麻三斤

第一節 垂示

垂示云。殺人刀活人劍。乃上古之風規。亦今時之樞要。若論殺也。不傷一毫。若論活也。喪身失命。所以道向上。一路千聖不傳。學者勞形。如猿捉影。且道。既是不傳。爲什麼却有許多葛藤公案。具眼者試說看。

【讀方】 殺人刀活人劍。乃上古の風規。亦今時の樞要なり。若し殺を論せば一毫を傷はず。若し活を論せば喪身失命す。所以に道ふ。向上の一路千聖不傳。學者形を勞すること猿の影を捉ふるが如しと。且らく道へ、既に是れ不傳。什麼としてか却つて許多の葛藤公案か有る。具眼の者は試みに説く看よ。

【講義】 殺人刀活人劍。總べて事物は表と裏。消極と積極、破壊と建設。空と有と云ふ風に必ず兩面を具へて居るものであつて、此の兩面が都合よく調和して互ひに宛轉無碍になつた處で始めて事物の真相實用が顯はれるのである。今爰は刀劍に活殺の兩作用のあることを示して、其の殺と云ふ破壊の方面、消極の方面。抑へつけて働かせぬ方面と。活と云ふ建設の方面。積極の方面、打ち任せて自由に働かす方面とが一正宗の名刀に具はつて居ることであるが、此の兩作用共に鋭

利であつて間に一髪を容れる餘地もなく實に閃電光撃石火の機会である。而して此の両面の作用が互に相依り相助けて始めて事物を圓滿ならしむることであるか、これが即ち上古の風規で、佛々祖々一様の風俗であり規則であつて、花の笑ふも鳥の謠ふも、月の照らすも水の流れるも千古萬古更に變りなき同一の風俗規則である。亦今時の樞要。而してこれは只に上古の風規たるばかりでない。亦今時の樞機肝要であつて、今日今時も昔と同じく決してかくべからざる處のものである。乍然多くの人は殺と聞けば如何にも血腥まぐさいことのように思い、活と云へば如何にも生き生きとした活潑々地のことの様に思ふことであるか、然し決してそうではないので。若し殺を論せば一毫を傷はず若し活を論せば喪身失命す。殺と云ふも活を離れぬところの殺。活と云ふも殺を離れぬところの活でありて、秋風一陣木の葉を散らすはやがて生き生きとした新芽を出さんが爲めであり。明煌々たる十五夜の月はやがて針の如き新月となるの基である。之れを經には色即是空即是色と説かれてあつて、殺はやがて大いに活かさんがための殺であり、活はやがて空寂々に歸せんがための活である。故に古人は向上の一路は千聖不傳とも申されてあると盤山寶積禪師の語を引いて之れを證明した。既に眞實向上の一路は、諸佛も説かず列祖も傳へず。之れを他人から傳へることも出来ねば、又他人に授けることもならぬ。然るに滔々たる世上の學者は形を勞すること猿の影を捉ふるが如しで。徒らに言語文字や伎倆動作の末にのみ走りてヤレ碧巖の提唱

ちやヤレ臨濟録の講義ちやといらぬ穿索に日も之れ只ならざるありさまであるが、偕々笑止なこ
とよ。實に彼の猿が水中の月影を捉らへやうとして居るやうなもの。イヤはや三生六十劫、到底捉らへ得られるものではないのである。且らく道へ既に是れ不傳。千佛萬祖も説くこともならず傳へることも出来ぬと云ふならば、什麼としてか却つて許多の葛藤公案がある。何が故に經ちや論ぢや、一千七百の分案ちやと云ふものがあるのか。具眼の者は試みに説く看よ。山僧が此の眼鏡をかさう程に、全く言語上にあらぬ此話の消息を看取せよと結ぶ。

第二節 本則

舉僧問洞山。如何是佛。鐵蒺藜。天下不出。山云。麻三斤。樹。破草鞋。指。槐。樹。罵。柳。樹。爲。秤。鏈。
【讀方】僧洞山に問ふ、如何なるか是れ佛。鐵蒺藜。天下の稱僧跳不出。山云く麻三斤。灼然。破草鞋。破草鞋。槐樹を指し柳樹を罵しりて秤鏈と爲す。

- 【字解】一。洞山。洞山の守初禪師と申して雲門大師の法を嗣いた方で、宗憲大師と云ふ謚を賜つた高僧である。
二。鐵蒺藜。戰爭の時に鐵丸に針を植へたやうなものを道路にふりまいて置いて敵兵を寄せつけないやうにするものだから。イヤ鐵條網が張つてある。到底寄りつくことは出来まいと評する。
三。天下の稱僧も跳不出。如何なる稱僧でも手たしは出来まいと先づ問いに力を入れて置く。
四。灼然。イヤはつきりと拜めました。光明赫灼として如何にも有り難いことであつた。

五。破草鞋。何んぢや破れ草鞋か。そんなものか何になると抑へる。
 六。桃樹を指し柳樹を罵りて秤鎚と爲す。如何なるか是れ佛と云ふに麻三斤と如何にも木に竹を接いた様な答話を與へられたのを許したもので、ツマリ狂犬が塊を逐ふて走る様に佛と云へば佛、法と云へば法と直ぐ尻をつけまはす處をからかされたものであるから、俗問に、此の野郎打ち殺して熊の膽を取るぞと云へば、何にぢやと、馬でもあるまいしと云ふた様な答話である。

第三節 本則提唱

僧問、洞山如何。佛。山云、麻三斤。下語云、雨中見果日、火裡酌清泉。

先師云く下語の意旨如何。云く月白風清。これは佛と問ふたに麻三斤と答へたは何の道理もなきぞと見る時は現成なり。爰にては現成が面なり。又無きものがあるやうに麻三斤と云ふた處を賊にも用ゆるなり。又無いと見て麻三斤と答へた時は截斷が備るなり。雨中と云ふを句中にとり、果日を現成に取り。無い處を本分に取りて見るなり。尤も此の古則で下語として用ゆるときは現成か面なれども然も賊も截斷も備るなり。先師云く別に下語ありつけて看よ。下語に云く魚行水濁。師曰く其の意旨如何。下語に曰く月白風清。辨に云く衲僧が物を云へば自然に句中が備るなり。句中と云ふも落去は何の道理もなき間、月白風清と下語するぞ。麻三斤とは油麻をはかり賣るを見て、それををつとつて麻三斤と云ふたぞと云ふ説もあり。又。佛と云ふは何の道理もなきことよと思つて麻三斤と答へたと云ふ説もあるなり。

第四節 本則評唱和譯

這箇の公案多少の人錯つて會す。直ちに是れ咬嚼し難し。爾が口を下す處無けん。何が故ぞ淡うして而も味ひなき。古人多少佛に答ふる語あり。或は云く殿裏底。或は云く三十二相。或は云く杖林山下の竹筋鞭と。洞山に至るに及んで却つて道ふ麻三斤と。妨けず古人の舌頭を截斷することを。人多く話會を作して道ふ。洞山是の時庫下に在つて麻を秤る。僧あり問ふ。所以に此くの如く答ふと。有る底は道ふ洞山東を問へば西と答ふと。有る底は道ふ爾は是れ佛。更に去つて佛を問へ。所以に遠路に之れを答ふと。死漢更に一般有つて道ふ。只這の麻三斤便ち是れ佛と。且得沒交涉。爾若し恁麼に洞山の句下に去つて尋討せば彌勒佛の下生に到るとも也た未だ夢にも見ざること所在ん。何が故ぞ。言語は只是れ截道の器なり。殊に知らず、古人の意只管に句中に去つて求めば什麼の巴鼻かあらん。見ずや古人道く、道に本と言なし、言に因つて道を顯す。道を見れば即ち言を忘すと。若し這裏に到らば我れに第一機を還へし來つて始めて得ん。只這の麻三斤一へに長安大路の一條に似て相似たり。舉足下足是ならざることあることなし。這箇の話雲門餠餅の話と是れ一般なり。妨けず會し難きことを。五祖先師願して云く、賤賣の擔板漢。貼秤

す麻三斤。千百年の滯貨、渾身を着くるに處なし。爾た情塵意想計較得失是非を打疊し得て一時に淨盡せば自然に會し去らん。

【字解】一。咬嚼し難し。此の公案鐵蒺藜で口も齒もたつことでない。

二。或は云ふ殿裏底。これは趙州和尚の答語で、僧あり問ふ如何なるか是れ佛。師云く殿裏底。僧云く殿裏は豈に是れ泥龜聖像にあらずや。師云く是なり。僧云く如何なるか是れ佛。師云く殿裏底。と云ふ公案がある。之れは一僧が如何なるが是れ佛と抄しかけたので趙州がソレハ本堂の中ちやと答へられたのである。

三。或は云ふ三十二相。如何なるが是れ佛。それは三十二相八十隨形好を具足した方で御座ると答へる。

四。或は云ふ杖林山下の竹筋鞭。僧あり風穴に問ふ如何なるか是れ佛。穴云く杖林山下の竹筋鞭と云ふ因縁がある。杖林山下の竹筋鞭と云ふには故事があるので、昔一人の外道があつて竹の杖を以つて世尊の丈六の長けを量んとした。すると世尊の身の長けがスル／＼と倍になつて三丈二尺になつた。そこで又竹を接いで量らうとすると今度は六丈四尺になつた。此の様に倍々となるものであるから外道がとう／＼根まけして其の竹の杖を擲げすて歸つてしまつた。處で其の後になつて其の竹に根が生じて一丈竹林となつたものであるから之れを杖林山と名けたと云ふことである。筋とあるは根なりで竹の根のことであるから、僧が如何なるが是れ佛と問ひかけたから、風穴和尚ナンぢや佛か。佛ならあの杖林山のネブチぢやと云はれたものと見へる。

五。遶路に之れを答ふ。ケルツとまはり道して答へられたと云ふ。

六。言語は是れ載道の器なり。月を指すの指。方を示すの地圖であると云ふ。

七。道本と言なし言に因つて道を顯はす道を見れば即ち言を忘す。月のありかだに分れば最早指の必要はない、病氣がなをれば最早藥の必要はない。相かまへて指を追いまほし藥に執着するなと教へる。

八。雲門餠餅の話。第七十七則を見よ。

九。賤賣。やすうりなり。

一〇。貼秤す麻三斤千百年の滯貨渾身を着るに處なし。洞山心ありげに掛目つよくして麻三斤と賣り與へられたが誰も買ひ得るものがないによつて千百年の今に至る迄長の間店さらしになつたは。實に結構な品物であるに何とも早や惜しいことである。然し今洞山和尚身代限りして家資分散と云ふ有様になつたから誠に是非もないことであると云ふ。

第五節 頌

金鳥急左眼半斤。快鷄趕不及。火燭裏橫身。 玉兔速右眼八兩。姪善應何曾。 有輕觸如鐵在扣。展事投機。 見洞山是錯認定盤星。自跛煞盲龜入三空谷。 土阿誰打爾子死無異。 花簇簇錦簇簇。領過依舊一般。南地竹兮北地木。 公案頭上安頭因思長慶陸大夫兒。

【讀方】金鳥急に左眼半斤。快鷄趕へとも及ばず。火燭の裏に身を横ふ。玉兔速なり。右眼八兩。姪善應何曾。有輕觸。如鐵在扣。展事を展べ機を投じて洞山を見よ。錯つて定盤星を認む。自らは是れ閑梨恁麼に見ゆる。跛煞盲龜空谷に入る。自領出去。同坑に異土なし。阿誰か爾か子を見て錯つて定盤星を認む。みは是れ閑梨恁麼に見ゆる。跛煞盲龜空谷に入る。自領出去。同坑に異土なし。阿誰か爾か子を打て死せる。花簇々錦簇々。兩重公案。一狀に領過す。舊に依つて一般。南地の竹北地の木。三重も也たあり。四重の公案。頭上に頭を安す。因つて思ふ長慶と陸大夫と。癩兒件を牽く。山僧も也た恁麼。實も也た恁麼。道ふことを解す。笑ふ合し。哭すべからず呵々。蒼天夜半に更に冤苦を添ふ。嘆。是れ什麼で。便ち打つ。

【字解】一。左眼半斤。四匁を一兩と云ひ十六兩を一斤と云ふから半斤は即ち八兩のことである。右眼と左眼と合せて一斤即ち十六兩であるから、金鳥に左眼半斤とつけ、玉兔の下には右眼八兩とつけた。麻三斤と云ふ三斤は兩にすれば四十八兩。匁にすれば百九十二匁と云ふところである。

二。快鶴。越へとも及ばず。鶴は隼鷹の類で最も飛ぶことの早い鳥である。然し金鳥の急なることは其の活快な鶴が一生懸命になつて逐ひかけても到底趕いつくことは出来ぬと評する。

三。火焰裏に身を横ふ。大抵のものは金鳥ときけば直ちに太陽とつけまはるから遂には其の火焰の裏につままれて喪身失命して終ふことである。

四。右眼八兩。これは左眼半斤とあつたに對したもので意味は全く同じこと。

五。姮娥宮裏に窟窟を作す。姮娥の事は淮南子に見へて居つて、昔し羿といふ人が西王母から不死の薬をもらつて秘して居つたのを、其の妻の姮娥と云ふものがそれを盗み出してそれを服して仙人になり遂ひに月の世界へ往つてしまつたと云ふ話である。玉兔速かなりと云ふから、多くの人は其の玉兔につきまはつて四の五の穿索を始めるから其の言語文字に附き廻はることを誡められたものである。

六。鐘の扣に在るが如し。扣はたくと云ふ字であるから即ち鐘を扣く鐘木のことである。洞山の麻三斤と答へられた處が如何にも打てば響くと云ふ極があると評する。

七。谷の響を受けるが如し。前と同じ様な意味で洞山の答は如何にも彼の山彦の聲に應じて響くが如しであると云ふ。

八。錯つて定盤星を認む。盤星は權衡の目盛のことであつて權衡と云ふものは其の計る物の輕重に應じて分銅を定めればならぬものであるにそれを一定の處にあるもの様に思ふて居るのは錯である。今も其の通り佛と云へば佛にとりつき、麻三斤と云へば麻三斤にとりついて所謂の言句上へのみ涉つて居るから決して洞山の眞意は分ることでない。

九。自らは是れ開梨窟陰に見る。イヤ雪寶そう仰せられるかそれは御自分のことで開悟などは決して左様なことは御坐らぬ。

- 一〇。自領出去。雪寶いらぬお世話をやかれるよりも先づは御自身に持つて往きなされ。
- 一一。同坑に異土なし。同じ穴の狐と見ゆる。變つた土も御坐るまい。
- 一二。阿誰か儺か鶴子を打ち死せる。イヤ誰かお腰の物を打ち折つたので御坐るか。お手本より御穿議が大切で御坐らうと云ふ。
- 一三。兩重の公案。雪寶うけうりをせられると見へる。某甲など曾つて開福和尚から承つて御坐る。
- 一四。一狀に領過す。雪寶も開福も同罪であるから同じ刑に處すべきものである。
- 一五。舊に依つて一般。相變らずか。開悟など聞くもいやぢや。
- 一六。三重も也た有り。雪寶又しても云いやる。洞山に開福に雪寶。サテ、幾度もきくものかな。
- 一七。四重の公案。麻三斤に金鳥急なりに花簇々に南地の竹諸人それ讀めたか。モウ讀めそうなものとなふ。
- 一八。頭上に頭を安す。重ね重ねの同道唱和。實に老婆心切なことである。
- 一九。癩兒件を牽く。洞山に開福それに今又長慶に陸大夫。イヤ癩兒の道連れ。何とも無様なことである。
- 二〇。山僧も也た徳慶雪寶も也た徳慶。御同感の至り御賛成申し上げる。
- 二一。呵呵。イカにも笑可しい。アハ、ウフ、。
- 二二。蒼天夜半に更に冤苦を添ふ。此の笑ふべし哭すべからずと云ふ意が悟れぬとは、偸々無念なこと。實に心外の至りである。
- 二三。咄。雪寶何を笑はるゝぞ。今更嘆なんと云ひやるなと咄破する。
- 二四。是れ什麼ぞ。抑も之れは何事であるぞと云ふて、
- 二五。便ち打す。ヒシツと打つて。之れ笑いを止め啼くを止めやれと云ふ。

【講義】金鳥急に玉兔速かなり。金鳥玉兔は太陽の中には金色の三足の鳥が居て、月の中には兔が居つて餅を拍いて居ると云ふ支那の昔話を以て日月をあらはしたもので、太陽と月が交る／＼日が出つれば月は没し日が没すれば月が出ると云ふ風に矢よりも早く出でては没し没しては出づる事を洞山が麻三斤と間に一髪を容れず閃電火の如く擊石火の如く答へられたに比況したものである。圓悟も云はれた通り爰の處は更に僧あり雪竇に問ふ如何なるか是れ佛。雪竇云く金鳥急に玉兔速かなりとも見、又金鳥玉兔之れ同か之れ異かと參究して見ねばならぬ處である。善應何ぞ曾つて輕觸あらん。應は應答と云ふから善應と云へばよき答へで洞山が如何なるか是れ佛と云ふ問にスカサズ麻三斤と答へられた處は如何にも見事な答話であつて丁度鐘木を動かせば鐘がなりオウと呼へばオウと應ずる山彦の如くである。輕觸は輕々しく觸れると云ふのであるから、洞山かるはずみには答へられぬぞ。諸人うつかり聞きながすなよ。之れ洞山の爲人親切な處であるぞと誠める。事を展べ機を投じて洞山を見れば跋鱉盲龜空谷に入る。之れは洞山が或る時の上堂に、言は事を展ぶることなく語は機を投せず言をうくるものは喪し句に滯ふるものは迷ふと云はれたのを借りて來たもので言語と云ふものは事柄そのもの、機合そのものではないのであるから間接に一應其の様子を示すことは出来るけれども、決して言語で以て直ちに其事を展開し其の機合に投契することの出来るものでないのである。然るに多くの人、やゝもすれば其の言語文字に拘泥

して洞山が麻三斤と答ふれば直ちに其の言葉に附いて廻つて其れで以て洞山の眞意を伺ふとするけれども、それは恰も彼の跛鼈や盲龜が空谷に入つて進退の自由を失するやうなもので、永劫出頭しうる期はあるまいぞと誠める。花簇々錦簇々。これは洞山の法を嗣いだ開福の德賢禪師に或る僧が如何なるか是れ古佛心と問ふた時に簇花簇錦と答へられたと云ふことであり、又、評唱にもある通り或る僧が智門の光祚和尚に向つて、洞山の麻三斤と道ふ意旨如何と問ひかけたとき、智門和尚が花簇々錦簇々と答へて更に此の僧に向つて會すやと云はれた。然るに其の僧が不會。どうも會得が出来ませんと答へたものだから智門和尚更に南地の竹北地の木と言はれたことがある。雪竇は此の話を書いて來て麻三斤の意旨を明かす材料にせられたものである。何も花簇々錦簇に限つたことではない。山の層々たる水の清々たる。雲の走るも雨の降るも森羅万象一として麻三斤の當體たらざるはないのである。因つて思ふ長慶と陸大夫、道ふことを解す笑ふべし哭すべからず、之れは故事を引いて文字言句の間に人情分別を加へては到底麻三斤の當體、洞山の眞意を解し得られるものでないと示したものである。陸大夫即ち唐の陸亘は字を景山と云ふた人で御史の大夫迄に迄なられたから陸大夫と云ふことであるか、此の人は南泉普願禪師の室に入つて在家ながらも中々のしたゝかものであつた。太和八年に南泉が遷化せられた時に、師匠の南泉が死んだと云ふので直ちに南泉の寺へ往つて追吊の法會を營み呵々として大笑せられた。すると其の寺

の院主即ち執事がこれを聞き咎めて、貴公は先師と師弟の間柄であるから哭するが當り前であるのに、それを可笑しそうに笑ふとは何事であるぞ、チトおたしみなされと尤もらしゆう説き出した處が、太夫は院主に向つて道い得ば即ち哭せん、貴僧の見處を一言云ふて見なされ、若し幸いにそれが佛祖の道に契ふて居たなれば、如何にも御説の通り働哭しましやうと出かけた處が院主は無語で何とも一言出なかつたそこで陸亘大夫嗚呼蒼天々々先師世を去ること遠しと云ふて大に働哭せられたと云ふ事である。それを長慶和尚が笑ふべし哭すべからずと評せられたのを雪竇和尚爰へ引いて來て眞實の大道は決して人情分別を以て判斷の出來るものでない今此の洞山の麻三斤もその通りであるぞと諍はれた。咦。圓悟和尚は雪竇還つて洗得し脱すや。そう申さる雪竇御自身は如何で御坐るとなじつて居らるるか、一體此の咦と云ふ字は、提起して人をして見せしむと云ふて諸人これ見よと云ふ程の意味に用い。又微笑の貌でニツコリと笑ふ意味にも用い亦冷遇の貌でフンとせせら笑いをする時にも用ゆるか今は果してどの意味であるか是れ又一段の參究を要することである。

第六節 頌評唱和譯

雪竇見得透す。所以に劈頭に便ち道ふ金鳥急に玉兔速なりと。洞山の麻三斤と答ふると更に兩

般なし。日出で月没す。日日是くの如し。人多く情解して只管に道ふ金鳥は是れ左眼玉兔は是れ右眼と。纔かに固著すれば便ち瞠眼して云く這裏に在りと。什麼の交渉か有らん。若し恁麼に會せば達磨の一宗地を掃つて盡きん。所以に道ふ鈎を四海に垂れて只獐龍を鈎る。格外の玄機知己を尋んがためなり。雪竇は是れ陰界を出する底の人。豈に這般の見解を作んや。雪竇輕々に敲關擊節の處に去つて畧ぼ些子を露して彌をして見せしむ。便ち箇の注脚を下して道ふ。善應何ぞ曾て輕觸あらんと。洞山輕しく這の僧に酬いず鐘の控に在るが如く谷の響を受くるが如く、大小に隨ひ應じて敢へて輕觸せず。雪竇一時に心肝五臟を突出して諸人に呈似し了れり。雪竇靜にして善應の頌あり云く。觀面に相呈す多端に在らず、龍蛇は辨し易く衲子は瞞し難し、金槌影動き寶劍光寒し、直下來也、急に眼を着けて看よ。洞山初めて雲門に參す。門問ふ近離甚れの處ぞ。山云く渣渡。門云く夏は甚麼の處にか在りし。山云く湖南の報慈。門云く幾時か彼の中を離る。山云く八月二十五。門云く彌に三頓の棒を放す參堂し去れ。師晚間入室親近して問ふて曰く。某甲過か什麼の處にか在る。門云く飯袋子。江西湖南便ち恁麼に去るや。洞山言下に於いて豁然大悟す。遂に云く、其甲他日人煙無き處に向つて箇の菴子を卓て一粒米を蓄へず一莖茶をうへず常に往來十方の大善知識を接待して盡く伊がために釘を抽却し楔を抜却し膩脂の帽子を拈却し鶻臭布衫を脱却して各々灑々落落々地に箇の無事の人となり去らしめん。門云く身は椰子の大的如くにして許

の大口を開き得たり。洞山便ち辭し去る。他當時の悟處直下に頽脱す。豈に小見に同からんや。後來出世應機。麻三斤の語、諸方只佛に答ふる話會を作す。「如何なるか是れ佛。杖林山下の竹筋鞭。丙丁童子來つて火を求む」一本此の句を消る只管に佛の上に於いて道理を作す。雪竇云く、若し恁麼に展事と投機との會を作さば正さに跛鱉盲龜空谷に入るに似たり。何れの年の日月にか出路を尋得し去らん。花簇々錦簇々。此れは是れ僧智門和尚に問ふ。洞山麻三斤と道ふ意旨如何。智門云く、花簇々錦簇々會すや。僧云く不會。智門云く南地の竹北地の木。僧回つて洞山に舉似す。山云く我れ汝がために説かず我れ大衆のために説んと。遂に上堂して云く言は展事なし語は投機せず言を承くる者は喪し句に滯ふるものは迷ふ。雪竇人の情見を破して故意に引いて一串となして頌出す。後人却つて轉じて情見を生じて道く、麻は是れ孝服竹は是れ孝杖。所以に道ふ南地の竹北地の木。花簇々錦簇々。是れは棺材頭邊に畫く底の花草と。還つて羞を識るや。殊に知らず南地の竹北地の木と、麻三斤と只是れ阿爺と阿爹とともに相似たることを。古人一轉語を答ふ。決して是れ意恁麼ならず正さに雪竇の金烏急に玉兔速なりと道ふに似たり。自らは是れ一般に寬曠なり。只是れ金鑰辨じかたく魚魯參差す。雪竇老婆心切にして儼が疑情を破せんことを要して更に箇の死漢を引く。因つて思ふ長慶陸大夫道ふことを解す、笑ふべし哭すべからすと。若し他の頌を論せば只頭上の三句に一時に頌了り。我且らく汝に問はん。都盧只是れ箇の麻三

斤。雪竇却つて許多の葛藤あり。只是れ慈悲忒煞し。所以に此くの如し。陸巨大夫宣州の觀察使となつて南泉に參す。泉遷化す。巨喪を聞いて寺に入つて下祭し却つて呵々大笑す。院主云く。先師大夫と師資の義あり何ぞ哭せざる。太夫云く道い得ば即ち哭せん。院主無語。巨大いに哭して云く、蒼天蒼天先師世を去ること遠しと。後來長慶聞いて云く、大夫笑ふべし哭すべからず。雪竇此の意の大綱を借りて道ふ。儼若し這般の情解を作さば正さに好し笑ふに略することなげんと。是は即ち是、末後一個の字あり妨げず警訛なることを。更に道ふ嘆と。雪竇かへつて洗得し脱すや。

- 【字解】一。洞山の麻三斤と答ふると更に兩般なし。雪竇の金烏急に玉兔速かなりと謔ふたば之れ如何なるか之れ佛と云ふに答へたとも見へると云ふ。
- 二。雪竇は是れ陰界を出つる底の人。陰界は五陰十二處十八界であるから即ち迷いの世界のこと、雪竇は既に之れ十成の人。へたな見解はなされぬと評する。
- 三。敲關擊節の處。敲關は暮の關を破つて出る處。擊節は音樂の時打つもので即ちほどひやうしであるから肝要の處と云ふほどのこと。
- 四。直下來也。端的そりや撞き掛つて來たが、諸人一太刀うつて看よと云ふ。
- 五。洞山初めて雲門に參す。洞山は鳳州真原の人で十六歳で始めて涇州總綱の志諡法師に依つて剃髮し涇州の舍利律師淨圓と云ふ人に貝足戒をうけた。雲門の室に入ったのは此の後のことである。此の下類則の提唱を聞け。
- 六。膩脂の帽子を拈却し鶴臭の布彩を脱却して。膩脂は不潔の貌でいかにも不潔な油じんだ帽子をぬがせ、鶴臭と醒臭

い布彩をぬがせてやらうと云ふ。即ち煩惱妄想會解情慮迷悟共に脱却せしめると云ふ意味である。
七。身は椰子の木の如くにして許の大口を開き得たり。椰子は國の名にもあるが其の國の人長け三尺許と云ふから極く小人國と見へる。樹木の名と見ればフクベ程のからだでありながらと云ふ意に見る。そこでソナナツハでありながら大口を控きよると雲門が云はれたのである。

八。智門。智門光祥禪師は雲門大師の法嗣香林澄遠禪師の法をついた人であるから、同じく雲門の法を嗣いた洞山とは叔父甥の間柄である。一説に此の花簇々錦簇々は直ちに洞山の法を嗣いた開福寺の德賢禪師の語であつて南地の竹北地の木と云ふは隨州の師寬和尚即ち明教大師の語であると云ふと陸菴の注に見へてある。然しそんなことはどうでも宜しい。人の穿索は又其の道の人にまかせて置く。

九。麻は是れ孝服竹は是れ孝杖。これは父死して後三年の喪に服する間は麻を以て衣となし竹を以て杖となすと云ふことであるからそれを云ふたものである。

一〇。阿爺と阿爹。父を呼ぶに江南の人は阿爺とよび江北の人は阿爹と呼ぶと云ふことである。

一一。陸亘大夫。字は景山と云ふた人で南泉和尚の法を嗣いた人であるから有名な趙州の從諗師とは同門の間柄である。宣州の觀察使をつとめ後には御史臺の大夫に迄なされた。此の因縁に就いては古人も疑を有して居るので、即ち南泉は唐の敬宗の太和八年十二月二十五日に八十七で以て遷化せられ、陸大夫は此の年の九月に七十一で以てなくなつて居るから陸大夫の方が早くなつたわけである。そこでこの因縁は餘程疑はしいと云ふのであるが之れもどうでもよいことであると思ふ。

一二。都盧只是れ麻三斤。都盧は國の名であると云ふことであるが爰では萬天下悉く麻三斤であると云ふ意味に使つたものである。

第七節 類則提唱

其一 洞山三頓

洞山初參雲門。問近離甚處。下語云。似要知米處。撓鉤搭索。

洞山を釣つて見たなり。

山云渣渡。下語云。實頭人難得。

門云夏在什麼處。下語云。初心不改。

山云湖南報慈。下語云。一處不通兩處失功。一死不再活。

門云幾時離彼中。下語云。生美終不改辛。落草求人。

山云八月二十五。下語云。鼠口終無象牙。

門云於三頓棒參堂去。下語云。擗歇結案。

爾に三頓棒を放すと白狀して句中をあらはしたなり。之れ洞山の終に象牙なきところを結案したるもの。

師晚間入室親近。問曰某甲。過在什麼處。下語云。至不知非不知醫。

門云飯袋子。江西湖南恁麼去。下語云。白棒不在手耶。

飯の入れたる袋をもちあるいたばかりで句中をば識らざるぞ。言句に涉ふより打殺すべきに打ぬは手のびなり。

洞山於言下大悟 下語云。中毒者知毒用。

其二 陸巨參南泉

陸巨大夫作宣州觀察使參南泉泉遷化巨聞喪入寺下祭却呵々大笑。下語云。因苗辨地。笑中有刀。

句中の方から呵々大笑したぞ。苗に因つて地を辨すと云ふは隨處苗を栽る如く句中も其處に應じて答語をし働きをなすを句中と云ふぞ。物に應じて伶俐なるを作家漢と云ふなり。句中と云ふは一片に定まらざるぞ。喪は死のことぞ。下祭はまつりのことぞ。又云く吊に往つては愁嘆こそすべきに却つて笑ふたは賊ぞ。南泉の遷化にちなんて諸人を勘辯したぞ。

院主云先師與大夫有師資之義何不哭。下語云。釣得箇死蝦蟇。句中を心得ずして釣りにのつたぞ。師資は師弟の義なり。

大夫云道得即哭。下語云。劈箭急。

我が笑つた境界を心得たらば一句道へ。道い得たらば哭せうすと云ふて責めつめて急に見届け

やうとしたぞ。

院主無語 下語云。果然。一死不再活。弓折矢盡。

何れも落し句なり。

巨大哭云蒼天蒼天先師去世遠矣 下語云。痛處下針錐。

句中を知らざるはなげかほしいことぢや。先師の法早く廢れたるかと云ふていたためて知らしめようとしたぞ。蒼天蒼天はサテ〜と云ふた方ぞ。

後來長慶問曰大夫合笑不合哭 下語云。知音更在青山外。同道方知。

大夫の句中に知音して云ふたなり。笑にも哭にも用なし。

其三 道本無言

道本無言 下語云。車不橫推。

道とは本分なり、本分の上は言句には述べられぬぞ。善とも惡とも是とも非とも云はれぬ處をまつすぐに云ふたぞ。

因言顯道 下語云。理無曲斷。

本分は言葉で述べられず又心行所滅のものぢやと云ふところが則ち言葉を以つて道を露はした

ものぞ。此れもまつすぐに云ふたものぞ。

第十三則 巴陵提婆宗

第一節 垂示

垂示云。雲凝大野。徧界不藏。雪覆蘆花。難分朕迹。冷處冷如氷雪。細處細如米末。深深處佛眼難窺。密密處魔外莫測。舉一明三。即且止。座斷天下人。舌頭作麼生道。且道是什麼人。分上事。試舉看。

【讀方】 雲大野に凝つて徧界藏さず。雪蘆花を覆ふて朕迹を分ち難し。冷處は氷雪よりも冷かに、細處は米末よりも細やかなり。深々たる處佛眼も窺ひ難く、密々たる處魔外も測ること莫し。舉一明三は即ち且らく止く。天下人の舌頭を座斷して作麼生か道はん。是れ什麼人の分上の事ぞ。試みに舉す看よ。

【講義】 雲大野に凝つて徧界藏くさず。大野は廣々とした平野であるから宇宙法界と云ふも同じことで、即ち法性真如の雲が無限の空間に充塞して、露堂々明歷々聊かの覆いかくすところもなく全體丸る出しである。雪蘆花を覆ふて朕迹分ち難し。雪は白いものであるが、其の雪が亦眞白なあしの花の上に積つたのであるから、雪が蘆花やら、蘆花が雪やら更に分ちがつかぬ。朕は朕兆と熟する字で即ち吉凶のキザシと云ふことであるから、物事が未だ形の上にはあらはれないのか

朕。迹は蹤迹と云ふから已に其の形が明瞭にあらはれた上のことである。そこで今雪と蘆花とが一様にまつ白であるか全く一つかと云へばそうではない雪は雪なり蘆花は蘆なりでたしかにその朕はある。然らば孰れが雪の色で孰れが蘆花の光りかと云へば全く同一色であつて其の迹は認められぬ。雪も蘆花も只白漫々更に分ちはつかぬのである。冷處は氷雪よりも冷かに細處は米末よりも細やかなり。總へて冷いものと云へば氷雪より冷たいものはない。又細かいものと云へば米の粉ほど細かいものはないと云ふが普通の常識であるが、宇宙の本體本性、即ち徧界不藏にして朕迹を分ち難いところの眞如法性なるものは、廣いと云へば廣大無邊際で無限の空間に充塞し、細いと云へば一微塵の中にも宛然たりで實に何とも角とも形容のして見やうのないものである。それであるから、其の深々たる處は佛眼も窺い難しで、三世諸佛の佛眼法眼を以てしても窺い知ることが出来ぬ。密々たる處は魔外も測ること莫しで、其の微密深密なる處は如何なる惡魔外道と雖も容易に測り知ることが出来ぬ。舉一明三は且らく止く。されば此に至りては舉一明三の俊發伶俐の徒は且らくさし置いて、天下人の舌頭を座斷して、如何なる人も何んとも角とも皆の下し様のない批評のして見様のない様には作麼生が道はん。何と云ふたものであらう何んと諸人は是れ什麼人の分上の事ぞ。それは抑も如何様なる人であらうぞ。試みに舉す看よ。爰に好例があるから舉揚して見せやう程に參究して見よと云ふ。

第二節 本則

舉僧問巴陵。如何是提婆宗。白馬入蘆花。巴陵云。銀碗裏盛雪。塞斷咽喉。

【讀方】僧あり巴陵に問ふ。如何なるか是れ提婆宗。白馬蘆花に入る。什麼と道ふぞ。點。巴陵云く、銀碗裏に雪を盛る。爾の咽喉を塞斷す。七花八裂。

【字解】一。巴陵。巴陵は即ち岳州の巴陵で爰に新開院と寺があつて顯聖禪師が住して居られた。禪師は法を雲門大師に嗣いだ人で、當時頗る名聲の高かつた人であるから、名を云はずとも、巴陵とだに云へば直ぐに禪師のこととなつて居つたものと見へる。

二。如何なるか是れ提婆宗。之れは江西の馬祖大師が凡そ言句あるものは是れ提婆宗と云ふことを言はれたことがあるが、此れが當時の大問題になつて餘程多くの人に參究せられたものと見へる、それを巴陵大師が雲門大師に奉られたと云ふ三轉語と云ふものの中の第三轉に如何なるか是れ提婆宗。銀碗裏に雪を盛ると言はれてあるが、雪裏禪師はそれを取り出して頌古百則の中に加へて一公案とせられたものである。提婆宗と云ふは、提婆は即ち迦那提婆尊者で印度の二十八祖の中は第十五祖に當る方である。此の人は初めは外道の禪學で極る南天竺に盛名をばせた人であるが後に龍樹菩薩の教化をうけて遂に附法藏の祖師となつて釋迦如來より迦葉阿難と相承し來つた佛祖的傳の第十五祖となられた。尊者は非常に能辯な方で且つ頗る議論が達者であつたから、如何なる外道も皆降伏せられて向ふ處敵なしと云ふ位であつたため、之れを提婆宗と名けて大層な勢いであつた。然る處元來眞實の佛法は所謂る不立文字教外別傳で議論や辯說を超越したものである。此の提婆菩薩が言論辯說を以て一種の宗風を作られたものであるから、馬祖大師が凡そ言句あるものは是れ提婆宗と云はれたものと見へる。

- 三。白馬蘆花に入る。白馬は白いもの、蘆花も亦白いもの。どれも白妙の一色で朕迹が分ち難からうと云ふ。白馬は白波のこと、云ふ説もあるが、何れにしても宜しい。
- 四。什麼と道ふぞ。諸人それ聞き處ぢや。提婆宗と云ふのがあるそうぢや。ソレ聞きもらすな。
- 五。點を點定とればそれも宜しからう。先づ問ふて見やれと同意することになり。點破とれば、イヤ餘計な問ぢや。さなきだに大乘小乘顯教密教とうるさいことぢやに、又してもいらぬ問を持ち出したとしりぞける意味となる。
- 六。銀碗裏に雪を盛る。これは雪蘆花を覆ふとか白馬蘆花に入るとか云ふと同じことで寶鏡三昧には銀碗に雪を盛り明月に鏡を藏すと云はれて、類して齊しからず混する時は即ち處を知ると釋されてある。爰が即ち垂示に徧界かくさず朕迹を分ち難しと云ふところ。
- 七。爾の咽喉を塞断す。諸人咽喉を責め塞がれてキツトモ言はれまいと云ふ。
- 八。七花八裂。不二老人は散々の義なりと釋して、此の一言で以つて提婆宗の議論が散々打ち破られたと見て居られる。一説に七通八達の義に取つて、句中に答得ず、之でわかつたであらうと能く答へられたと取る説もあるが前説の方が面白い。

第三節 本則提唱

僧問巴陵如何是提婆宗 下語云問得可始得

銀碗裏盛雪 下語云半夜放鳥雞

提婆は佛の時外道でありたが後に佛の弟子となりた。提婆宗と云ふ。されども斷絶してなきなり。其のない處を取つて本分に用ゆるぞ。又辯して云く。勿論本分なり。提婆宗と云ふも佛と云

ふも同宗よと云ふ意にて銀碗裏盛雪と答へたものよ。白き物に白き物を入れた程のことよと云ふた事なり。半夜放鳥雞と云ふも野碗裏盛雪と云ふも同意なり。

【字解】一。提婆は佛の時外道であつた云云。馬大師の凡そ言句あるは是れ提婆宗と云はれ、爰に如何なるか是れ提婆宗と問ふた提婆は圓悟の評唱で見ても附法藏の第十五祖迦那提婆尊者のことであるが、三江老師の是の提唱には、提婆は佛の時云と云ふてあるから、所謂釋迦に提婆と云ふ提婆、即ち釋尊の從弟に當る提婆達多のこと、見て居られる様である。提婆の門業は一旦阿闍世王の歸依をうけて餘程盛へたものであるが、其後釋尊入滅前に阿闍世王が再び正道に歸して銳意熱心に遺教の傳通に盡力したために爰に最も有力なる保護者を失つて甚だ衰微した様であるけれども、實際に於ては依然として相當の勢力を有して佛滅後數世紀の後迄も其の教勢を維持して居つた様である。之れが即ち提婆宗で其の教徒は提婆達多を教祖として仰いで居る。三江老師は之の提婆宗のこと、見て居られる様であるが取捨は讀者の判斷にまかせるとして、一言ことわつて置く。

第四節 本則評唱和譯

這箇の公案人多く錯つて會して道ふ。此は是れ外道宗と。什麼の交渉かあらん。第十五祖提婆尊者は亦是れ外道中の一數なり。因に第十四祖龍樹尊者に見みへて針を以つて鉢に投ず、龍樹深く之れを器とし佛心宗を傳ふ。繼いて第十五祖となる。楞伽經に云く、佛語心を宗となし無門を法門となす。馬祖云く凡そ言句ある是れ提婆宗なり。只此箇を以つて主となす。諸人盡く是れ袈僧門下の客還つて會つて提婆宗を體究し得べけんや。若し體究し得ば西天九十六種の外道汝に一

時に降伏せられん。若し體究不得ならば未だ著しく袈裟を返被し去ること存らんを免れず。且らく道へ是れ作麼生。若し言句是なりと道は、也た沒交渉。若し言句不是なりと道は、也た沒交渉。且らく道へ馬大師の意什麼の處にか在る。後來雲門道く、馬大師の好言語只是れ人の問ふなし。僧あり便ち問ふ。如何なるか是れ提婆宗。門云く九十六種。汝は是れ最下の一種と。昔し僧あり大隋を辭す。隋云く什麼の處にか去る。僧云く普賢を禮拜し去る。大隋拂子を豎起して云く、文珠普賢盡く這の裏に在り。僧一圓相を畫し手を以つて師に托呈し又背後に抛向す。隋云く、侍者一貼の茶をもち來つて這の僧に與へ去れと。雲門別して云く、西天には頭を斬り臂を截る。這裏は自領出去と。又云く、赤幡我が手裏に在りと。西天にては論議に勝つものは手に赤幡を執る。負墮する者は袈裟を返被して偏門より出入す。西天にて論議せんと欲すれば、須らく王勅をうけて大寺の中に於いて鐘をならし鼓を撃ちて然して後に論議することを得べし。是に於いて外道僧寺の中に於いて鐘鼓を封禁して之れが爲めに沙汰す。時に迦耶提婆尊者あり、佛法に難あらんことを知つて遂に神通をめぐらして樓に登つて鐘を撞つて外道を撞せんと欲す。外道遂に問ふ、樓上に鐘を聲らす者は誰ぞ。提婆云く天。外道云く天は是れ誰ぞ。婆云く我れ。外道云く我れは是れ誰ぞ。婆云く我は是れ汝。外道云く爾は是れ誰ぞ。婆云く爾は是れ狗。外道云く狗は是れ誰ぞ。婆云く狗は是れ爾。是くの如くすること七返。外道自ら負墮することを知つて義に伏して遂に自

ら門を開く。提婆是に於いて樓上より赤幡を持して下り來る。外道云く汝何ぞ後れざる。婆云く汝何んぞ進まざる。外道云く汝は是れ賤人か。婆云く汝は是れ良人か、是くの如く展轉酬問す。提婆折くに無礙の辨を以てす。是れに由つて歸伏す。時に提婆尊者手に赤幡を持す。義墮するものは簷下に立つ。外道皆首を斬つて過を謝せんとす。時に提婆之れを止めて但だ化して髪を剃つて道に入らしむ。是に於いて提婆宗大いに興る。雪竇後に此の事を用いて之れを頌す。巴陵をば衆中に之れを鑿多口と謂ふ。常に坐具を縫うて行脚す。深く他の雲門脚跟下の大事を得たり。所以に奇特なり。後出世して法を雲門に嗣ぐ。先づ岳州の巴陵に住す。更に法嗣の書を作らず只三轉の語を得ても雲門に上る。如何なるか是れ道。明眼の人井に落つ。如何なるか是れ吹毛の劍。珊瑚枝々月を撐着す。如何なるか是れ提婆宗。銀椀裏に雪を盛る。雲門云く他日老僧が忌辰只此の三轉語を舉せば恩を報すること足りなん。自後果して忌辰の齋を作さず、雲門の囑に依つて只此の三轉を舉す。然も諸方此の語に答ふるに多くは事上に就いて答ふ。唯巴陵のみ有つて慙麼に道ふ。極めて是れ孤峻なり。妨けず會し難きことを。亦些子の鋒鋦を露さず。八面に敵をうけて著々出身の路あり。陷虎の機あつて人の情見を脱す。若し一色邊の事を論せば這の裏に到つて須らく是れ自家透脱し了るべし。却つて須らく是れ人に遇ふて始めて得心す。所以に道ふ。道吾笏を舞せば同人會し、石鞮弓をひけば作者諳んず。此の理若し師の印授すること無んば、何の法を持

つてか玄談を語らんと擬すや。雪竇後に随つて拈提して人のためにす。所以に頌出す。

【字解】一。提婆尊者。提婆尊者の傳記は提婆菩薩傳と云ふまとまつたものが一卷あつて、羅什三藏が翻譯して居られることであるが此外附法藏因緣傳にも詳しく出てあるから、それ等を見るが宜しい。提婆具には伽那提婆と云ふて秦には小目天と翻譯してある、之れは尊者は一目を缺いて居られたからと稱せられて居る。又阿梨耶提婆とも云ふ。之れを唐には聖天と翻譯する。幾多の著書があるが、其の中でも百論の偈文。外道小乘涅槃論。外道小乘四執論等が最も有名なもので殊に百論は龍樹菩薩の中論及び十二門論と共に三論宗の根本典籍となつて居る。生れは南天竺の婆羅門種で其の元外道の論師であつたが後に龍樹の教化をうけて佛の正法に歸し好んで外道の對破をせられた。傳記によると提婆菩薩が初めて中印度へやつて來て大に龍樹と議論を戦はせて見やうと云ふので龍樹の處へ訪れて來たことがある。其の時に龍樹は兼てより提婆の盛名を聞いて居たものであるから侍者に命じて水盤に水を滿たせてそれを提婆の前に置かせた。すると提婆もさるもの直ちに一本の針を出して其の水中に投じてかへした。龍樹菩薩は之れを見て眞に智者なる哉と稱讚して遂に彼れを弟子の一人にせられたと云ふことである。又傳記によると尊者が外道と議論をする時には、いつも先づ始めに我れに勝たずんば汝我が首を斬れ。汝我れに勝たずんば必ずしも汝が首を斬るを望まずされど我が弟子となれと宣言してそれから論議を始められたと云ふことである、然し如何なるものと雖も尊者の口にかゝつては二日と支へ得ることは出來ず皆悉く降伏したと云ふことである。然るに或る時のこと一人の凶徒があつた。彼れは嘗つて尊者のために降伏せられた一外道の弟子である。彼は水もしたらん計りの白刃を揮つて菩薩の説法の坐に至り、汝は空の刃を以つて我が師を破せり。我れは鐵の刃を以つて汝が腹を破らんと云ひさま、突然刃を揮つて菩薩の腹を刺つた。然しながら菩薩は少しも驚かなかつた。いつにかはらず從容として外道に向つて、汝我が衣鉢を取つて急に去るべし。我が弟子未だ道を得ざるもの、必ず執て我が仇を報ぜんとするものあらんと諭し、靜かに後山を指して逃ぐべき問道を教へられた。其後幾くもなくして幾多の弟子衆が集まり來つた。其の中の或るものは聲を發して悲しみ哭し、又或るものは直に仇を追はんとした。然るに菩薩は之れを止めて、懇る

に、汝等知らずや諸法本來是空にして我々所なし。誰れか害を加へ誰れか害せられん。また誰をか親しみ誰をか怨まん。彼の人害する所は我の往報を害せるなり。我を害するに非ずと教へて、かくて遷化せられたと云ふことである。實に菩薩の如きは平生弘めらるゝ所の法門を實際に體得實現した人であつて、千古稀れなる偉人と云はればならぬ。

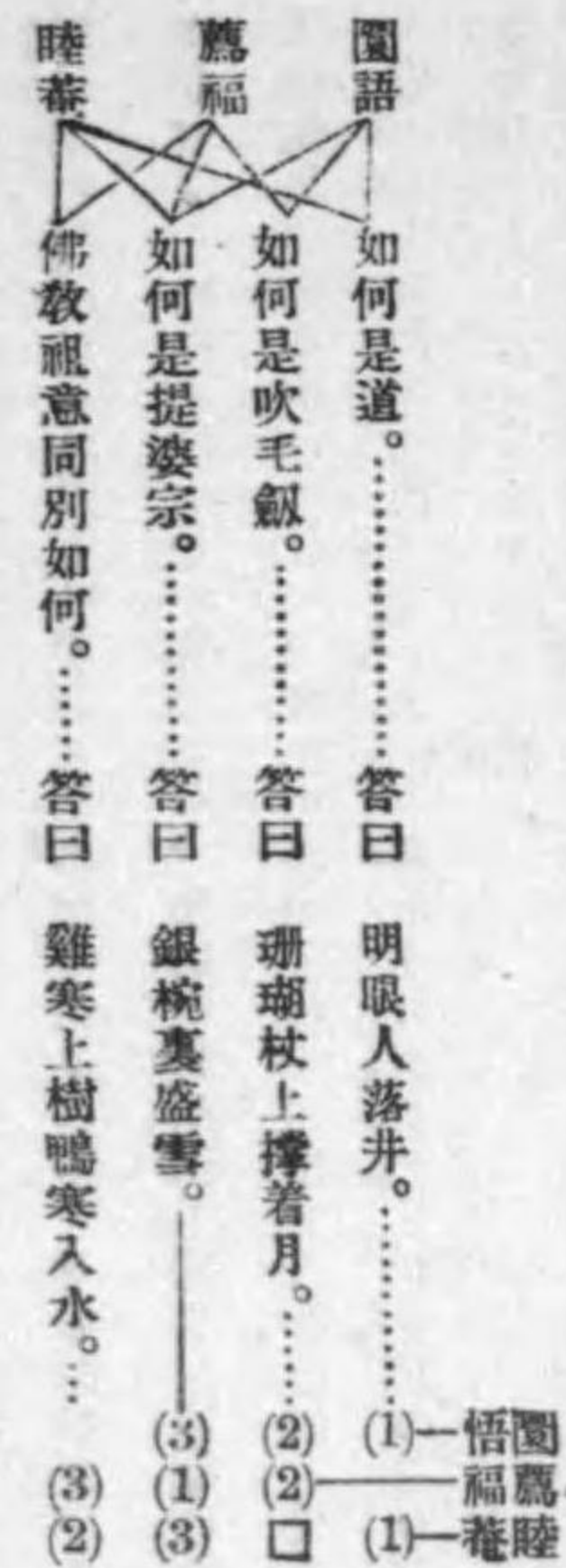
二。龍樹尊者。龍樹尊者の傳は附法藏因緣傳の外龍樹菩薩傳と云ふ一卷の書がありて羅什三藏が翻譯して居らるゝ。梵に那伽羅樹那爰に翻して龍樹、龍勝、龍猛等と云ふが龍樹の譯名は恐らく梵漢兼稱で那伽を翻して龍と云ひ樹那を略して樹と云ふたものであらう。南天竺婆羅門種の生れで、矢張り外道の論師であつたが後に佛の正法に歸して法を迦毘摩羅尊者に嗣ぎ、又大龍菩薩に接せられて龍宮に往き幾多の大乗經典を得て南天竺へ歸つてこられた。彼の華嚴經の如きも其の一である。非常に長壽を保つた人で或は三百歳と云ひ或は五百歳七百歳と傳へられてある。著書は非常に多いので現存して居るものでも二十四部百七十卷からあるが、其の中でも大智度論百卷、中論四卷、十二門論一卷、十住毘婆論十四卷、十二禮一卷等が最も有名である。

三。楞伽經に曰く。一本には馬祖曰くになりてある。楞伽經は具さには楞伽阿跋多羅寶經と稱して四卷あつて宋の求那跋陀羅三藏の翻譯せられたものである。出處の如きはどうでも好いが、然しこれは馬大師が、汝等諸人各々自心是れ佛なることを信ぜよ、此の心即ち是れ佛心なり、達磨大師南天竺國より中華に來至して上乘一心の法を傳へて汝等をして開悟せしむ。又楞伽經の文を引いて以つて衆生の心地に印す。恐くは汝顛倒して自信せず。此の一心の法各々之れあり故に佛語心を以つて宗となし無門を法門となす云云と垂示せられたことが會元の三などに見へてあるから、楞伽經とあるも馬祖曰とあるも畢竟同じことと思ふ。

四。大隋。益州大隋の法眞禪師は神照大師と云ふ勅號を賜つた方で法を長慶の大安禪師に嗣がれた達磨大師十一世の法孫である。

五。又云く赤幡我が手程にありと。爰には雲門の語としてあるけれども實は雪竇の語である。即今外道降伏の赤幡、雪竇

の手裡にある程に、諸人首をきり臂を截り來つて過を謝し去れと云ふ。
六。鑿多口。 觀鑿大師は如何にも辯舌が達者で口の多い人であつたから時人が鑿多口とあだなしたものと見へる。
七。三轉語。 此れには異説があるから、わかり易い様に圖示して見やう。



此の内圓悟は即ち碧巖集主で此の説は今の評唱に出てある。宋の道原の五燈會元の説も之れと等しい。薦福は即ち蘆編古禪師で宋の智昭の人天眼目が又此の説である。睡菴の説は亦幾分異なつて居る、取捨は讀者の意に任せた方が好からう。
八。道吾笏を舞せば同人會す。 道吾は襄州關南の道吾禪師であるから、即ち關南道常の法を嗣いた人である。曾つて徳山の會下にも連つて大事を究明せられた。笏は官者の禮を行するの時執る所の手板なりて俗にシヤクと稱すものである。形は長さ一尺三四寸厚さ二分以上潤さ二寸五分許上圓形にして下方なりと云ふのである。同人會すと云ふ同人は即ち道常禪師で監官の齊安國師の法を嗣いだ方である。道吾の語に關南の鼓を打して徳山の歌を唱起すと云ふ句がある。
九。石鞿弓を彎げば作者請す。 石鞿は撫州石鞿の慧藏禪師で法を馬祖に嗣い人であるが出家前は一個の獵師であつた。一日鹿を逐ふて遇然にも馬大師の住庵前を通つた時馬大師に教化せられて佛門に入られたと云ふことである。作者とあるは障州三平の義忠禪師で法を潮州の大願和尚に嗣いだ人であるが、始めは石鞿の慧藏禪師の提撕をうけられた。傳燈錄には其の時の様子を、初め石鞿に參す。鞿常に弓を張りて箭を架け機に接す。忠法席にいたる。鞿曰く箭を看よ。忠乃ち胸を撥開して曰く此れは是れ殺人箭か活人箭か又た作麼生。鞿弓絃をひくこと三下す。忠乃ち禮拜す。鞿曰く三十年弓をば

り箭を架してたゞ半聖人を射得せりと云ふて遂に弓箭を拗折すと申してある。

第五節 類則提唱

其一 僧辭大隋

昔有僧辭大隋。隋云什麼處去。下語云。似要知去處。辭すは歸ることなり。去處を知らんと云ふに似たり。

僧云禮三拜普賢去。下語云。深辨來風。有問有答。

大隋豎起拂子云。文珠普賢盡是在這裏。下語云。因風吹火。勘破了也。

僧畫一圓相以手托呈師。又拋向背後。下語云。青於藍冷於水。

句中を心得て動いたほどに此の下語を用ゆるぞ。大圓禪師覺圓の下語に云く以三常住物一作三自己用と誠に殊勝なり。

隋云侍者將一貼茶來與這僧去。下語云。何不行令。作家相見。吾家尋常茶飯。此の僧の色々に働いたも祇僧家尋常の茶飯よ。何不行令の句は此の僧が色々働いたよりも打つか喝するかしたならば好からうものをと臨濟宗の眼から見かけてしたる下語なり。

雲門別云。西天斬頭截臂這裏自領出去。下語云。傍人有眼。

手を以つて師に托呈し或は背後に抛向して色々に模様をなしたをも打ちも喝しもせず、手のびなも好きぞ自領出去したものと雲門の批判なり。

又云 赤幡 在ニ我 手裡。下語云。倚勢欺人。滅人威光。

僧が色々に振り舞ふたところを抑下して赤幡我が手裡にありと云ふたものなり。赤幡の故事は、西天の風習に論議するにあたりて勝者は手に赤幡をとり負墮するものは袈裟を返被して偏門より出入することあり。それを指したるものなり。赤幡我が手裡に在りとは自負して云ひしものぞ。

第六節 頌

老新開 千兵易得一將 端的別 是什麼端的。頂門 解道 銀碗裏 盛雪 兩重公案。多

身失命 九十六箇應自知 兼身在內。團聚還 不知却 問天邊 月一 出去。望空啓告

提婆宗 提婆宗 道什麼。山僧在 赤幡之下 起清風 百雜碎。打云 已着了也。爾且

【讀方】 老新開 千兵は得やすく一將は求め難し。多口の阿師。端的別なり。是れ什麼の端的ぞ。頂門上の一着夢にも見

るやまた未しや。道ふことを解す銀碗裏に雪を盛る。銀跳んで斗を出でず。兩重の公案。多少の人喪身失命す。九十

六箇應さに自ら知るべし。身を兼ねて内に在り。團聚還つて知るや。一坑に埋却せよ。知らざれば却つて天邊

の月に問へ遠くして遠し。自領出去。空を望んで啓告す。提婆宗 提婆宗 什麼と道ふぞ。山僧這裏に在り。滿口に霜を含

む。赤幡之下 清風を起す。百雜碎。打して云く已に打着了也。爾且らく去つて頭をさきり臂を截り米れ爾かために一句を道はん。

【字解】 一。千兵は得易く一將は求め難し。團聚の昔くらへの様な和尚は幾らでもあるが巴陵禪師の如き宗匠は實に千載

にも得がたいことである。

二。多口の阿師。此の老僧中々饒舌である。いらぬ口をきやる。

三。是れ什麼の端的ぞ。其の端的の處はどこにあるぞ、誰人能く審細に参究し來れ。

四。頂門上の一着夢にも見るやまた未だしや。巴陵和尚の見識の高き、何んと諸人夢にも見る、ことなるまい。

五。銀跳るも斗を出でず。天下の稱僧も跳不出。いや千古萬古出ることなるまい。

六。兩重の公案。雪實重ねて頌せられたが、諸人まだ讀めぬか。

七。多少の人が喪身失命。幾多の人が爰で失命することぢやが、人人爰で活き選つて看よ。

八。身を兼ねて内に在り。雪實そう云はれる御自身も亦その九十六種のお仲間よ。

九。團聚還つて知るや。雪實お前は御存じかなと雪實に當つて座下を點檢する。

一〇。一坑に埋却す。イツソコト九十六種の外道悉く一所に一つ穴へ埋めて仕舞ふと云ふ。

一一。遠くして遠し。天邊の月なんで遠くて到底問はれまいと云ふて、遠ければ汝の眉毛にでも尋ねて見よと評する。

一二。自領出去。雪實問いたければお前自ら問ふて見なされ。何も他人に問ふて見る迄もなからう。

一三。空を望んで啓告す。諸人仰いで看よ。天籟の聲でも聞こへよう。先づ問ふて見よ。眉毛でも返事を仕様ふにと云ふて、畢竟人人鼻孔が有耶ふにと評する。

一四。什麼と道ふぞ。雪實何と云はる、それは外道宗でもあるかのときとかめる。

一五。山僧道のうちに在り。まかり出でたるものは團悟老人と申すもので御座る。先き程より彼處に居れむりを致して御

座るか……

一六。満口に霜を含む。雪寶霜は含くめまい。その上云はれるかのふ。

一七。百雜碎ひやくざつさい。ソソナ赤旗が何になるかの、ソレハ平家の旗印で御座らうと云ふて、アソレ壇の浦の一場の夢と評する。

一八。打ちて曰く打着了也。ソレ打ち砕いて仕舞ふた。諸人赤旗はどうなつたのふ。

一九。爾且らく去つて頭を斬り臂を截り來れ爾がために一句を道はん。邪心滿てり理も亦入らずと云ふぞ。爾が妄想妄念智解分別を抛却し來れ。爾に聞かすべき一句がある程にと示す。

【講義】老新開らうしんかい。老新開の新開は即ち岳州巴陵の新開院で顛鑿大師の住持して居られた寺の名である、それに老の字を加へて老新開と喚んだのであるから、巴陵和尚を尊敬して其の名號を喚び上げたものである。端的別たんだいべつなり。端的は眞實の義であるから之れも巴陵和尚を尊敬して云ふたもので、實に巴陵和尚は又格別な方である。道ふことを解す銀碗裏に雪を盛ると。之れは本則をその儘讀み上げたもので、如何にも格別な答話ぶり、何とも早や恐れ入つたものであると飽く迄巴陵和尚を托上して欽仰の意を表する。之れで全く本則を頌し畢つて已下は即ち雪寶の例の如き拈弄である。九十六箇應に自から知るべし。これは雪寶の後録によると、一僧がありてそれが巴陵の師匠の雲門大師に向つて如何なるか是れ提婆宗と問ふた時に、大師はそれに答へて西天九十六種備は是れ最下の一種と云はれたことがある。九十六種の外道と云ふは釋尊在世の頃に印度には九十六派の外道があつたと云ふことがあつて畢竟幾多の外道の種類と云ふ程のことであるか、古

來の計算法によると、涅槃經などに出てある六師外道の各々に十五人の弟子があつたと云ふから合せて九十人それに根本の六師外道を加へるから九十六人の外道と云ふことになるのである。六師外道と云ふは、一富蘭那迦葉ふらんなかしやう。二末伽梨俱舍利子まつかりくしやうりし。三刪闍耶毘羅胝子せんじやくひらせんし。四阿耆多翅舍飲婆羅あきたしじやくんばら。五迦羅毘陀迦旃延からくたかせんえん。六尼健陀若提子にけんたやくたけいしの六人である。附法藏の第十五祖伽耶提婆尊者は其の元外道の一勇士でありて盛名五天に走する計りの人であつたが、一度龍樹に相見してより忽ち佛の正法に歸し、今迄正法を誹謗した其の舌根で以つて今度は飽く迄も外道の論師と論戰を試み悉く之れを碎破せられたと云ふことであるが、必ずしも九十六種の外道に限つたことはない、三世の諸佛も歴代の祖師も此の一事は自ら明らむるより外はないのでありて、他人に問ふてわかるものでもなければ、又他人に授けて知らせることも出来ぬ。冷暖自知。全く自分と自分に知るより外ないのである。知らずんば却つて天邊の月に問へ。之れも古徳か如何なるか之れれ提婆宗と云ふ間に答へて天邊の月に問取せよと答へられたと云ふことであるか、何んと諸人自ら知ることが出来なければ他に向つて問ふより別的手段もないが、若し月に問ふたならば月は果して何と答へるであらう。星は果して何と答へるであらう。此れ又須らく諸人の參究すべき處であると思ふ。提婆宗提婆宗、之れは雪寶がこゝで更に一氣轉をきかした處で、俄かに大聲叱呼して提婆宗提婆宗は南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛と唱へ出した。之れで宇宙法界、三世の諸佛も歴代の祖師も。天魔旬波

九十六種の外道も皆悉く只一色の提婆宗になつてしまつた。赤旛の下清風を起す。赤旛は上にも出た通り昔し印度では佛弟子と外道とが論議をする時には、論議に勝つた方は高く赤旛を建て、凱歌を奏し、負けた方は頭をさきり或は臂をさきりて其の屈する所を謝すると云ふが風習であつたやうな。今雪竇和尚は前句の提婆宗提婆宗と云ふ一令の下に宇宙法界、釋迦も達磨も耶蘇も孔子も皆悉く征服して實に比類まれなる大勝利を得られたことであるから、右手高く赤旛をかざして聲もほがらかに赤旛の下清風を生ずと詠いたしたものである。赤旛の下清風を生ず、赤旛の下清風を生ず。諸人靜かに詠つて見られよ。天地悉く一色清風、錦簇々花簇々で何とも角とも云はん方なき好風光。爰が雪竇の見識を見せられた處であらう。

第七節 頌評唱和譯

老新開、新開は乃ち院の名なり。端的別なり、雪竇讚歎するに分あり。且らく道へ什麼の處が是れ別處。一切の語言皆是れ佛法。山僧此くの如きの說話什麼の道理をか成じ去らん。雪竇徴しく些子の意を露して道ふ。只是れ端的別なりと。後面に打開して云く、道ふことを解す銀椀裏に雪を盛ると。更に備がために箇の注脚を下す。九十六箇應さに自知すべし。負墮して始めて得ん。爾若し知らずんば天邊の月に問取せよ。古人曾つて此の語に答へて云く天邊の月に問取せよと。

雪竇頌し了りて末後に須らく活路あつて獅子返擲の句あるべし。更に提起して備がために道ふ、提婆宗提婆宗。赤旛の下清風を起こす。巴陵道く銀椀裏に雪を盛ると。什麼としてか雪竇却つて道ふ。赤旛の下清風を起すと。還つて雪竇人を殺すに刀を用いざることを知るや。

【字解】一。老新開。之れは前にもあつたとをり、岳州巴陵の新開院が即ち顯慶大師の居られた處である。
二。古人曾つて此の語に答へて云云。此の本據は古來未見と云はれてある。山僧又知らず。

第十四則 雲門對一說

第一節 本則

僧問_ニ雲門_一如何_{ナルガレ}是一代時教_{直至今今不了。座} 雲門云_{對一說} 無孔鐵鏈_{七花} 咬_生

【讀方】 僧雲門に問ふ如何なるか是れ一代時教。直に如今に至りて了せず。座主會せず。葛藤窟裏。雲門云く對一說無孔の鐵鏈。七花八裂。老鼠生薑を咬む。

【字解】 一。雲門。雲門大師のことは第六則の下で詳して述べた通り諱を文假と申して雪峰禪師の法を嗣いだ人で門下には洞山の守初、徳山の緣密。香林の澄遠など云ふ諸大家があつて遂ひに一家の規模を立てられたから禪宗の五家七宗の中で雲門宗と稱する一宗の高祖と仰がるゝ様になられたことである。

二。直に如今に至りて了せず。何にも此の僧に限らず滿天下の人誰ありて一代時教を充分に會得をして居るものはあるまい。

三。座主不會。座主は經論章疏を研究して文字言句の間に佛法を求めて居る即ち教相家のことであるから、五時だの八教だの五教だの十宗だのと何程研究しても一代時教は不會であらうと云ふ。

四。葛藤窟裏。葛ばクズ藤はフヤであるから何れも蔓類で上になり下になりてモツレ／＼して居るがいつ迄たつても解けそうにない。そこを一代時教八萬の法藏に喩へたものである。

五。對一說。これは何んと云ふことであらう。對する一説とも讀めば一に對して説くともよめ。又一説に對するともよ

める。對とは之れ何に對する對であるぞ、一とは何のことであるぞ。説とは何人が誰れのためにどうすることであるぞ。只一代時教之れ對一説。爰は參究して知るべきところ。

六。無孔の鐵鎚。何とも手のつけて見ようがない。之れ穿鑿の處なき鐵丸。

七。七花八裂。一代時教の閑葛藤を悉く打ち碎いて餘す處なしと賞めたもの。又七通八達の義に見て、雲門の答話、サテも自在なことぢやと讚仰する。

八。老鼠生薑を咬む。老はれ鼠が辛い生薑を咬んだら何んな顔をするのであらう。諸人あの老はれ座主の妙氣天烈なお顔を拜んで見よと云ふ。

第二節 本則提唱

僧問雲門如何是一代時教下語云。向鬼窟裡作活計。

門云對一説下語云。無孔鐵鎚。

一代時教として如何にも事々しきやうなれども何の道理もないところなり。一説に對ふと讀むなり。大衆に對して説法せられたまでなり。本分に對して説法したとも見るなり。一は本分なり。一説せられても一點の蹤迹もないところを本分に用ゆるなり。何の用にもたぬことよと見れば截斷も具はるなり。本分と見る時は無孔の鐵鎚當面擲とも又松風説法夢月談空とも付くるなり。衲僧向上の眼から脚實地を踏んで用ゐる間當面擲とは本人を爲人して截斷を用ゐて當面に擲つと

云ふなり。又句に云く和盤推し出す夜光の球。和盤と云ひ無孔の鐵鎚と云ふは本分を云ふなり、推し出す夜光の珠とは爲人の方なり。是れは爲人を本分に用ゆるなり。是くの如く白地の凡夫までも知らしめんがために爲人して當面擲と云ふなり。又云く無孔の鐵鎚重ねて概を下す。孔も無い鐵鎚で何として概かうたれやうぞ。打たれぬところを重ねて概を下すと云ふたは賊の方から云ふたぞ。賊が面てなり。或は又下語して句中有毒。句中有蛇とも云ふ。這の心を用いてつけたるなり。又云く鐵丸無縫罅。此句も用ゆるなり。一代時教五千餘卷も本分に對して説いた程に鐵丸に縫罅なきものぞとなり。先師抄して云く。本分に對しては何と説いたぞ。曰く無いことを知つて其のないことを本分を向いに於いて本分に對して説いたぞと云云。

第三節 本則評唱和譯

禪家流佛性の義を知らんと欲せば當さに時節因縁を觀すべし。之れを教外別傳單傳心印直指人心見性成佛と謂ふ。釋迦老子四十九年住世三百六十會、頓漸權實を開談す。之れを一代時教と謂ふ。這の僧拈し來つて問ふて云く、如何なるか是れ一代時教。雲門何ぞ他のために紛紛に解説せずして却つて他に向つて道ふの箇對一説と。雲門尋常一句中に須らく三句を具ふべし。之れを函蓋乾坤の句、隨波逐浪の句、截斷衆流の句と謂ふ。放去收來自然に奇特なり。釘をきり鐵を截る

が如し。人をして他底をト度し得ざらしむ。一大藏教只三箇の字を消して四方八面備が穿鑿のころなし。人多く錯つて會して却つて道ふ。一時機宜の事に對するが故に説くと。又道く森羅及び萬像皆是れ一法の所印なり。之れを對一説と謂ふと。更に有るは道ふ、只是れ那箇の一法を説くと。什麼の交渉かあらん。唯だ會せざるのみに非ず更に地獄に入ること箭の如し。殊に知らず古人の意此くの如くならざることを。所以に道ふ。粉骨碎身も未だむくゆるに足らず、一句了然として百億を超ふと。妨げず奇特なることを。如何なるか是れ一代時教。只箇の對一説と道ふことを消す。若し當頭に薦得せば便ち歸家穩坐すべし。若し薦不得ならば且らく伏して處分を聴け。

【字解】一。佛性の義を知らんと欲せば等。涅槃經第二十八卷に、師子吼菩薩言く世尊佛の所説の如し一切衆生悉く佛性あり云云とある取意の支であるが、當に時節因縁を觀すべしとは今日は何の時節ぞと見て見よと云ふこと。

二。一代時教。一代と云へば釋迦世尊一生八十年間その間五十餘年の説法、五千餘卷の經論、八萬の法藏を一代時教と云ふたもので天臺家では華嚴、阿含、方等、般若、法華涅槃の五時或は藏通別圓頓漸秘密不定の八教に分ち華嚴家には小始終頓圓の五教に、法相家では有空中の三時教にと色々に分つことであるが、教相者流は且らくさし置き、吾が直指單傳の宗風にありては、何と見たものであらうぞ。淨土宗の法然上人は專修念佛の元祖であるけれども人人各自に人人各自の一切經があるとして申されてある、西天の廿七祖般若多羅尊者は、或る人が貴公はナセに御經を讀まれないのかと問ふた時に、吾々は日々に是の如きの經を轉すること百千萬億卷と答へられたことであるが、何んと諸人は是くの如きの經とは抑も如何なる經典であらうぞ。華嚴には法爾恒説の經と云ひ又微塵の裏に大經卷ありと云ひ大日經には法爾常恒の本諸佛の法受陀羅是れな

りと云ひ、近くは金剛經の中に、一切の經教みな斯の經より出づ等と云ふてあるが、此等は彼の釋迦老人が一代の間に横説されたと謂ゆる一代時教と云ふものの中であらうかあるまいか。之れ顯教か之れ密教かはた自力教か他力教か。山僧の處では何のことはない朝には起き夕には寝れ腹が減つては飯を食ひ喉がかげげ水を飲む。泣くも笑ふも皆之れ一切時教。とんではれるも一切時教。伏して寝るも一切時教である。

三。一句中に須らく三句を具すべし。爰の處は類則として參究するからそれに讓つて置くとして、此の三句を具すると云ふは誰人に始まつたかと云ふに、古來雲門の三句と稱して居るから、勿論雲門大師に始まつた様であるが、其の實雲門大師の弟子に當る徳山の緣密圓明大師が徳山に三句の語あり一句は函蓋乾坤等と云はれたに基いたもので雲門大師は只函蓋乾坤目機録兩世縁にわたらず作麼生か承當せん自ら代つて云く一鐵破三關と云はれたに過ぎないのを徳山が其の意を得て三句俱に備はると云ふことを云ひ出されたものであると云ふことである。

四。一法の所印なり。華法師の寶藏論に森羅及萬象は一法の印するところとある文に依つて云ふたもので、森羅は森々羅々で地に就いて云ひ、萬象は天に關して云ふたものである。

第四節 類則提唱

其一 雲門三句

雲門尋常一句 中須具三句 謂三函蓋乾坤句 下語云。豎窮三世橫貫十方。

撻して云く其の意旨如何。下語に云く這の老賊。函は箱ぞ。蓋はフタぞ。箱の蓋ををうたやう

な中に乾坤の句があるやうに云ふたは賊ぞ。又函蓋乾坤の句に限らず本分上に至つて句と云ふことが有つてこそ。其れを函蓋乾坤の句と云はれたは三句の體調備つたぞ。されども三句の面は賊なり。

隨波逐浪句 下語云。豈第三世橫貫十方。

抄して云く意旨如何。下語に云く水長船高。泥多佛大。此の三句の面は色相の境界なり。水が長ければ船が高し泥が多ければ佛をも大きく造り又數を多く造るは色相よ。

截斷衆流句 下語同前。

抄して云く意旨如何。下語に云く滴水滴凍。此の三句の面は截斷ぞ。滴水滴凍と云ふは水も凝りてのくれば何も無きぞ。無きところを截斷に用ゆるなり。

第五節 頌

對一說 活潑々言猶在 太孤絕 傍觀有分何止壁立 無孔鐵鎚重下楔 錯會名言
漢也是泥裏洗土 閣浮樹下笑呵呵 道者方知能有幾人知 昨夜驪龍拗角折
塊雪寶也是粧飾 閣浮樹下笑呵呵 四州八縣不曾見箇漢 同
非止驪龍拗折有誰見 別別 讚歎有分須是雪寶 韶陽考人得一概 在什麼處更有
來還有證明麼啞 啞 始得有什麼別處 韶陽考人得一概 一概分付阿誰
德山臨濟也須退倒三千 那一概又作麼生便打

【讀方】

對一說 活潑々言猶在 耳不妨孤峻 太孤絕 傍觀有分何止壁立 無孔鐵鎚重下楔 錯會名言
漢也是泥裏洗土 閣浮樹下笑呵呵 道者方知能有幾人知 昨夜驪龍拗角折
塊雪寶也是粧飾 閣浮樹下笑呵呵 四州八縣不曾見箇漢 同
非止驪龍拗折有誰見 別別 讚歎有分須是雪寶 韶陽考人得一概 在什麼處更有
來還有證明麼啞 啞 始得有什麼別處 韶陽考人得一概 一概分付阿誰
德山臨濟也須退倒三千 那一概又作麼生便打

【字解】 一。活潑々。これは鯉や鯛が勢よく跳ね躍る形容であるが、雲門の答話は如何にも活きて働いてゐると稱讚する。

- 二。言猶は耳にあり。雲門の答話のしぶり今猶ほ耳底に止まつて居つて何とも忘れ難い。
- 三。妨げず孤峻なることを。對一説の一句は實に孤危峻險で寄り附き難いと重ね／＼の讚嘆である。
- 四。傍觀に分あり。よい賞めところ、さすがは雪寶である、能く見ええました。
- 五。何ぞ止だ壁立千仞のみならんや。何ら褒めても褒めきれないと飽くまで稱揚する。
- 六。豈憚の事あらんや。何もそのやうに褒めるほどのこともないと句下に死在するものを防ぐ。
- 七。錯りて名言を會す。雪寶知つたふりに言はるか、折角ながら片言で御座る。人が笑いますぞ。
- 八。雲門老漢もまた是れ泥裏に土塊を洗ふ。雲門が對一説と云はれたのが早や既に泥裏に陥つたものであるから言論に涉らざる真乗の徳を損した罪は免ることは出来ぬ。
- 九。雪寶も也た是れ粧飾。之に雪寶が重れて四の五の云はれる、實に恥の上塗りて誹謗正法の大罪は免るゝことは出来ぬ。

- 一〇。四州八縣曾つて此の漢を見ず。四州にも八縣にも此の雪竇の様に笑ふものはあるまい。之れこそ實に天下の一品である。と云ふて、諸人それ聞きもらすな。是れが雪竇如來の一大時教であるぞ。四州は須彌の四州であるから。南嶺部州なんせんぶしゅう東勝神州とうしょうしんしゅう西牛貨洲さいいがかしゅう北俱盧州ほくろしゅうの四州。八縣は四州に對して八縣と云ふ迄で別に何を指すと云ふ意味もない。
- 一一。同道の者方に知る。雲門と雪竇は良い相棒であるから定めて能く氣が合ふことであらう。
- 一二。能く幾人ありてか知る。同道知音底は中々得がたいことである。
- 一三。止だ驪龍の拗折するのみに非ず。此の僧に限つたことばはない。天下の衲僧、誰れ人も頭が上るまい。
- 一四。誰ありて見來る。其の驪龍の角を拗折した實地を誰れが見届けて來たものもあるか。
- 一五。又還つて證明するあや。其の驪龍の角を拗折したと云ふことを證明しうる分の人があるか。
- 一六。讚嘆するに分あり。雪竇能くは褒められたと云ふ。
- 一七。須らく是れ雪竇にして始めて得べし。其の別々の所を讚嘆することは雪竇でなくては出來ぬこと。餘人の眼の及ばぬところである。
- 一八。什麼の別處がある。其の別々と云ふところはどこであるぞと參究をすいめる。
- 一九。什麼の處にか在る。其の一概はどこにあるの。人々脚下を照順して見よ。
- 二〇。更に一概あり阿誰にか分付す。誰れかに呉れてやりたいものぢやが誰れかほしいものはないかと云ふ。
- 二一。徳山臨濟も也た須らく退倒三千すべし。雲門の猫なで聲には如何な徳山の棒臨濟の一喝でも及ぶことば出來ぬ。佛祖と雖も退倒三千より外はあるまい。
- 二二。那一概又作麼生。其の角を何うするぞ、我れ圓悟ならばと云ふて、
- 二三。便ち打す。こうしてへし折つて呉れやうものごと一切悉く掃蕩する之れが圓悟の一大藏經である。

【講義】 對一説。此の一頌は初めは三言二句。次が七言四句で其の間に二字句をさしはさんだ歌

であつて、先づ始めにいつもの如く本則の骨子たる對一説を聲朗らかに歌ひ出した、太だ孤絶、此の雲門大師の一代時教たる對一説は如何にも孤危嶮絶であつて何人と雖も寄り附くことは出來ぬ。無孔の鐵鎚かさねて概を下す、無孔の鐵鎚は孔のない鐵鎚であるから、針のない時計や柄のない傘と同じことで頼んと使いやうがないが、然しそれに概を下し柄を付けさへすれば完全なもので何人でも自由自在に使用することが出来る。彼の一僧が如何なるか是れ一代時教と問ひ出した問題は此の一僧に限らず何人にも困難な大問題でありて、教相者流が五時ぢや八教ぢや五教ぢや十宗ぢやと云ふて一生涯かけづりまはつて居ても中々解決のつくものでないか、さすがは雲門宗の高僧、實に偉いもので何の造作もなく對一説とたつた三字で一大藏經に概を附けて仕舞れたことぢやが、實に大師の妙手腕は恐れ入つたものであると飽く迄雲門の答話を稱揚する。閻浮樹えんぷじゆ下笑呵々げらひか。閻浮提は須彌の四州の中では須彌山の南方に在つて吾々の住んで居る世界であるが、ソコには閻浮樹と云ふ大木があつて、その枝葉が閻浮提全般を覆ふて居ると云ふことである、雪竇和尚その人間不到の閻浮樹の下に立つてカラ／＼と腹のふくるゝ迄大口をあいて笑ふと云ふ。昨夜驪龍角を拗折す。驪龍と云ふたは如何なるか是れ一代時教と撻しかけた一僧のことで、此の僧一代時教と云ふ如何にも立派そうな二本の角をさゝげて問ふて來たが、其の角は眞物でありたか、張子角であつたか、どちらであつたか知らんが、參憐にも雲門大師の對一説のために其の角

をへし折られてしまつた。雪竇は其れが可笑くてたまらぬから腹すぢたて、笑ふのであると口を極めて雲門大師の力量を讚嘆した。別々。爰でコロリと一轉して、雲門の對一説も成程めづらしい一代時敵の答案であるけれども、然し尙其の上に一段と格別な宗旨がある。韶陽老人一概を得たり。韶陽は即ち廣東路韶州縣の名である。雲門大師は對一説の名劔で以つて造作もなく驪龍の角を拗折せられたけれども、其の實それは一本丈けでありて、残りの一本は何處にどうしてあつて誰れ人が何として折るであらうぞ。諸人奮發して拗折して見よと之れが雪竇老人の一波瀾を起されたところである。

第六節 頌評唱和譯

對一説太だ孤絶、雪竇之れを讚して及ばず。此の語獨脱孤危にして光前絶後なり。萬丈の懸崖の如くに相似たり。亦百萬の軍陣の如し。備が入處なし。只是れ忒慙だ孤危なり。古人道く親切を得んと欲は、問をもち來つて問ふこと莫れ。問は答處に在り答は問端に在り。直ちに是れ孤峻なり。且らく道へ什麼のところか是れ孤峻のところ、天下の人奈所ともなし得ず。這の僧也た是れ箇の作家、所以に此くの如く問ふ。雲門又慙に答ふ。大いに無孔の鐵錘重ねて概を下すに似て相似たり。雪竇文言を使ふに用い得て甚だ巧みなり。閻浮樹下笑ひ呵々と。起世經の中に説く。

須彌南畔の吠琉璃樹閻浮州に映してうち皆青色なり。此の州は乃ち大樹を名となして閻浮提と名づく。其の樹縦横七十由旬、下に閻浮壇金樹あり。高さ二十由旬、金樹より出生するを以ての故に閻浮樹と號す。所以に雪竇自らとく、他閻浮樹下に在つて呵々と笑ふ。且らく道へ他箇の什麼をか笑ふ。昨夜驪龍角を拗折することを笑ふ。只之れを瞻之れを仰ぎ雲門を讚歎するに分あることを得たり。雲門道く、對一説と。箇の什麼にか似たる。驪龍の一角を拗折するが如くに相似たり。這裏に到つて若し慙の事なくんば焉ぞ能く慙に説話せん。雪竇一時に頌し了りて末後に却つて道ふ。別別。韶陽老人一概を得たり。何ぞ全得と道はざる。如何ぞ只一概を得たる。且らく道へ那一概。什麼の處にか在る。直ちに得たり第二人を穿過することを。

- 【字解】一。獨脱孤危にして光前絶後なり。如何にも孤危峻峭で他に比類を絶して居る。光前絶後は空前絶後と云ふに同じく古今但此の一句と云ふこと。
- 二。古人道く。南院慧顛の語。
- 三。起世經。隋の閻那崛多三藏の譯で十卷ある。此の文は其の第一卷目の閻浮提品第一に見へてある。
- 四。閻浮提。爰には勝全と翻譯をする。智度論の中には、閻浮樹の名なり。其の林茂盛なり。此の樹林中に於いて最大なり。提をは名けて州となす。此の州の上に此の樹林あり。林中に河あり底に金沙あり、閻浮壇金と名づくと見へてある。
- 五。若し慙の事なくんばいづくんぞ能く慙に説話せん。是れ何の事ぞ諸人眼を着けて看よと云ふ。

第十五則 雲門目前機

第一節 垂示

殺人刀活人劍。乃上古之風規。是今時之樞要。且道如今那箇是殺人刀

活人劍。試舉看。

【講方】 殺人刀活人劍。乃上古の風規。是れ今時の樞要なり。且らく道へ如今那箇か是れ殺人刀活人劍。試みに舉す看よ。

【講義】 之の垂示は大體に於いて前の第十二則の垂示其のまゝであるから別段改めて講義をする迄もあるまいと思ふけれども、順序であるから少し辯を加へて見ると。殺人刀活人劍。之れは刀劍と殺活とを以つて事物の兩面互ひに宛轉無碍にして始めて事物の真相實用が顯はれることを説き明されたものである。殺人刀と云へば人を殺す方であるから即ち消極の方で無とも云へば空とも云ふ、事業で申せば破壊する方、抑へつけて動かさぬ方面である。活人劍これは前の反對で積極の方面で有とも云へば色とも云ふ、事業で申せば建設する方、打ち任せて自由に働かせる方面である。之の兩方面が三尺の秋水、一本の正宗の銘刀に具はつて居る。彼の金剛の寶珠も此の通りで堅固と至つて堅ひものであるから他から破壊せられぬ。又非常に銳利であるから能く他の者を破

壊する。之れが一つの金剛寶珠に具はつてある両面の働きである。今宗師家の金剛王寶劍も又之の通りであつて、活殺両面の作用を具へて、而も互いに宛轉无碍、相依り相まつて始めて完全圓滿なる働きが出来るのである。乃ち上古の風規、是れ今時の樞要なり。風規は風俗規則であるから、これが三世の諸佛や歴代の祖師の皆同様の風俗とも規則とも申すべきもので花の咲く紅葉の散る。風の吹く水の流れる皆同一の規則である。樞要は樞機肝要であるから。これは又只にむかし計りに限つたことではない。今の時節でも之れが樞機であり肝要であつて恐らくは未來永劫變ることとはあるまいと思はれる。且らく道へ如今那箇が是れ活人刀活人劍。即今如何なるものか其の殺人刀であり活人劍であらう。昔のこと行く末へのことはどうでもよい。即今今日、何者が果して殺人刀であり活人劍であるか。試みに擧す者よ。それには爰に雲門大師の面白い答話があるから、試みに擧揚して見やう程に、能く參究して見るが宜しい。

第二節 本則

擧僧問雲門。不_レ是_レ目前_レ機。亦非_レ目前_レ事。時如何_レ。倒_レ退_レ三千里。門云。倒_レ一_レ說。出_レ。放_レ過_レ。荒_レ草_レ裏_レ。橫_レ身_レ。不得_レ。

【請方】 僧雲門に問ふ。是れ目前の機にあらず。亦目前の事にあらざるの時如何。倒退して什麼をか作す。

倒退三千里。門云く倒一說。平出。款は囚人の口より出す。也た放過することを得ざれ。荒草裏に身を横ふ。

【字解】 一。雲門。雲門大師のことは第六則の處で詳しく申した通り。諱を文假と申して雪峯禪師の法を嗣かれた方で禪宗五家と稱する中の雲門宗の高祖と仰がる人である。

二。目前の機。現在目の前そこに現はれて居る心の作用が即ち目前の機で目前の事は現在そこと顯はれて居る事柄と云ふことである。

三。躡跳して什麼をか作す。躡跳は物を排りのけることであるから。そう目前の機も事も排いのけてどうするつもりであるかと叱りつける。

四。倒退三千里。然し此の難問に出遇ふては退却するより外はあるまい。

五。倒一說。前則にあつた對一說と同じことで一說の二字には別段用はない。倒の一字が至極肝要である。倒は顛倒の倒であるから此の僧が如何にも禪者ぶつて是れ目前の機に非ず亦目前の事に非ずなと悟りを鼻先きにぶらさげたやうなことを云ふものであるから、倒一說と其の鼻先きをへし折られたものである。ソリヤサカサマになつた。目がまふであらう、と野次つたものと見へる。

六。平出。平出は差引き勘定することであるから。問も難問であるが答も難問である。そこでやり取り一般で差引き得もなければ損もあるまいと云ふたやうなことと見へる。

七。款は囚人の口より出す。款は罪人の罪状を書いた文書のことであるから、即ち豫審調書のことである。雲門大師が此の難問に對して思はず知らず其の力量をあらはされたのが罪人の白状のやうであるとして評したものであるから。全く其の通り、虚言ではあるまいと合榘をうつたものと見へる。

八。也た放過することを得ざれ。これは等閑にして居てはならぬぞ。能く調べて見るが好い。

られたのは恰も猛虎が荒草の中から威力を示すが如くであると云ひ。又一説には之れば兎を憐んで醜か覺へすと云ふ如何にも雲門大師の大慈大悲なところであると見る。どちらでも宜しからうと思はれる。

第三節 本則提唱

僧問云。門。不是目前機。亦非目前事。時如何。下語曰。深辨來風。

一切色相の上は萬事目前の境界を離れたることはないほどに、目前の機目前の事とこそ問ふべき事を、此の僧機ある僧で、怖ろしい句中を以つて答話のやうに不機不事とさかしまに云いまぎらかいて一手たくんで雲門の答話をよく勘辨して問ふた故に答話のところに着くる句を問頭にくるとなり。故に此の古則も此の問頭に答話のところにつける句を用ゐるに依つて秘曲の内ぞと云云。

門云。倒一説。下語曰。有問有答。

倒一説すと云ふは、僧の句中を勘破してサカシマに一説したと云ふたものなり。又、問在答處。又、因風吹火。此の僧問頭を答話のやうにさかしまに句中を以つて問ふた上を雲門能く勘破して問頭を其の儘少しもかへず、真直に倒に一説したものと答話せられたところが即ち答在問處なり。先師以來の御批判に、此のやうなる珍らしき一問があれば、亦倒一説と珍らしき答話が有

うぞと云云。

第四節 本則評唱和譯

この僧妨げず是れ箇の作家にして、恁麼の問頭邊を解することを、之れを請益と謂ふ。此は是れ呈解問、亦之れを藏鋒問と謂ふ、若し是れ雲門にあらずんば也た他を奈何ともせず。雲門這般の手脚あり。他既に問ひをもち来る。已むことを得ずして之れに應ず。何か故ぞ。作家の宗師は明鏡の臺に臨んで胡來れば胡現し漢來れば漢現するが如し。古人道く、親切を得んと欲せば問をもち來りて問ふこと勿れ。何が故ぞ。問は答處に在り答は問處に在り。從上の諸聖何ぞ曾て一法の人に與ふる有らん。那裏にか禪道の彌に與へ来る有らん。彌若し地獄の業を造らずんば自然に地獄の果を招かじ。彌若し天堂の因を造らずんば自然に天堂の果を受けじ。一切の業縁は皆是れ自作自受。古人分明に彌に向つて道ふ。若し此事を論せば言句上に在らず。若し言句上に在らば三乘十二分教豈に是れ言句なからんや。更に何ぞ祖師の西來を用ひん。前頭には對一説と道ひ、這裏には却りて倒一説と道ふ。只一字を争ふ。什麼となしてか却りて千差萬別ある。且く道へ訾訛什麼の處にか在る。所以に謂ふ法は法に隨つて行し、法幢は處に隨つて建立すと。是れ目前の機にあらず。亦目前の事に非らざる時如何と。只當頭の一點を消す。若し是れ具眼の漢ならば、

一點も也た他を護することを得じ。問處既に警訛。答處須らく恁麼なることを得べし。其實は雲門賊馬に騎りて賊を赴ふ。有る者は錯て會して道ふ、本是れ主家の話、却りて是れ賓家に道ふ。所以に雲門倒一説と云ふと。什麼の死急かあらん。這の僧問ひ得て好し。是れ目前の機にあらず。亦目前の事に非らざるとき如何と。雲門何ぞ他に別の語言を答へずして、却りて只他に向つて倒一説と道ふ。雲門一時に他底を打破す。這裏に到りて倒一説と道ふも、也是れ好肉上に瘡を剋る。何が故ぞ。言跡の興るは、白雲萬馬異途の由つて生ずる所なり。設使一時に言なく句なきも、露柱燈籠何ぞ曾つて言句有らん。還つて會すや麼。若し會せずんば這裏に到りて也た須らく是れ轉動して始めて落處を知る。

【字義】一。恁麼の問頭邊を解することを之れを清益と謂ふ。此句古點には恁麼の問を解する頭邊は是れを清益と謂ふと訓して前第十四則の對一説のことと解してあるが、これは宜しくない、問の字を下へ着けて問頭邊として見た方が宜いやうである。

二。呈解問。藏録問。學問ひ師答ふ是れを問答と謂ふと申して問答と云ふは師學互に應酬することである。呈解問は解を呈するの間であるから全然不知のことを問ふのではなく、己の悟りを人に呈示する時又は言葉の裡に他をやりこめやうと云ふ意趣を含んだ時の問いやうである。

三。胡來れば胡現し漢來れば漢現す。胡漢共に映し美醜共に現するのが明鏡の徳である。作家の宗師亦かくの如くならねばならぬ。

四。從上の諸聖何ぞ曾つて一法の人に與ふるあらん。三世の諸佛も歴代の祖師も本來赤裸々にして來られたものであるから、

一法の人に與ふべきものもない、けれども迷悟生死の間に居る凡夫を見ては大悲止むを得ずして無言に言をおこし無説に説をおこさればならぬ、そこで説法といふことがあるのである。

五。皆是れ自作自受。善因善果惡因惡果と云ふが因果の大法である。地獄へ行くのも天堂へ行くのも皆人々各自の業縁によるのであるから即ち自業自得と申すより外はない。それであるから諸惡莫作衆善奉行と云ふ七佛通誡もたつてくるのである。

六。三乘十二分教。乘は運載の義であるから生死の此岸から涅槃の彼岸に達する乗物である。それに大乘中乘小乘或は聲聞乘緣覺乘菩薩乘と云ふて色々の乗物がある之れを三乘と申すことである。分は分齊教は教法で、十二は(一)修多羅(契經)

(二)祇夜(應頌)乃至(十二)優婆塞舍(論議)等の十二をさしたものである。

七。且らく道へ警訛什麼の處にある。警は警訛と申して衆聲相きかざるの貌、訛は偽なり謬なりでニセアヤマリと云ふことであるから、不得要領のヨソゴトと云ふ程のことである。

八。只當頭の一點を消す。點はウナツクことであるから。此の僧點頭の直下に大悟の見地をもち來ることである。

九。謬。謬也偽也他をアナドリアザムクことである。

一〇。問處既に警訛答處須らく恁麼なることを得べし。既に錄先きをかくしヨソゴトの様に云つて見解を呈し、ムツカシソウに云ひ掛けたから、雲門の答處亦自づと然らざるを得ないのである。

一一。雲門賊馬に騎りて賊を赴ふ。敵馬に騎りて敵を追ひ、敵銃を取りて敵を打つと云ふ處で。雲門大師手に一器をも持たずして能く敵機を徹見して倒一説と點破せられたことである。

一二。異途の由つて生ずる所なり。いらの言字言句を弄するから。其の穿案がむづかしくなつて遂ひに倒見を生じ、四の五のいらの論議が生ずるのである。

は又有るがよいかと云ふに、無きも也た可、有るもまた可で露柱燈籠どちらでも宜いのである。
 一四。若し會せずんば這裏に到りて也た須らく是れ轉動して始めて落處を知るべし。人々自己の靈機を動轉して見よ、蛇の道は蛇、始めて古人の落處を知ることが出来るであらう。

第五節 頌

倒一 説 放不下。七花八裂。須彌 分一節 在爾邊在我邊。半河同死 同生爲君 訣 泥裏
 塊。着甚來由。八萬四千非鳳毛。威光。漆桶如麻如粟。三十三人入虎穴。唯我能知。一
 隊精一別 別 有甚麼別處。少擾擾忽忽水裏。月影。著忙作什麼。迷頭認

【讀方】 倒一説放不下。七花八裂。須彌南畔卷盡五千四十八。分一節彌が邊に在り我が邊に在り半は河南半は河北。同生同死君が爲に訣す泥裏に土塊を洗ふ。甚の來由をか着く。爾を放ち得ず。八萬四千鳳毛に非ず。野狐精の一隊。別別什麼の別處か有らん。少賣弄。踴跳に一任す。擾々忽々たり水裏の月青天白日。頭に迷ふて影を認む。著忙して什麼をか作す。

【字解】 一。放不下。放ち下さすと云ふのであるから手ばなし得ないと云ふことである。雪竇老人雲門の答話を手ばなし得ず握つて居らるゝやうである。道の老漢。ヨク肩も替へずに擔ふて來ましたなア。
 二。七花八裂。七通八達と見れば、雪竇の文才を賞めたことになり。又、四分五裂破壊雜亂の形と見れば、雲門の倒一説

のために一代時教悉く粉碎されたと云ふことになる。

三。須彌南畔卷盡五千四十八。此着語は二つを一つにして見るが宜しい。婆娑の教主たる釋迦世尊の一代説教五千四十八卷の黄卷赤軸が皆悉く倒一説の一語に卷き盡くされてしまつたと云ふのである。

四。爾が邊に在り我が邊に在り。雪竇一節を分けられたが、其の半分は貴公の方にありて、圓悟の方にも半分あるから、雙方に同じものが在るわけであるが、何人が來りて符合節をして見るであらう。

五。半は河南半は河北。分一節、ソチラはソチラ、コチラはコチラで、ドツチつかすのものであるが、爰何んとしたものであらう。

六。手を把つて共に行く。雲門と雪竇は好い道連れである。

七。泥裏に土塊を洗ふ。泥の中で土塊を洗ふと云ふので、同死同生と云はれるが、サツパリと垢は抜けのことである。

八。甚の來由をか着く。雪竇老人が君の爲めに訣すなと云はれるが、ハテ何ふ因縁が御座りますか。

九。爾を放ち得ず。雪竇は君の爲めと云はれるが、圓悟は一手も見せまい。諸人何と打うツ。

一〇。羽毛相似たり。似たり合つたりで謂ゆるどん栗の長くらべと云ふことである。非鳳毛とは云はれるけれども、どれ

もこれも毛色に替りは無いが、鷓鴣ばかりであらうか、中には鳳凰も居るであらうか、ナセ鳳凰の働きがないのであらう。
 一一。大愆人の威光を滅す。雪竇鳳毛に非すなどと餘り人を馬鹿にせられるやうである。佛弟子のれうちがなくなるではないか。

一二。漆桶麻の如く粟の如し。目も鼻もわからない坊さんたちが誠に多いことである。八萬四千位いではあるまい。

一三。唯我能く知る。酔いも甘いも知る人ぞ知る。實地をふんだ人でなくしては到底知れるものではない。

一四。一將は求め難し。雜兵共はいくらでも得られるけれども、雲門のやうな虎穴に入る底の老将は中々得られるものではない。

- 一五。野狐精の一隊。西天の四七、唐土の二三合せて三十三人何れ劣らぬ化け物共である。
- 一六。什麼の別處が在る。雪竇事ありげに言はれるが、鳥はカア／＼雀はチウ／＼、別段替りたこともあるまい。
- 一七。小竇弄。やいもすれば雪竇は色々な效能ばかり述べたて、押しうり計りする小竇人のやうである。
- 一八。蹄跳に一任す。飛ぶもはねるも御好み次第で、ドンチャンチャンノستنテンで、儲も面白いことである。
- 一九。青天白日。一點の雲烟もなく天地萬物歴々分明である。
- 二〇。頭に迷ふて影を認む。昔し演若多と云ふ人が暗い處で鏡を見て、己が頭が無いと云ふて騒いだと云ふことであるが、今も言句文字の上に何も騒ぎまはることは無い、氣を落ちつけて見よと云ふ處。
- 二一。著忙して什麼をか爲す。何もワイ／＼騒ぎ廻ることはいらぬ、諸人トツクリトと落附いて見よ、マア盃一ツと云ふ處である。

【講義】 倒一説これは雪竇が雲門の答話を其儘拈し來つて、此の一句で以つて破竹の如く、此の僧の間處は勿論。八萬の法藏までも打ちくだいて仕舞ふた。分一節。分節は符節のことで問と答とがカチリと附節を合するが如く間に一髪を容れる隙間もなく能く合ふたと云ふのである。同生同死君が爲めに訣す。これは雲門大師は如何にも彼の一僧のために慈悲深重で實に生死を共にする慈母の如しであると申したもので、圓悟は、敢へて憫がために泥に入り水に入り同生同死すと言はれてある。八萬四千鳳毛に非ず。本願の頌は已に済んで此れからは、例の如く雪竇の文才が溢れて頌となつたものである。釋尊在世の門弟子は八萬四千の多きに上つたと云ふことであるが。さればとて此の八萬四千の大衆が悉く釋迦の嫡子。正法眼藏を相承し得たんとは申されぬ。

其の大勢の中に只金色の頭陀磨河迦葉一人ありて正法眼藏を傳へ涅槃の妙心を後の世まで相續せられた。鳳毛は子能く父の美を繼ぐ者を鳳毛と稱すと申して、昔し宋の謝超宗と云ふ人が非常に文章を能くしたと云ふので、時の天子孝武帝が超宗に鳳毛ありと稱讃せられたと云ふ故事がある。即ち釋迦の弟子悉くが釋迦の嫡子となるわけには往かなんだと云ふことである。三十三人虎穴に入る。三十三人は西天の四七。唐土の二三合せて三十三人であつて、西天では摩河迦葉より達摩大師まで廿八代。唐土までは六祖の大鑿慧能大師迄六代。此等傳燈相承の祖師方は孰れも皆尋常一様の修行ではない。命かけて虎穴に入つて虎兒を捕へるやうな參禪辨道の辛苦艱難をなめた人計りで所謂ゆる言外に宗を會する底の機量人計りである。そこで圓悟は野狐精の一隊。海山千年の甲羅を経た古る狐ばかりぢやと云ふて居られる。別々、然し三十三祖はそうであるか爰に亦格別大切な變つたことがある。擾々忽々たり水中の月。その變つたこと、云ふのはこうである。と云ふて擾々忽々たり水中の月と云はれたので、これは筆先や口先きで以つて彼れ是れ論量すべきものではない。只明窓淨机の下聲朗らかに謠ふて見るより外はなからう。

第六節 頌評和譯

雪竇亦妨げし作家なることを。一句下に於いて便ち分一節と道ふ。分明に一着を放過して他と

手を把りて共に行くことを。他に從來放行の手段あり。敢へて彌がために泥に入り水に入りて同死同生す。所以に雪竇恁麼に頌す。其の實は他なしたゞ彌がために粘を解き縛を去り釘を抜き楔を抜んことを要す。如今却りて言句に因つて轉た情解を生ず。只巖頭の雪峯我と同條に生ずと雖も我と同條に死せずと道ふが如き、若し全機透脱して大自在を得る底の人にあらすんば、いづくもぞ能く彌と同死同生せん。何か故ぞ。他許多の得失是非滲漏の處なきが爲なり。故に洞山云く、若し向上の人の眞偽を辨驗せんと要せば三種の滲漏あり、情滲漏見滲漏語滲漏なり。見滲漏とは機位をはなれずんば毒海に墮在す。情滲漏とは智常に向背して見處偏枯なり。語滲漏とは體妙宗を失し機終始を昧ふす。此の三滲漏宜しく己れ之れを知るべし。又三玄あり體中玄。句中玄。玄中玄なり。古人這の境界に到りて全機大用生に遇ふては彌と同生し。死に遇ふては彌と同死す。虎口裏に向つて身を横へ、手脚を放得して千里萬里彌が衝み去るにまかす。何が故ぞ他の這の一着子を得るに還して始めて得ん。八萬四千風毛に非ずとは靈山八萬四千の聖衆風毛に非ずとなり。南史に云く、宋の時、謝超宗は陳郡陽夏の人、謝鳳が子なり。博學にして文才傑俊なり。朝中に比なし、當世之れを獨歩と爲す。善く文をつくりて王府の常侍となる。王の母殷淑儀薨す。超宗誄を作くりて之れを奏す。武帝其の文を見て大に嘆賞を加へて曰く。超宗誄に風毛ありと。古詩に云く。朝を罷めて香煙を滿袖に攜ふ、詩成りて珠玉揮毫に在り。世々絲綸を掌る。美を知ら

んと欲せば。池上如今風毛ありと。昔日靈山會上四衆雲の如くに集まる。世尊花を拈す。唯迦葉獨り破顔微笑す。餘は是れ何の宗旨なることを知らず。雪竇所以に道ふ八萬四千風毛に非ずと。三十三人虎穴に入るとは、阿難迦葉に問ふて云く、世尊金襴の袈裟を傳ふる外別に何の法をか傳ふると。迦葉阿難と召す。阿難應諾す。迦葉云く、門前の刹竿を倒却著せよ。阿難遂に悟る。已後祖々相傳して西天此土三十三人、虎穴に入る底の手脚あり。古人道く、虎穴に入らずんば爭かでか虎子を得んと。雲門是れ這般の人にして善能く同死同生す。宗師人の爲めにするにこと須く此の如くなるに至りて曲祿木牀上に坐すべし。捨得して彌をして打破せしむ。彌が虎鬚を拈ることを容るす。也た須らく是れ這般の田地に到りて始めて得べし。七事を具して身に隨へて以て同生同死すべし。高ぶるものは之れを抑へ、下るものは之れを擧ぐ。足らざる者には之れを與へ。孤峯に在るものをば救ふて荒草に入らしめ、荒草に落つる者を救ふて孤峯におらしむ。彌若し鑊湯爐炭に入らば我も也た鑊湯爐炭に入らん。其れ實に他なし。只彌がために粘を解き縛を去り釘を抜き楔を抜き籠頭を脱却し角駄を卸却せんことを要す。平田和尚に一頌あり。最も好し。震光不味、萬古の微猷、此の門に入り來りて知解を存すること莫れと。別々。擾々忽々水裏の月。妨げし出身の路あり亦活人の機あり。雪竇拈了りて人をして自ら去りて生機を明悟せしむ、他の語句に隨ふこと勿れ、彌若し他に隨はゞ正に是れ擾々忽々たる水裏の月ならん、如今作麼生か平

隠を得去らん、一着を放過す。

【字解】一。故に洞山云く。曹洞宗の高祖洞山悟本大師の申されたことであつて、古來洞山の三參漏と申して有名なことである。詳しく講義をすれば頗る長くなるから、人天眼目の文を抄出して講義にかへることにしやうと思ふ。若し向上の人の眞偽を辨驗せんとせば、三種の滲漏あり。機にあたつて直ちに須らく眼を具すべし。一には見滲漏謂ゆる機位をばなれざれば毒海に墮在す。明安云く、見所知に滞在するがためなり。若し位を轉せざれば一色に坐在不。言ふところの滲漏とは只是れこのうち未だ善をつくさず須らく來蹤を辨じて始めて玄機妙用を相續することを得べし。二には情滲漏、謂ゆる智常に向背して見處偏枯なり。明安云く、情境圓かならざるがために取舍に滞在し前後偏枯にして覺全からず、是れ識浪流轉途中邊岸の事なり。直ちに須らく句句二邊を離れて情境にとこほらざるべし。三には語滲漏、ゆはゆる體妙宗を失して機終始に昧し。學者濁智流轉して此の三種を出でず。明安云く、體妙失宗と云ふは語路に滞在すれば句宗旨を失す。機終始に昧しと云ふは謂く機にあたつて暗昧にして只語中に在り。宗旨まどやかならず句々須らく是れ有語中の無語無語の中の有語にして始めて妙旨密圓なることを得べし。

二。又三支あり。これを安智禪師の小參には、支中支。毘盧を越え釋迦を越ゆ。體中支。一切處自然に普遍せり。句中支。哆々和々廣長舌を出す。豈に是れ兩僧具足受用底の時節にあらずやと見へて居る。然し此の三滲漏及び三支のことは直接必要でもないから寧ろ削つた方がよからうと思ふのである。

三。南史に云く等。これは南史の謝超宗の傳を指したもので、謝超宗は謝靈運の子謝鳳と云ふ人の子であつた。姓極めて學を好み。亦文章に巧みであつたものであるから、新安の王子鸞字は孝羽と云ふた人の常侍に兼任せられた。常侍は即ち侍講とか侍從とか云ふ役と見へる。鸞は孝武帝の第八子孝敬王の子でありて母は殷氏と申した淑儀即ち女官である。此の母公の殷子がなくなつた時に謝超宗が誄詞を作つて之を奏したことがある。其の時其の文章が非常に見事であると云ふので孝武帝から超官殊に鳳毛ありと賞せられたと云ふことである。

四。古詩に云く。杜子美の和賈至早朝大明宮之詩を指したもので、絲綸は即ち綸旨のことである。

五。七事を具して身に隨へて以つて同生同死すべし。七事は左傳に武に七事あり上將之れを具すとあるから即ち大將たるものは戦いに臨む時には弓矢刀劍甲冑等の七事を用意せねばならぬと云ふのであるが、今法戰場裡にあつては、柱杖、拂子、禪板、凡案、如意、竹篋、木蛇の七を具し又大機大用、機辨迅速、語句妙靈、殺活機鋒、博學廣覽、靈覺不昧、隱顯自在の七つを具へて高ぶるものは之れを抑へ下るものは之れを擧げ乃至餘りあるものは之れを奪ふて同生同死しなければならぬ。六。平田和尚。天台山平田寺の普庵禪師は法を百丈の大智禪師に嗣かれた人である。師ある時に上堂して神光不昧萬古の微猷此の門により入り來つて知解を存することなしと云ふて便ち座を下られたと云ふことである。靈光は人人箇々不昧の靈光で微猷は微は善なり猷は道なりと云ふから即ち向上宗乘中の事。即ち宇宙の大道のことで、此の大道には知解分別は一切禁物であるといふことである。

第七節 類則提唱

其一 迦葉利竿

阿難尊者問迦葉云。世尊傳金襴袈裟外別傳何法。下語云。問得可始得。迦葉召阿難。下語云。日出乾坤耀。

何の道理もなく又道理に涉らぬぞ。

阿難應諾。下語云。雨降地上濕。

真直に答へられたぞ。

迦葉云倒却却門前刹竿着下語云就身打劫。

こゝは阿難は知恵第一の人にて人我の見があるほどに人我の見を踏倒せよと云はれたものぞ。

阿難大悟。瓦解氷消。

迦葉に人我の見を倒却せよと云はれてサテは我が人我の情識で金爛の袈裟を傳ふる外何の法をか傳ふると問ふたは謬りよと胸中の人我情識の劍を折つて始めて瓦解氷消したものなり。

第十六則 鏡清草裏漢

第一節 垂示

垂示云。道無横徑立者孤危。法非見聞言思迴絶。若能透過荆棘林。解開佛祖縛得箇穩密田地。諸天捧花無路。外道潛窺無門。終日行而未嘗行。終日說而未嘗說。便可自由自在。展碎啄之機。用殺活之劍。直饒恁麼更須知。有建化門中。一手擡一手搦。猶較些子。若是本分事。上且得沒交涉。作麼生是本分事。試舉看。

【讀方】 道に横徑なし、立つ者は孤危なり、法は見聞に非らず言思迴かに絶す、若し能く荆棘林を透過し、佛祖の縛を解開して箇の穩密の田地を得ば、諸天花を捧ぐるに道なく、外道潜かに窺ふに門無けん、終日行じて未だ嘗つて行せず、終日説いて未だ嘗つて説かず、便ち以つて自由自在にして碎啄の機を展べ、殺活の劍を用ふべし。直饒恁麼なるも更に須らく權化門中に一手は擡げ一手は搦ゆること有ることを知つて、猶ほ些子に較るべし、若し是れ本分事上ならば、且得沒交涉、作麼生か是れ本分の事、試に擧す看よ。

【字解】 一。立つ者は孤危なり。立つ者とは佛祖の大道、至極の公道を通る者の義、孤危とは孤は孤立危は危險など云ふ

義であるが、茲では獨立自尊と云ふ程のこと。

二。諸天花を捧ぐるに路なく。第六則の頌の評唱に故事が出て居つた。須菩提巖中に宴坐す諸天花を雨ふらして讚讃すと云ふのである。然しこれは結句須菩提の悟りが未だ穩密の田地に到りついてゐないからのことでありて。實參實究の人としては誠に慚ぶべきことである。そこで今はなに帝釋め、汝如き輩の窺知することかと云ふ意氣こみで、即ち横から見ても縦から見ても、八方上下更にぬけ目のないことである。

三。終日行して未だ曾つて行せず。終日説いて未だ曾つて説かず、釋尊が四十九年一字一説と云はれも同じことである。

四。啐啄之機。之れが一則の眼目であつて。啐は鶏が卵を温めて孵化させる時に、卵の中の子が殻を破つて出やうとして中からコッ／＼とつゝくこと、啄は別々啄々客あり門に至ると申して母鶏が中のコッ／＼と寸分違はず外からコッ／＼とつゝき破ることである。そこが啐啄同時で同一髪を入るゝの隙間もない、例を申せば彼の靈山會山八萬の大衆の前で釋迦が拈華瞬目せられた時に一會の大衆が默然として誰一人言葉を發すものもなかつたときに、迦葉獨り破顔微笑せられたと云ふことであるがこれが即ち啐啄同時と申す處である。

五。殺活之劍。活殺自在なる正宗の銘刀である。怎麼が果して作家活殺の銘劍であらう。爰は飽く迄も參究して見なければならぬ處である。

六。建化門中に。權化門云と云ふも同じことで、衆生濟度の方便門を申したものである。

七。且得沒交涉。俗に云ふヨツテモツケヌと云ふ程のことで及びもつかぬと云ふことである。

【講義】 道に横徑なし、道とは佛祖の大道であつて、この道は過去の諸佛も現在の釋迦も當來の諸佛も等しく一樣に、必ず踏まれ又ふまるべき處の道であり。又達磨も徳山も臨濟も道元も一休も白隱も皆等しく此道によつて進まれた大道である。天子も通れば乞食も通る犬も通れば狸も通

る、汽車馬車自動車大八車何も角も悉く通行るところの宇宙の大道無限の公道である。されば此道に小徑横道がある筈はない坦々たる大道洛陽に通ずで、盲目も蹇足も小供も大人も一切障りなく自由自在に通行か出来るるところの大道である。そこを古人は至道無難と申されてある。至道の大道に難澁な處があらう筈はない。汝此道を尋ねて行け必ず死の難無けんと言ふが佛祖の大道天下の公道である。立つ者は孤危なり。此大道を通るもの、宇宙の間に立つて居る者は、皆孤危獨立であつて、天上天下唯我獨尊。宇宙の間に存在する森羅萬象は何となく角となく皆獨立自尊天真爛漫で更に人天鬼畜の支配は待たぬのである。日月星辰山川草木夫れ／＼皆獨立自尊で、花は花、月は月、更に他人の助けを要せぬ、そこがそれ立者孤危の有り様である。此法は見聞に非す言思迥かに絶す、見と云ふて眼より入るに非す、聞と申して耳より聞くに非す、眼なく耳なき盲者聾者も尙よく之れを見之れを聞くこれが出来るが、偕ソハ如何なるわけであらう。言思迥かに絶す。言語思慮の及ぶ處でなく、畢竟意路不到と申すより外はない。若し能く荆棘林を透過し佛祖の縛を解開し箇の穩密の田地を得れば。凡夫の情識を以て彼れの此れのと妄想分別する所謂見聞言思は即ち大道の荆棘林であるから、此の凡夫の妄情我見倒見の荆棘林を透過し、更に八萬四千の權實半滿のと云ふ佛經祖錄の名目言句に束縛されて迷いがどうの悟りが此ふのと云ふ其の束縛を解開とトキヒライて見よ。脚跟下之れ穩密の田地であり、三世諸佛の佛母であつて。

人天の導師三界の獨尊と仰がるべきものである。四の五の分別計度をやめ、佛見法見、諸佛の言教、列祖の葛藤を掃蕩して見よ。十方沒蹤跡で何のアト方もなく只光風齊月の隱密の田地とあらはれる。隱密は自家安隱の處と申して人の知らざる處自ら知ると云ふ密々の田地。諸佛も目の付かぬ處、列祖の手の届かぬ處、隱々密々の大田地である。已に迷悟を超脱し凡聖を通りぬけて自家大安隱の處に到り付いた上はどうであらう。諸天も花を捧ぐるに路なし外道潜かに窺ふに門無し。須菩提のやうに空三昧の蹤跡もなく從つて釋梵諸天も決して窺知することは出来ぬ。天曰く我れ尊者の般若波羅密多を説くを重んず、これでは空生はまた許せぬ。すきまがある、すきまがあつて何としやう。縱横十文字一分のスキマなき沒蹤跡の處に如何として花を捧げることが出来やう。梵天帝釋も窺ふに道なし。況んや九十六種の外道輩更に窺ふことは出来ぬのである。如何に彼等が窺はんと欲しても更に窺ふべき隙間はない、そこが即ち隱密の田地である。已に此の境界に到着した上には終日行しても而も未だ曾つて行せず、終日説きても而も未だ曾つて説かず、朝な夕な寝ても醒めても行住坐臥皆之れ佛祖の大道一步一步皆是れ成等正覺の大道場であつて、彼れが道とか此れが法とかと一點痕迹の認むべきなき全く無作の境界である。ソコで行しても行せず説けとも説かず。味噌の味噌くさくなく、飴の飴くさきなし、其のアカ抜けた妙味は唯佛與佛の知見と申して實參實究の士ならでは中々解るものではない。便ち以つて自由自在にし

て啐啄の機を展べ殺活の劍を用ふべし。ヲイと喚べばハイと答へるのが啐啄同時で、米搗けたりや、搗けたりと云ふ、此の機会が得られてこそ、門下の學人を殺そうと活かそうと、迷はせうと悟らせうと只思ひの儘になり、思ふ存分にすることが出来るのである。正宗の銘刀と雖も子供が持てば怪我をする、般若無相の名刀も亦々然りて、隱密の田地無作の妙境界に到得して初めて殺活の妙手腕を振ふことが出来るのである。直饒恁麼なるも更に須らく建化門中に一手は搗げ一手は搗ること有るを知りて猶ほ些子に較るべし。然しながらたとひ前陳の處に到り得たにしても、衆生接化と云ふ段になつて見れば其機に對して揚げつ卸しつ時の宜しきを計らねばならぬことである。若し我が宗旨本分事の上ならば且得沒交涉、衲僧本分の働きとしてはそのやうなことでは及びもつかぬことである。作麼生か是れ本分の事試みに擧す看よ。然らばその本分の事とは抑も如何なるものであらう。此の公案を看よ。

第二節 本則

擧僧問鏡清學人啐請師啄無風起浪作什麼你清云還得活也無頭將錯就錯不可僧云若不活遭人怪笑柱地檢板漢清云也是草裏漢果然自領出去

【讀方】擧す、僧鏡清に問ふ、學人啐す請ふ師啄せよ。風無きに浪を起して什麼をか作さん。你許多の見解

を用いて什麼をか作さん。清云く、還つて活を得るや也た無しや割○帽を買ふに頭を相す。錯を將つて錯につく。總べて恚匿なるべからず。僧云く、若し活せずんば人に怪笑せられん相帶果す。天を撐へ地を柱ふ。機板漢。清云く、也是れ草裏の漢果然。自領出去。放過せば即ち不可。

【字解】一。風無きに涙を起して什麼をか作ん。風無きに涙を起す、此僧何やらん物有りげなり。諸人何んと好い見處ぢや。龍が居るか、鯨が居るか。

二。你許多の見解を用ひて什麼をか作さん。許多の見解は大道の荆棘林を指したもので。此、通行人の邪魔になるぞ。

三。割。割は竹の針で物を刺すことであるから、鏡清の一拶。痛いか痒いかとても云ふべきところ。

四。帽を買ふに頭を相す。鏡清御叮嚀なことである。帽を買ふに頭の寸尺を取られる相な、目通り一尺二寸かな、ドウヂヤ稱僧の眼に遠いばあるまい。

五。錯をもつて錯に就く。鏡清和尚還つて活を得るやなと言はるゝが、何を死ぬの生きるのと云ふのであるか、是れがそもゝ間違ひである。間違ひと間違ひの衝突よ。

六。總べて恚匿なるべからず。活を得るや也たなしやと云はるゝが、誰も彼も皆死人計りとも言はれまいぞ、圓悟坐下にも活漢底が有るまいものでもない。

七。相帶果。果はワザワイで、そのやうな馬鹿なことを云ふては、貴公許りが他人までまきぞへに迷惑をかけるぞ。他人に果を及ばさまいものを。

八。天を撐へ地を柱ふ。活を得るやと威嚇されたにも驚かず、人に笑はれますぞと厚顔に出かけた勢ひは實に天を撐へ地を柱ふる力があるぞ、此僧鼻孔達天と見へて厚がましいにも程がある。顔の皮一尺八寸もあらう。

九。機板漢。板を横に擔いだ男が狭い道を通る時には、前方へ進む計りで横を見ぬ者であるから、あたりに行きあたる

こと夥だしいことであるから。そこで向ふ見づの馬車馬と評したものと見へる。

一〇。果然。果してその通りであつた。

一一。自領出去。俗に言はふならお手前御自分でお持ち歸りなされと云ふ處、圓悟が鏡清に對してお前も好い加減に此んなつまらぬ僧を打ちすてたが善からふに、いつ迄相手になりて御座るぞ、お前さんも矢つ張草裏の漢の仲間入をして居られる。サテくゝ氣の毒なこと、云ふ按梅。

一二。放過しては即ち不可なり。鏡清和尚善くもまア執つてしめなされたなアと云ふ處。一説にかりそめに思ふてはならぬぞと圓悟和尚の門下後生への老婆心と見ると、取捨は見る人の見識にまかす。

第三節 本則提唱

舉僧問鏡清學人碎請師啄下語云要持虎鬚。

子碎母啄と云ふは、鳥の卵を孵化するに其卵がかへるべき時とて内より嘴をサ、グれば、其母鳥上より又嘴にてつゝ、そこで其卵破れて體生になるを子碎母啄と云ふ、互に知音したる處を碎啄同時と云ふ、それを爰へ取出して句中の方から問ふたぞ。僧の問を子碎しと云ふ方に用ひ、請ふ師啄せよと云ふを母啄と云ふ方に用いて問ふたなり。要持虎鬚は此僧一問をせう程に御答へあれと云ふ。先師下語に虎口裏横身。

清云還得活也無下語云還把鎗頭倒刺人來見機而作。

此僧の句中にあつて、知つたか知らぬかを知んとて推し返して啐啄に當て活を答へたゾ。先師下語に萬里一條鐵。猛虎當三跪坐。

僧云若不活遭三人怪笑下語云前箭輕後箭深慣戰作家。

好く云ふたぞ。先師下語に一箭中紅心。

清云也是草裡漢。下語云一手擡一手翫。

草裏漢と云ふは思ふさまに罵つて云つたぞ。衲僧の物を云ふは、カリソメニモ抑揚備る也。上は抑したやふなれども、底に褒美が有る程に擡擲が備るぞ。

第四節 本則評唱和譯

【讀方】 鏡清雪峯に承け嗣ぐ。本仁玄沙疎山太原孚の輩と同時なり。初め雪峯に見みえて旨を得、後常に啐啄の機を以て後學に開示して善能く機に應じて說法す。衆に示して云く、大凡そ行脚の人は須らく啐啄同時の眼を具し啐啄同時の用有りて方に衲僧と稱すべし。母啄せんと欲する時に子啐せざることを得ず、子啐せんと欲する時に母啄せざることを得ざるが如し。僧有り便ち出て問ふ。母啄し子啐す、和尚分上に於ひて箇の什麼邊の事をか成し得る。清云く、好箇の消息、僧云く、子啐し母啄す、學人分上に於ひて箇の什麼邊の事をか成し得る、清云く箇の面目を露は

す。所以に鏡清門下に啐啄の機あり。この僧も亦是れ他の門下の客、他家裏の事を會す。所以に此くの如く問ふ。學人啐す請ふ師啄せよと。此問洞下に之れを借事明機と謂ふ。那裏にか此の如くならん。子啐して母啄す。自然の恰好同時なり。鏡清也た好し。謂つ可し拳踢相應し心眼相照すと。便ち答へて道ふ、還りて活を得るや無しやと。其の僧也た好し亦機變を知りて一句下に賓あり主あり。照あり用あり。殺あり活あり。僧云く若し活せずんば人に怪笑せられん。清云く也た是れ草裏の漢と。一等に是れ泥に入り水に入る。鏡清妨けず惡脚手なることを、この僧既に會して恁麼に問ふ。什麼としてか却りて道ふ也た是れ草裏の漢と、所以に作家の眼目須らく是れ恁麼なるべし。擊石火の如く閃電光に似たり。構得構不得未だ喪身失命を免れず。若し恁麼ならば便ち鏡清草裏の漢と道ふことを見ん。所以に(一本此二)南院衆に示して云く、諸方只啐啄同時の眼を具して啐啄同時の用を具せずと。僧有り出で、問ふ如何なるか是れ啐啄同時の用。南院云く、作家は啐啄せず、啐啄すれば同時に失す。僧云く猶是れ學人が疑慮なり。南院云く、作麼生か是れ備か疑慮、僧云く失。南院便ち打す。其僧肯せず。院便ち起い出す。僧後に雲門の會裏に到りて前話を擧す。一僧有り云く、南院の棒に打たる耶、其僧豁然として省あり。且らく道へ意什麼の處にかある。其の僧却り回へつて南院に見みえんとす。院適已に遷化す。却りて風穴に見みえて纔に禮拜す。穴云く、是れ當時先師に啐啄同時を問ふ底の僧なること莫しや。僧云く是。穴

云く。爾當時作麼生が會す。僧云く某甲そのかみ燈影裏に行くが如くに相似たり。穴云く、爾會せり。且らく道へ是れ箇の什麼の道理ぞ。這の僧都べて來りて只道ふ、某甲當初時燈影裏に行くが如くに相似たりと。甚麼に因りてか風穴便ち他に向つて道ふ爾會せりと。後來翠巖拈して云ふ。南院然も等を帷幄に運すと雖も。爭奈せん士は曠に人稀にして知音の者少なることを。風穴拈して云く、南院ならば（此句一本に翠巖の眞に）當時他の口を開かんことを待つて劈脊便打して他を作麼生と看んと。若し此の公案を見は便ち這の僧鏡清と相見の處を見ん。諸人作麼生か他の草裏の漢と道ふを免得せん。所以に雪竇他の草裏の漢と道ふことを愛して便ち頌出す。

【字解】

- 一。鏡清。名は道愆と申した人で雪峰和尚の法を嗣いだ人であつて前則の雲門和尚とは兄弟弟子の間柄である。常に啐啄の機を以て後學に開示せられたと云い傳へて居る。
- 二。本仁禪師は高安白水院の住僧。疎山は撫州疎山の光仁禪師で共に洞山价禪師の法嗣である。玄沙名は師備太原の楊孚上座此の兩師共に雲峰義存禪師の法嗣四拾二人中の後傑である。
- 三。清。好箇の消息、ソレハ好き便宜ぢやと云ふ程のこと。
- 四。借事明機云。一本に借事問の機に作る。那裏にか此の如くならん。これを古來よりナニそふしたことがあらふかと背ざざる様に解するのは面白くない。圓悟がもしかくの如き見解をするならば人我の見をすら除いて居らぬことになる。そこで今は只下を起すの句と見て解すがよい。
- 五。拳踢相應し心眼相照す。向ふから拳を以て打つて掛れば此方も亦拳を以て應じ、足で踢れば此方亦それに應ずると云ふ按梅で、臨機應變時の宜しきに從ふと云ふ意味である。

六。實あり主あり照あり用あり殺あり活あり。之れを本則にあて、見る説があるが宜しくない。只照用殺活具足自在の處を云ふたものである。

- 七。一等には是れ泥に入り水に入る。佛々祖々齊しく皆是れ草裏の漢であるが、就中鏡清が最も勝るとの圓悟の説である。
- 八。所以に作家の眼目須らく是れ怎麼なるべし擊石火の如く閃電光の如し。人の師家となるには中々容易のことでは無い、擊石火の如く閃電光の如き眼目を持たねばならぬ、然らばその眼目とはそも怎麼なる眼目であらう。
- 九。構得構不得。凡聖迷悟都べて是れ草裏の漢で、本來凡聖もなければ迷悟染淨もない何をか凡聖と云ひ何をか迷悟染淨と云はむ。都べて是れ夢中の戲言唐人の癡言にすぎないのである。
- 一〇。南院云く作家は啐啄せず啐啄すれば同時に失す。作家に啐啄と云ふことはいらぬ、若し夫れ啐啄して見よ。作家遼天の鼻孔は失くなつてしまふことであるぞ。
- 一一。僧云く失。ソレ見たことか和尚の鼻孔を失くしてしまつた。
- 一二。燈影裏に行くが如くに相似たり。闇夜に提燈。道は悪るし。空はくもる。トボトボと埒の明くことでない。
- 一三。風穴。風穴名は延沼と申した人で南院慧開禪師の法を嗣いだ方である。

第五節 類則提唱

其一 母子啐啄

鏡清因僧問。母啄子啐於和尚分上成得箇什麼邊事。下語云。句裏呈機。舌頭有骨。

鳥の卵の孵化するに、母は外よりつゝき壊り、子は内よりつゝき破る如く、師學の間は師は一問して學者に悟らしめんとし、學者は師に一問して悟らんと思ひ、互に啐啄同時に成りたる上は何邊のことをか得たると云ふて鏡清を勘辨したぞ、啐啄同時にして用ひ得た上には何と云ふ道理も無いぞ、其何と云ふ道理も無い處を底に踏まへておいて、此一問をして鏡清を勘辨したぞ、故に句裡呈機。又舌頭有骨ぞ。

清云。好箇消息。下語云。來風深辯。勘破了也。當機觀面。

字面は好い時節ぞと云ふ也。下語は此僧の句中を鏡清の能く勘破してアツパレ好き時節の一問かなと褒めて當機觀面に好箇消息と卓上にて答話したぞ。

僧云。子啐。母啄。於學人分上。成得箇什麼邊事。下語云。前箭輕後箭深。背於藍冷於水。

前よりも又一重深く拶して見たぞ。

清云。露箇面目。下語云。開口見臍。觀面當機。何不行令。

僧が成得什麼邊事と云ひ出すから五臟六腑を見抜いて清の露箇面目と云ふたは、和殿か句中は露はれたぞと云わう爲めぞ、露箇面目と云ふたは當機觀面に開口見臍して五臟六腑を見抜いたと云ふ心ぞ。又何不行令と云ふたは、コツチの上から痒かりをかいて云ふた事ぞ、打棒か喝

かしてのけやうす處を手のびなどと云ふ心ぞ。

其二 南院示衆

南院示衆云。諸方只具啐啄同時。眼不具啐啄同時用。下語云。秤尺在手。諸人をハカツテ見た也。

有僧問云。如何是啐啄同時用。下語云。問得可始得。

南院云。作家不啐啄。啐啄同時失。無孔鐵鎚當面擲。

本分を爲人して云へり、作家不啐啄と云ふたは本分の方、啐啄同時失すと云ふたは爲人の方なり、本分上にいたつては啐啄と云ふ事もあつてこそ、無い處を失と知しめたは爲人ぞ。

僧云。猶是學人疑處。下語云。鈍鳥逆風飛。

南院云。作麼生是爾疑處。下語云。放過一着。

爾か疑處と云ほふよりも何故に打たぬぞ。打たざる程に放過一着した也。

僧云。失。下語云。一死更不再活。

南院便打。下語云。正令當行。

其僧不肯。下語云。弄物不知名。

院便起出。下語云。何不_レ行_レ令。

僧後到_ニ雲門會裏_ニ舉_ニ前話_ニ有_ニ一僧_ニ云。南院棒折那。下語云。傍人有眼。

好_ク云ふたぞ。エライ。

其僧豁然有_レ省。下語云。瓦解氷消。

且道意在_ニ什麼處_ニ。其僧却回見_ニ南院院_ニ適己遷化_ス。却見_ニ風穴_ニ纔禮拜_ス。

穴云。莫_レ是_ニ當時問_ニ先師_ニ啐啄同時底_ニ僧麼_ニ。僧云。是_ニ穴云_ニ爾當時什麼

生會。下語云。捉鱉見肘。

僧云。某甲當初時。如_ニ燈影裏行_ニ相似_ス。下語云。萬里一條鐵。

昏き處を行けば足に物がさはるぞ。今色相を截斷して本分一枚に見れば燈影裏を行くが如くキラリとかけきらる物がなほ。末悟の時は萬里。悟て後は一條鐵なり。

穴云。爾會也。下語云。車轅不推。

先づさうぢやと直に答へたなり、現成ぞ。

且道是箇什麼道理。這僧都來只道。某甲當初時如_ニ燈影裏行_ニ相似_ス。

因_ニ甚麼_ニ風穴便向他道_ニ爾會也_ニ。後來翠巖拈云。南院雖_ニ然_ニ運_ニ籌_ニ帷幄_ニ爭奈_ニ土曠_ニ人稀_ニ知音者少_ニ。風穴拈云。南院當時待_ニ他_ニ開口_ニ劈脊_ニ便打_ニ

看他什麼生。

句辨無し。

第六節 頌

古佛有家風。言猶在耳。千古榜樣。對揚遭_ニ貶_ニ剝_ニ鼻孔_ニ爲什麼_ニ却在_ニ山僧手裏_ニ。八棒子

母不相知。却_ニ有_ニ啐啄_ニ天然_ニ。是誰_ニ同_ニ啐_ニ啄_ニ且_ニ莫_ニ錯_ニ認_ニ啄_ニ覺_ニ在_ニ第二頭_ニ。猶_ニ在_ニ殼_ニ

何不出。重_ニ遭_ニ撲_ニ錯_ニ便_ニ打_ニ兩重_ニ公案_ニ。天下_ニ衲僧_ニ徒_ニ名_ニ逸_ニ放_ニ過_ニ了_ニ也_ニ。不_ニ須_ニ舉_ニ起_ニ還_ニ有_ニ名_ニ還_ニ頭_ニ來_ニ。重_ニ遭_ニ撲_ニ錯_ニ便_ニ打_ニ兩重_ニ公案_ニ。天下_ニ衲僧_ニ徒_ニ名_ニ逸_ニ放_ニ過_ニ了_ニ也_ニ。若_ニ名_ニ還_ニ得_ニ也_ニ。是_ニ草裏_ニ漢_ニ。

千古萬古黑漫漫。填溝塞壑無人會。

【讀方】古佛家風有り言猶耳に在り。千古の榜樣。釋迦老子を誘ふこと莫んば好し。對揚貶剝に遭ふ鼻孔什麼としてか却りて山僧の手裡に在る。八棒十三に對す。爾作麼生。一着を放過す。便ち打つ。子母相知らず既に相知らず什麼としてか却りて啐啄天然ある。是れ誰か同じく啐啄す百雜碎。老婆心切。且らく錯て認むること莫れ。啄すれば覺す什麼と道ふぞ。第二頭に落在す。猶殼に在り何ぞ出頭し來らざる。重ねて撲に遭ふ錯。便ち打す。

兩重公案。三重四重し了れり。天下の衲僧徒らに名還す放過了也。須らく舉起すべからず。還りて名還し得る底ありや。若し名還し得ば也。是れ草裏漢。千古萬古黑漫漫。溝に填ち壑に塞る人の會するなし。

【字解】一。言猶耳に在り。古佛の字に着けたもので、釋尊以來四天の四七居士の二三。祖師たちの貶剝のやりかたはド

コでか聞いた様だか、諸人何と聞き覺へはるか。

二。千古の榜樣。昔しより參禪學道のための好い手本がある。弘法が道風か。ハテ諸人様に依て瓢箪畫くなよ。

三。釋迦老子を謗する莫くんば好し。雪竇知つた風に云やるか。口がすべつたのではないかのふ。一責公あり出て、曰く、辯士停止。

四。鼻孔什麼としてか却りて山僧が手裡に在る。古佛の鼻孔皆山僧の手裡にありて殺活自在。諸人ドヤしたものとぞと聞悟の吹法螺で。諸人の鼻孔ソレ山僧がセンネツつたか痛いか痒いかと聞悟脱刺の活手段である。

五。八棒十三に對す。八棒も十三棒も皆支那の昔の治罪法であるが、それを借りて雪竇が一語で此の公案を頌出したことを譏笑したものである。嚴しく十三に酬ゆる様に打て呉れ様かと云ふて、ソラ又一ツとピツシヤリ打つた。痛いか痒いか。それはとに角此れが碧巖窟の家風で佛祖をも許さぬ活手段である。

六。爾作麼生。貴様たち此んな脱刺に遭ふたらどうするつもりであるか。三十六計逃ぐるに如かずか。ハハハ。イヤ吾等は日本男子で候てな偉い〜と稱揚する。

七。一着を放過す。也た是れ草裏の漢なと云ふ位の脱刺では、未だ〜手緩い放過のしかたである。

八。便ち打す。これが聞悟のやり方である。

九。既に相知らず什麼としてか却つて啐啄の天然ある。此下語異本に既不相知爲什麼却啐啄と果然との二ツニなりて居るが、何れにしても宜しい。今の着語では如何にも天然の妙契ぢやと云ふところであるが、異本のにすると。子母啐啄相知らずそれも自悟自得であらうぞと云ふ按梅で果然の一語に言思不可量底の意を含めたものである。

一〇。百雜碎。ピリツケンおのの斧破りと云ふ處で一切悉く只一打ちに打ち摧いた。

一一。老婆心切。然り乍ら如何にも御親切なこと。啐の啄のと面倒なことを好くお氣の屈かせられたこと。

一二。且らく錯つて認むること莫れ。諸人何やら物ありそうなが、錯つて認むるなよ。木杭が鬼頭かハテ何物ぞ。

一三。什麼と道ふぞ。前に誰れか啐啄すと云い乍ら今また啄すれば覺すと云ふ自語衝突を告めたもの。

一四。第二頭に落在す。啐だの啄ぢやの云はれば好いに、色々云ふからいかぬ。

一五。何ぞ出頭し來らざる。ナセ殺を飛び出さぬか。

一六。錯。それは見込違ひであらう。鏡清の錯か、雪竇の錯か、此僧の錯か、ハタ聞悟の錯か。ソレは兎もあれ。

一七。便ち打す。ナグレ〜と云ふ處。

一八。兩重公案。啄覺たの猶在殻ぢやの重遣撲ぢやの色々に云ふから。モリ讀めそうな者ぢやが。此奴悟りの悪い。

一九。三重四重し了れり。啄いたり撲つたり踏んだり蹴たり。如何にも丁寧な〜とぢやが。それにまだわからぬのか。此の鈍物奴。

二〇。放過了也。雪竇手ヌルイ、打ちやつてなげ。

二一。舉起すべからず。悟邊の取り沙汰、聞くも嫌である、幾ら言ふても駄目であるから。ソノ儘にしてうちやつて置けと云ふ。

二二。還りて名遊し得る底ありや。名を付けたり象どつたり、聞悟坐下にもソレ底の者があるかノウ。

二三。若し名遊し得るも也た之れ草裏の漢。元來之れ名遊し得べきものでないに。ソレを犬の猫の丸い四角いのと、イヤ

ハヤどれも、これも草裏の漢で見苦しいことである。

二四。千古萬古黑漫漫。是れが見へぬとは、ナニ暗いとな、目撞くな鼻撞くなよ、夫れ踏かはずしてコケルなよと懐中

電氣をさしむける。

二五。溝に填め壑に塞いで人の會するなし。アブナイこと〜そのやうにしてもまだ解からぬかのふ。

【講義】古佛家風あり。古佛と云へば遠くは三世の諸佛、近くは釋尊歷代の祖師を指したもので。佛出世してよりこのかた幾多無數の宗師家があるが、その宗師家には人々各自の家風と云ふもの

がありて西天の四七唐土の二三皆夫れく佛祖家傳の風習があり虎の卷がある。對揚貶剝に遭ふ。對揚は人に對して宗風を擧揚することであつて、師匠と學人が問答商量すると云ふ時には閃電光擊石火の機會で其の間に一髪を容るべき隙間もないことである。彼の釋尊が御誕生遊ばした時に前後左右すること七步して、直ちに天地を指して天上下唯我獨尊と仰せられたと云ふことであるが、これがそもく公案の始まりである。處で釋迦と云ふいたづら者が世に出て、多くの人を迷はせにけりと云ふ古歌もあつて、釋迦と云ふ毛唐人のためにどの位多くの人が迷惑をして居るかも知れぬ。それで若し釋迦の生れた當時に雲門や雪竇のやうな大慈悲者が居つたならば、天下公衆のため。萬民安堵のためと云ふので、必ずや其の乳臭の一皇子に一棒を與へて其の屍を犬にでも與へて呉れたに相違ない。さすれば犬は食を得て天下太平。吾々は又佛だの法だの迷だの悟だのとイラヌ七面倒なこともなくて天下は至極泰平無事。萬民悉く安堵したことであらうに、是等の諸老が居られなかつたのは實に残念なことであつた。これは決して山僧が勝手に云ふのではない。雲門大師がチャンと云ふて居るので、それを圖悟が此の釋迦と雲門との對揚對剝に遭ふと云ふ例に評唱に引いて居られるから篤と見るが宜しい。偕貶剝と云ふは貶は春秋一字を以つて褒貶をなすと云ふ貶であるからオトシメンシルことである。剝は追剝など云ふ言葉に使ふ文字であるからハグと云ふことで、俗に云ふ面の皮を引きむくなど、云ふ意味である。これが即ち

古佛の家風で、誠に迷惑千萬な家風であるけれども、今更何ともして見やうがない。只エライ家風もあつたものぢや、丸るで八公か馬公の家風のやうであると云ふ丈りのことで、泣いても笑ふても致し方がない。今爰で鏡清和尚が此問題を提起して僧に對揚して還りて活を得るや也た無しやと貶剝したも矢張りこの家風を實行したものにすぎないのである。そこで圖悟が言猶耳にあり、ドウヤラ聞き覺へがあるぞ、如何でも雲山會上か熊耳山上かで聞いたやうなと云ふて居られる。子母相知らず是れ誰れか同じく啐啄す。一體に子啐し母啄すと云ふが、母は印殼の中に居る子の境界を知る筈なく、子亦印殼の外に居る母の境界を知りそふな筈がない。然るを子母相啐啄すとはいかなこと、母の啄を致すこと能はず、母の啄すと云ふと雖も子の啐を致す能はずで、子母全く吾れ關せず焉であるに、それを相啐啄すとは之れ誰のなす處であらう。この誰の一字が千金の價値で爰の字眼であつて。是れ天然の妙契自然の妙用であれば、諸人此志だにあれば此約束差はずして同時俱時に啐啄する。師が弟子を悟らせることも出來ねば、弟子が師に悟らせてもらふことも出來ぬ。只々お互いに自己の本分を天然自然に實行する迄のことである。啄すれば覺す、コレ鏡清が還りて活を得るやと啄すれば、此僧活せずんば人に怪笑せられんと覺した處で、此れが啐啄同時の時節である。啐啄同時ではあるが、既に鏡清の還りて活を得るやの啄に應じて、此僧活せずんば人に怪笑せられんと覺したから印殼を飛び出したことかと思ふたに、サテいかなこと、

尙穀の中にヒヨ／＼して居る。此れが即ち活と云ふ活に取り附いてゆはゆる句下に死在したものである。だから自由の轉處を得ることが出来ないのである。そこで圓悟は閃電火中に縋索を辨して此僧猶悟邊に滞り頂墮することを見透して尙穀に在りと評して居られる。然るにサスガは鏡清和尚、爰を許さずに、也た是れ草裏の漢と此僧を撲下して手に物を持たされぬところ、こゝが即ち耕夫の手を驅り飢人の食を奪ふて悟邊を轉却せしめると云ふところで、重ねて撲に遭ふと云ふがそれである。撲は打撲の撲でウツと云ふことであるが、玆では啄の字の代りに用いたものであるからツ、クと云ふ意味に見ればよい。雖が穀を出得ないから母の親切で又ツ、クのである。是の一句が實に鏡清和尚の大慈大悲なところで、這裏に到りては此僧許りではない、盡大地の人多くは此の悟邊の穀中に滞在して轉路がない、そこで天下の衲僧徒らに名逸すと云はれてある。多くの參禪の人たちが彼れの此のと色々な名をつけたり、貌を想像したりして眞實徹底し得るものは甚だ稀れである。悟と云ふも徒らに名逸、迷と云ふも徒らに名逸、五位、四喝、三玄四料簡皆是れ徒らに名逸、雪竇圓悟かくの如く世話せられるも又徒らに名逸、山僧がいらぬ碧巖の講義など、憂き身をやつすも是れ皆徒らに名逸するのである。實は佛の出世、達磨の西來、一千七百の應機等皆之れ徒らに名逸するものである。ヨロヅノコト、タハゴトヒガゴトマコトアルコトナシ、ハテ倍困つたもの、路邊に聳立して路側地藏を氣取るより他はあるまい。時に一群の鳥あり西山より來る

云くアホウアホウ。

第七節 頌評唱和譯

【讀方】古佛家風あり雪竇一句に頌了れり。凡そ是れ出頭し來るに直に是れ近傍し得ず。若し近傍し着せば則ち萬里崖州、纔に出頭し來るも便ち是れ落草、直饒七縱八橫なるも一捏を消せず。雪竇道く古佛家風あり是れ如今恁麼のみならず、釋迦老子初め生下し來りて、一手は天を指し一手は地を指し、四方を目顧して云く、天上天下唯我獨尊と。雲門道く、我れ當時若し見ましかば一棒に打殺して狗子に與へて喫却せしめん。貴くは天下太平を要んと。此の如く方に酬得して格好なり。所以に啐啄の機旨是れ古佛の家風、若し此道に達せば便ち一拳に黃鶴樓を拳倒し一踢に鸚鵡州を踢翻す。大火聚の如し之に近くときは則ち面門を燎却す。太阿の劍の如し之れを擬する時は則ち喪身失命せむ。此箇唯是れ透脱して大解脱を得るもの方に能く此の如し。苟或いは源に迷ひ句に滞らば決定這般の構ふことを得じ。對揚貶刺に遭ふ。則ち是れ一賓一主一問一答問答の處に於てす、便ち貶刺あり之れを對揚貶刺に遭ふと謂ふ。雪竇深く此事を知る、所以に只兩句下に向つて頌了る。末後は只是れ落草にして爾が爲めに注破す、子母相知せず是れ誰れか同く啐啄する。母啄すと雖も子の啐を致すこと能はず、子啐すと雖も母の啄を致すこと能はず、各相知

せず。啐啄の時に當りて是れ誰か同く啐啄する、若し恁麼に會せば、也た雪竇最後の句を出で得ざることあり、何が故ぞ。見ずや香嚴道く、子啐し母啄す子覺して殼無し、子母俱に忘して縁に應じて錯らず、同道唱和、妙玄獨脚、雪竇妨げず落草なることを。葛藤を打して道く、啄。此一字鏡清の答へて還りて活を得るや也た無しやと道ふことを頷す。覺す。這僧若し活せずんば人に怪笑せられんと道ふことを頷す。什麼としてか雪竇却りて便ち道ふ、猶殼に在りと。雪竇石火光中に向つて縑素を別ち、閃電機裏に端倪を辨ず、鏡清道く、也た是れ草裏の漢と、雪竇道く重ねて撲に遭ふと、この難處の些子はなり、鏡清道く也た是れ草裏の漢と、喚で鏡清人の眼睛を換ふと作し得んや。這の句是れ猶殼に在ること莫しや、且得沒交涉、那裏にか此の如くならん、若し會得せば天下を繞ぐりて行脚すとも恩を報する分あらん。山僧が恁麼の説話。也た是れ草裏の漢。天下の衲僧徒らに名邈す、誰か是れ名邈せざる者ぞ。這裏に到りて雪竇自ら名邈し出さず、却りて更に他の天下の衲僧を累はず。且らく道へ鏡清作麼生か是れ這の僧の爲めにする處ぞ。天下の衲僧跳り出です。

- 【字解】一。直に是れ近傍し得ず。出得處の一見識具へたものも、此の家風には依り付くことは出来ぬ。あたかも彼の獅子王の寶座に踞するが如きものである。
- 二。萬里崖州。遠くして遠い。猿兒あり云く。アノ月取りて。
- 三。一捏を消せず。捏は捉の俗字で、兒于終日握而手不脱と申して、捉也擊也とある、取るに足らぬと云ふ程のこと。

- 四。是れ如今恁麼のみに非る也。今始めたことではない吾家の家風、先代相承の虎の巻であつて、それには確かな證據がある。
- 五。我當時若し見ましかば等。雲門大師が我れ釋迦出誕當時若し居合はしたならば、一棒下に打殺して狗子に食はせうものな、出世この方唯我獨尊ぢやの、坐禪修行だの、迷の悟のといらぬ平地に波瀾を起して。誠に迷惑千萬なことである。それ故に若し其の當時に打殺し去れば狗子は肥へ天下は又泰平で有つたらうものを誠に残念なことをしたと云はれたのである。
- 六。爾得して格好なり。是れが佛有りてより以來の家風であつて、云はば先祖傳來の虎の巻である。是れ圓悟の眼目ぞ。
- 七。便ち一拳に黃鶴樓を拳倒し一踢に鷓鴣州を踢翻すべし。之れは白雲守端禪師の黃檗三頓の棒を頷せられる前二句であつて是非得失を捨却するの義である。
- 八。大火聚の如く之れに近く時は則ち面門を煉却す。太阿の劍の如し之れを擬する時は則ち喪身失命す。少しも指をつけることはならぬ、又、手を指すことも成らぬ。若し近寄つて見よ忽ちにして面門に大火傷を蒙りウカツに持てば命にかいはることが出来るぞ。
- 九。或は源に迷ひ句に滯らば決定して這般の説話に構ふことを得ず。悟や迷の源を見ゆるがために情識分別を以て有、空、是非の論議をなし、徒らに先人の文字言句の上に搜しまはつたならば之れ所謂句中に死在したもので。それこそ源に迷ふたと申すものである。古人も曹溪鏡裏塵埃を絶すと申されてあるが、塵埃は即ち思慮分別である。松は千年の齡を保てど葛藤の爲めには枯れると云ふことであるが、如何にも其の通りであつて却つて我が身を危くするの基となるであらう。
- 一〇。母啄すと雖も子の啐を致す能はず。子啐すと雖も母の啄を致す能はず。之れは妙契せざるの時であるが、母の大慈悲心と子の母を慕ふ誠心とが、兩々共鳴して心眼相照し全く妙契する様になつたときが即ち啐啄同時でありて。彼の阿彌陀經に執持名號一心不亂とあるは此の味ひを申したものである。
- 一一。子啐し母啄す、子覺して殼無し。春に至れば霜雪自ら融けて百の花が笑ひ初める、親の大慈悲が徹底し、又子の思ひ

が違したならば、兩々相混して障礙もなければ隔てもない。それが妙々玄々の處である。然るに雪竇が却りて便ち猶般に在りと云はれたのは何の意味合であらう。須らく参究して見なければならぬ。

- 一一。端倪^{たんげい}。猶し始終と云ふが如きぞ。
- 一二。この難處の些^ち是れなり。雪竇が前に最後の句と云はれたのはこの句のことである。

第八節 類則提唱（其二）

其三 世尊七步

釋迦老子、初生下來、一手^ハ指^シ天、一手^ハ指^ス地、目^ニ顧^シ四方^ヲ云、天上天下唯我獨尊。雲門道、我當初時若見、一棒打殺與^ニ狗子^ニ喫^ク却^ク。下語云。上無^ク攀^ル仰^ル。下語云。佛祖咬^レ不破。

皆人は佛見法見を起し、殊勝に候ふなどと云ふて惑亂せらるゝ程に蓋覆^{がいふく}勦絶^{せんぜつ}して仰せられたぞ。先師云く、雲門の斯様に仰せられたは、如來に孤負して仰せられた様なれども、左様のことでは無いぞ、如來の尊意と雲門の意と別ならざるぞ。貴^{たか}斐^は天下太平^{てんたへい}と是れ迄は雲門の批判の語なり。

狗亦不^レ食。下語云。佛祖咬^レ不破。

勦絶^{せんぜつ}すれば本分が露はるゝぞ。狗亦不^レ食と云ふたも本分を云ふたなり。佛祖も咬^レ不破と本分の上を云ふた也、狗亦不食と云ふ語は雪竇の批判の語なり。又釋迦老子初生下來乃至唯我獨尊下語に拈來天下與人看。佛性を指して唯我獨尊と云ふたと辨するぞ。取捨は心のまゝ也。

其四 妙玄獨脚

同道唱和妙玄獨脚。下語云。萬里一條鐵。

物を唱へ和するぢや、道と同じうするぢや、知音ぢやと云ふは盡く相の上のとぞ。又妙玄と云ふは、本分の思量是非に涉らず、言語道斷な處を云ふたぞ。又獨脚と云ふも本分の用に立たぬ處を云ふぞ。足一つでは何の用にもたぬものぞ。畢竟本分と相とを云ふた程に萬里一條鐵ぞ。又無孔鐵鎚ともつくるぞ。語話に云く、先師の時、田樂に下語せしむ。代語に云く、同道唱和妙玄獨脚、田樂には似やうたる下語ぞ、唱和は田樂の歌舞なり、獨脚は田樂は一足にて舞ふものなるゆへぞ。

第十七則 香林西來意

第一節 垂示

垂示云。斬釘截鐵。始可爲本分。宗師。避箭限刀。焉能爲通方。作者。針割不入處。則且置。白浪滔天。時如何。試舉看。

【讀方】 釘を斬り鐵を截つて、始めて本分の宗旨たる可し、箭を避け刀を隈くれば焉んぞ能く通方の作者たらん、釣割不入の處は則ち且らく置く、白浪滔天の時如何、試みに舉す看よ。

【字解】 一。針割不入の處。針を割すべき隙間のない深密の場合と云ふこと。
二。白浪滔天の時。山なす許りの怒濤、天地もゆるがむ許りの大波と云ふのであるから、大議論の湧き上りた時のことを形容したものである。

【講義】 釘を斬り鐵を截つて始めて本分の宗師たるべし。斬釘截鐵と鋭利なる刀劍の如何なる堅き物に遭ふても豆腐を斬るが如く、右に左にスラリスラリと斬れる様子、其れと同じ様に如何に困難な問題に出合ふても自由自在に樂々と斬り抜け得られる底の手段のあるのを斬釘截鐵の機と云ふと申すことであるが、この機略があつて始めて本分の宗師禪僧の作略と云ふことが出来るのである。西天唐土師資相承の金剛王寶劍と云ふのかこれで、斯くてこそ達磨門下の本分を全ふし

た宗師天下の名師三界の獨尊と申し得るのである。若し箭を避け刀に隈れば馬んぞ能く通方の作者と爲さん。戦いに望んで巧に敵を避、縦横無盡に刀の下を潜ると云ふは伶俐は伶俐に違いないが未だ通方の作者とは云はれない。通方は百方に通達すると云ふことで、事に當りて自由自在を得て、十力四無畏を具し三明六通を具すと云ふ處である。作者とは唐宋の頃盛んに詩文が行はれた時、格別に秀逸なる人のことを作家とか作者だの稱したもので、隈は廻と同韻で廻避と熟するかからカクレルと云ふことである。針割不入の處は則ち且く置く。師學共に針を割すべき隙間も無い手段有る底は云ふ迄もないこと、白浪滔天の時如何。權化門中爲人爲世白浪滔天と大議論の湧き上りた時は何んと働いたものであらう。試みに擧す看よ。

第二節 本則

舉僧問香林如何是祖師西來意 大有人疑着猶 林云坐久成勞 魚行水濁鳥

狗口好作家眼 目鋸解稱鑑

【讀方】 僧香林に問ふ、如何なるか是れ祖師西來意大いに人の疑着するありは猶ほ這箇の消息あること有り。

林云く坐久成勞魚行けば水濁り鳥飛べば毛を落す。狗口を合取せば好し。作家の眼目。鋸解稱鑑。

【字解】 一。大に人の疑着するあり。此僧計りではない。天下の衲僧都べて疑着し、問ひ來り問ひ去り東奔西走さぞ急が

しいことであらう。

二。猶ほ這箇の消息あること有り。達磨既に遷化された事と存じて居るに、如何なるか是れ祖師西來意と今亦音ツレがある。嵩山の少林寺に遷化したとやら、隻履を携へて西天に歸られたとやら、片岡山で聖德皇と話されたとやら、サテモ異なることがあるもの。志公の所謂る觀音大士傳「佛心印」かな。然れば此の音ツレは未來永却絶へることはあるまい。諸人好い訪客ぞ、何と面會したか、よく聞いたか好いぞと云ふ處。

三。魚行けば水濁り鳥飛べば毛を落す。香林跡が見へぬと申されながら、坐久成勞イヤ長談議で御迷惑なことでありたと申さるるが。矢張り跡が見へますぞ。魚行水濁、水が濁つた様ぢや、鳥飛毛落、美しい毛が落ち申した。諸人何と見へたかな。ドレ蟲眼鏡を。

四。狗口を合取せば好し。餘計なことを吠へるな、蠢しいぞ、早ふ犬の口を塞げと云ふ按梅。

五。作家の眼目。シカシさすがは香林である。作家の眼目なくして、何として如是の名答が出やうぞと讚美する。

六。鋸解稱鑑。中々難解の答話である。天下の衲僧、打ても控へても埒は明くまい。此の公案の鐵鏡頭、誰か齒が通るかや。

第三節 本則提唱

僧問香林如何是祖師西來意。下語云。道什麼。此句秘典也。

西來意の上に何と道はふ事も有りてこそ、故に道什麼こそと也。西來意の上に道はふすことのある様に句中を以て問をば何と道はふぞと也。先師の下語に句裏呈機。

林云座久成勞。下語云。魚行水濁。鳥飛毛落。大火聚裏弄毛塵。

成勞とは真直に云ふやうなれども、句中に當て成勞と云ふた也、弄するは句中なり、三句の體調備つた也。又雨中看果日、火聚酌清泉とも、魚行水濁鳥飛毛落、意旨如何とも、月日風清とも着けるぞ。面は現成なり、句中が備るなり、又西來意を問ふ程に、達磨の九年面壁は坐久成勞した物よと真直に答へた方もあり、衲僧の物を云ふはカリソメニモ句中備るぞ。

第四節 本則評唱和譯

【讀方】 香林道く坐久成勞と、還りて會すや若し會得せば百草頭上に干戈を罷却せん。若し也た會せずんば伏して處分を聽け、古人行脚し交を結び友を擇び同行道伴と爲して撥草瞻風す。是の時雲門化を廣南に旺んにす。香林得々として蜀を出す。鵝湖鏡清と同時なり。先づ湖南の報慈に參し、後に方に雲門の會下に至る。侍者と作ることを十八年。雲門の處に在りて親しく得親しく聞く。他悟の時晚しと雖も妨げじ是れ大根機なることを。雲門の左右に居ること十八年。雲門常に只遠侍者と喚ぶ。纔に應諾すれば、門云く是れ什麼ぞ。香林當時也た下語して見解を呈す。精魂を弄して終に相契はず。一日忽ち云く我れ會せりと。門の云く、何ぞ向上に道ひ將ち來たらざる。又住すること三年。雲門室中に大機辨を垂るゝこと多半は他の遠侍者の隨處に入作せんが爲めなり。雲門凡そ一言半句ある都べて遠侍者の處に收在す。香林後に蜀に歸る。初め導江の水晶宮に

住す。後に青城の香林に住す。智門の祚和尚は本と浙人なり。盛に香林の道化を聞き、特に來りて蜀に入りて參禮す。祚は乃ち雪竇の師なり。雲門人を接すること無數なりと雖も、當代道行者只香林の一派最も盛なり。川に歸りて住院すること四十年八十歳にして方に遷化す、嘗て云く我れ四十年方に打成一片すと、凡そ衆に示して云く、太凡行脚して知識を參尋せんには眼を帶して行んことを要す。須らく細素を分ち淺深を看て始めて得べし。先づ須らく志を立つべし。而も釋迦老子因地に在ませし時一言一念を發するに皆是れ志を立つ。後來僧問ふ、如何なるか是れ室內一盞の燈。林云く、三人龜を證して鼈となす。又問ふ、如何なるか是れ衲衣下の事。林云く、臘月の火山を燒くと。古來祖師の意に答ふこと甚多し。唯香林の此の一則、天下の人の舌頭を坐斷す。爾が計較して道理を作す處無からむ。僧問ふ如何なるか是れ祖師西來の意。林云く、坐久成勞。謂つべし言無味句無味と。無味の談人口を塞斷す。爾が氣を出すに處なし。見んと要せば便ち見よ。若し見ずんば切に忌む解會を作すことを。香林嘗つて作家に遇ひ來れり。所以に雲門の手段有りて三句の體調あり。人多く錯つて會して道ふ。祖師西來して九年面壁す。豈に是れ坐久成勞にあらずやと。什麼の巴鼻か有らん。他の古人大自在を得る處を見ず。他は是れ脚實地を踏んで許多の佛法知見道理なし。時に臨んで應用す。所謂る法は法に隨つて行し、法幢は處に隨つて建立す。雪竇風に因つて火を吹いて傍に一箇半箇を指出す。

【字解】一。香林 名は澄遠と申した方で雲門大師の法を嗣いだ人で、雲門大師六十一人の高足中の後傑である。
 二。坐久成勞 イヤ長談議で御迷惑なことであつた。サソ足が痛からふと云ふ處である。何のことはない。久しく坐れば足が痛い。眼は横鼻は堅、人人誰しも知れることなれども、それを識らぬから面白い。オイ太郎鼻は何の爲めにあるぞ、鼻汁垂れる爲めか、嗅ぐためか、將亦いきをするためか。知つて居るかな。此和尚面白いことを言ふで、ハテ何がおかしい。困つた小僧だ。坐久の這裏却りて祖師意ありや。若し喚んで西來意の答話杯と云は、ヘチマの皮のダン袋。破れ糞子赤湯卷であるぞ。

三。鷓湖 信州鷓湖山の智字禪師は福州の人で雪峯義存禪師の法を嗣いだ人である。
 四。湖南の報慈に參す。報慈は潭州報慈寺の藏師匡化禪師で、龍牙山居遁禪師の法嗣である。
 五。精魂を弄して終に相契はず。何事も時節到來を待つより外はない。
 六。雲門凡そ一言一句ある都べて遠侍者の處に收在す。古人の爲法親切なること凡そ是くの如しである。
 七。雲門人を接する無數なりと雖も。韶州雲門山の文偃禪師は法を嗣いだ龍象丈でも六十一人在つたと云ふことで、景德錄卷廿二には韶州白雲祥和尙以下廿五人、卷廿三に南嶽般若啓柔禪師以下三十六人の傳が見へてある。
 八。川に歸りて住院すること四十年八十歳にして方に遷化する。川は西川省で導江縣迎祥寺天王院に住して居られた。有名な導江の水晶宮と云ふのが即ちそれである。青城の香林院は益州の青城にある寺である。
 九。打成一片すと。行住坐臥皆是れ一片である。
 一〇。室内一盞の燈。眞實智慧にたとへたものである。般若の眞實は禪定より生ずと申して、本來具有と、元より實智を持つて生れて居るけれども禪定靜慮がなければ風前の燈火のやうに業風のために吹き消されてしまふ。そこで禪定を修するるのである。那伽の大定に入りて見よ、室内一盞の燈はいかに業風に吹かれても未來永劫決してふき消されることはない。那伽の大定八風吹けども動せぬと云ふが此の燈火である。

- 一一。三人龜を證して驚となす。三人よれば文殊の智慧と云ふから三人共に驚ぢやと云へば龜もスツボンになつてしまふ。そこで諸人取り違へるなよ、鼻で息きすることを忘れてはならぬぞと古人も云はれてある。
- 一二。暖月の火山を焼。衣下の事だとして別に替つたことはない。十二月にもなれば百姓共がワラビを取る爲めに山を焼くまでのことである。
- 一三。謂つべし言無味句無味。無味の處人口を塞断す。イヤ長談議サソ御ツカレであつたらうなどと、借も言無味句無味のことである。何のアヤドリもない。何のいるあいなか其のアヤドリのない處に千金の價がある。月に今昔の區別はないか圓々皎々の明月、月やは物を思はする哉で、そこに月の妙味はるのである。
- 一四。見んと要せば便ち見よ、見らるゝ程に必ず無孔の鐵鎚と丸呑みするなよ。消化が悪るい、お腹をいためるぞ、儼然とよくかみしめて食へよ。
- 一五。三句の體調あり。應病與藥隨宜隨機で學人の機に依りて立つることであるか。然もその中に自づと三句の體調がとのふて居る。
- 一六。風に因りて火を吹いて傍らに一箇半箇を指出す。力を勞せずして其功や大なりと申すから、幸ひに好便にまかせ四句に類はすほどに。好く味ふて見よ。

第五節 類則提唱

其一 室内一盞燈

香林 因僧問。如何是室内一盞燈。下語云。句裏藏錦。
 室内一盞燈と問ふたは、傳燈を問ふやら、眞實の燈を問ふやら、賊の上から試みて問ふた程に

知られぬぞ。故に句裏に鋒を藏したるものよ。

林云。三人證龜成鼈。下語云。有問有答。

三人龜を證して鼈を成すとは、三ヶ國の者がよりにて、錢龜ちや龜ちや鼈ちやと云ふて争ひたる事なり。又證龜作鼈と露れたる龜をクソ龜ちやと云ふたは一盞の燈と問ふた處を勘破して、答へたるぞ。本分の傳燈を問ふやら、眞實の燈を問ふやら、争ふて問ふた程に知られぬ也。

其二 臘月火燒山

香林因僧問。如何是袷衣下事。林云。臘月火燒山。下語云。聖賢三世橫貫十方。

授して云く意旨如何。月白風清。三句の面で現成なり、何の道理もないぞ。唐には臘月廿五日に火を燒くことがあるぞ。故にマツスグに云ふたは現成なり。又マツスグに見た中に自然に句中あり。又燒き掃ふ處を本分に用ひた方もあり、三句體調なれども面が現成ぞ。又下語に魚行水濁、意旨如何、月白風清、是れも同じ面ぞ。自然に句中あり、然れども面が現成ちや程に月白風清なり。先師の沙汰に三人證龜成鼈と、坐久成勞と、臘月火燒山とは類則にはあみたれども、少しづつちがひあり、參して知るべしと云云。袷衣下事とは袷僧家の事と云ふ心ぞ。答話はそれには取

りあはぬぞ。

第六節 頌

一箇兩箇千萬箇。何不成而行之。如麻似脫却。籠頭卸三角。馱從今日去。應須離。還休得也。未左轉右轉。隨後來影響響響。便打。紫胡要打。劉鐵磨。此令。賊過後。張弓。便打。噯。

【讀方】一箇兩箇千萬箇。何ぞ依つて之れを行せざる。麻の如く葉に似たり。群を作し隊を作して什麼をか作さん。籠頭を脱却し角馱を卸す。今日より去りて應に須らく離々落々たるべし。還りて體得すや也。未だしや。左轉右轉後に隨ひ來らば猶自ら放不下。影々響々。便ち打す。紫胡劉鐵磨を打せんことを要す。山僧は柱杖子を打打して更には是の令を行はず。賊過ぎて後弓を張る。便ち打す。噯。

【字解】一。何ぞ依つて之れを行せざる。獨りも他人は無いから、諸人踏み込んで行じて見よ、如法に修行だにすれば次郎も太郎も彌迦も達磨も其の間に少しの變りもないから、眞實に修行して、次郎佛太郎佛になれと云ふ。

二。麻の如く粟の如し。百千萬億いくらでもある。

三。群を作し隊を作して什麼をか作さん。どん栗の長くらべて、何程大勢でも役には立たぬ。

四。今日より去りて應に須らく離々落々たるべし。諸人元來何も重荷はない。洒落安穩自由自在の境界よ。

五。還りて體得するや也。未だしや。開悟坐下の者共、何と安穩なのか。好く氣を附ける。

六。猶自ら放不下。左轉右轉と吾れと動轉して擔ひ廻る重荷であるから、皆是れ自業自得と申すより外はないが、マダマダ卸し得ないとはサテモ不慙な事と云ふ。

七。影々響々。他人の後尻を追ふてあるくものがあると思へて。影に影が重なり、足音に足音が響いて居るが、影に響き響き弄るとは、サテモ輕薄者よ鈍物よと云ふ。

八。便ち打す。ピツシヤリと打つて、是れて性根が入りたか。

九。山僧柱杖を拗折して更に此の命を行はず。山僧とは圓悟自身のこと、雪竇打つたをすなどと手續いことを申されるが、此の圓悟は柱杖がねぢ折れたらば是非もないこと、手に棒さへあれば打つぞ打つぞ、打たいでどうすると云ふ按梅。

一〇。賊過ぎて後弓を張る。盗人過ぎての弓で、折角ながら後れました。

一一。便ち打す。又候ピツシヤリ打つた。

一二。喚。あぶないこと。一足ちがひであつた。諸人近寄りて喪身失命するな。

【講義】一箇兩箇千萬箇籠頭を脱却し角駄を卸す。誰れでも坐久成勞で尻が痛いに相違ない。眼は見るもの。耳は聴くものとは。太郎次郎も翁婆も男も女も知つて居るには違ひないが、世の中には又不思議な事もあればあるもの。うつむいて股間から後をのぞいて見よ、犬も猫も草も木も乃至草木家屋一切さかしまに見へる。何んと面白いではないか、見様によつては物が倒しまに見へるから面白い。諸人どうしたことぞ。眼は物を見、耳は聲を聴く、此の知れたことを知れば天下泰平文句はなく、佛見法見、出世西來の籠頭角駄、何にもなくて、洒々落々の境界であるが、洒々落々の境界も見様に依りては倒しまになる。それを顛倒の妄見と申す。サア一度顛倒の妄見を起して見よ。眼で聲を聞き、耳で物を見て、世の中はソレソソ大騒ぎである。此れ皆知れたことを知らぬからの妄見よ。然るに次郎でも太郎でも、お梅でもお松でも知れたことを知つて見

よ、如何なるか是れ祖師西來意。林云坐久成勞を悟り得て見よ。皆悉く籠頭を脱却し角駄を卸して自由自在の身となりうるぞ、一箇兩箇と云ふは一人二人で、千萬箇は千萬人と云ふことである。籠頭は馬の鼻先きを束縛して置くもので、角駄は馬に負はせる荷物のことである。諸人如何なるか是れ祖師西來の意。坐久成勞を悟り得て見よ、馬の茫々たる原野を右に左に北に南に、自由自在勝手氣儘に走せあるき飛び廻るが如く、總べての煩悶苦痛を脱却し得て、洒々落々明月清風、何と氣持の好いことであるぞ。然らば其の坐久成勞とは面倒なことか。むつかしいことかと云ふに、長く坐れば足が痛い眼で見耳で聴き、夜が明ければ太陽が出で、日が暮るれば月が出ると云ふ迄のこと、次郎太郎誰しも知つて居ることである。如法に修行さへすれば、次郎も太郎も釋迦も達磨も更々區別はない。差別は無い。諸人何と合點が参つたか。参つたならば修行をせよやと雪竇が參禪の者を戒められたものである。左轉右轉後に隨い來らば紫胡劉鐵磨を打たんことを要す。左轉右轉と申して種々様々なことに氣迷ひをして、誰れが斯う云ふたの、何の經論にはどう云ふてあるのと、言句上に轉々して、ウロタへ廻り他人の尻跡を追ひあるく様では、何れ程學問をしても如何程修行をしても所詮何のたしにもなるものでない。ヤレ右へヤレ左へと轉じ廻るウロタへ者は所詮輕薄者か鈍物であるから、彼の紫胡和尚が劉鐵磨を打ちなぐつた様に一棒を加へてやるより外はあるまいと雪竇甚深の大慈大悲である。紫胡は傳燈錄には子胡と書いて

即ち衢州子胡巖の利蹤和尚で即ち南泉和尚の法を嗣いだ人である。劉鐵磨を打ちなぐつた因縁は次下の評唱に出てあるからそれを見れば宜しい。

第七節 頌評唱和譯

【讀方】 雪竇直下に擊石火の如く閃電光に似たり。拶出して放つて備をして見せしむ。聊か擧着するを聞いて便ち會して始めて得ん。也た妨げず是れ他の屋裏の兒孫にして方に能く恁麼に道ふことを。若し能く直下に便ち恁麼に會し去らば妨げじ奇特なることを。一箇兩箇千萬箇籠頭を脱却し角駄を卸ろす。灑々落々として生死の所染を被らす。聖凡清解の所縛を被らす。上攀仰なく下己躬を絶してひとへに他の香林雪竇の如くに相似たり、何ぞ止只是九千萬箇のみならん。直に得たり盡大地の人悉皆此の如く、前佛後佛も亦悉く皆此の如きことを。苟も或は言句中に於いて解會を作さば便ち紫胡の劉鐵磨を打することを要するに似て相似たり。其の實は纔に擧せば聲に和して便ち打せん。紫胡南泉に參す、趙州岑大蟲と同參なり。時に劉鐵磨偽山の下に在りて庵を卓す。諸方皆何を奈何ともせず。一日紫胡得々として去つて訪て云く（一本此文を、一日紫胡を訪ひ得々として去る胡云く左轉右轉に作る）「便ち是れ劉鐵磨なること莫んや否や、磨云 不敢胡云く」（一本便ち以下を削る）左轉か右轉か、磨云く和尚顛倒すること莫れ。胡聲に和して便ち打

す。香林這の僧の如何なるか是れ祖師西來意と問ふに答へて却りて云く、坐久成勞と。若し恁麼に會得せば左轉右轉後に隨ひ來るなり。且らく道へ雪竇此くの如く頌出する意作麼生「無事にし好し試みに請ふ擧す看よ」（一本此句なし）

【字解】 一。聊か擧着するを聞く。之れ情識に落させまい爲めに申したものである。

二。妨げじ是れ他の屋裏の兒孫にして方に能く恁麼に道ふことを。雪竇も雲門の兒孫なればこそ。こゝ云ふやうに云へたものである。

三。劉鐵磨。鐵磨は俗に云ふシヨ名で。機鋒峻峻、何でも角でもかみひしぐと云ふ辯舌達者の尼であつたから劉氏の鐵磨と云ふので、劉鐵磨と申したのである。

四。紫胡南泉に參す。紫胡の二字を景德錄には子湖となつて居る。馬祖道一の法嗣で有名なる南泉普願禪師の法嗣一十七人の中で其人ありとて知られたる衢州子胡巖の利蹤禪師のことである。生れば澶州の人で姓に周氏と申した。幽州開元寺に出家して、南泉の室に入り衢子の馬蹄山に抵りて庵を結んで居られたと云ふことである。景德錄に一尼あり到參す。師曰く汝は是れ劉鐵磨なる莫らんや否や。尼曰く不敢。師曰く左轉右轉か。尼曰く和尚顛倒する莫れ。師便ち打すと是の因縁が見へてある。

五。趙州。無字の公案を以て有名なる趙州觀音院の從諗禪師のこと、南泉和尚の法を嗣いだ人である。

六。岑大蟲。湖南長沙の景岑招賢大師のこと、南泉の法を嗣いだ方である。

七。不敢。どう致しましてと云ふ程のことである。

八。左轉か右轉か。右左何を迂路々々してあるくぞと云ふこと。

九。胡、聲に和して便ち打つ。尼の顛倒すること莫れと云ふ言のまだ畢らぬ中にヒシヤリと擲られたので、サスガの豪

の者劉鐵磨も逆振を食はされてこれには参つたであらう。

一〇。此くの如く頷出する意作塵生。雪寶何の爲めに此の頷を作られたのであらう。爰味つて見るべき處である。

一一。無事にして好し試みに請ふ擧す看よ。之れは垂示がぬけたものか或は又何かの錯誤であらう。

第八節 類則提唱 (其二)

其三 劉鐵磨菴

時劉鐵磨在ニ僞山下卓庵。諸方皆不奈何他。一日紫胡得々去訪云。
莫便是劉鐵磨否。下語云。劈頭劈面。

鐵磨ちやと云ふことを知りすまいて、ソチは鐵磨では候はぬかと云ふたは恐ろしいぞ、面をさく様な機鋒ぞ。

磨云不敢。下語云。魚行水濁鳥飛毛落。

不敢は日本の世話にイヤサモンウラハヌと云ふ心で。イヤサモンウラハヌと底はうけがうた方ぞ、鐵磨で候と直スグに云はたれども自然に句中が備つたぞ。

胡云左轉右轉。下語云。提提見肘。劈箭急。

鐵磨が不敢と云ふたは句中を心得て云ふたか、心得ずして云ふたか見届けやうために云ふた

ぞ。又ヒツツメテ問ふたぞ。古抄に云く左轉右轉は磨の字に就いて云ふたぞ。左へまはすか右へ廻はすかとなり。先師云く、必しも磨にチナンで云ひたるに非ず。左轉右轉と云ふは、衲僧の一處に滞らず、自由自在に振り舞ふ處を云ふて褒めた方なり。

磨云。和尚莫轉倒。下語云。隨語轉。何不令行。

左轉か右轉かと云ふは、左めぐり右めぐりかと問ふた。それで大喝するか合を行すべき處を莫轉倒と云ふたは不足なり、ツマリこゝでは合を行せうする處なるを、言句に涉つたは隨語轉した者よ。鐵磨が句中を知らぬのでは無いけれども、手のびな處を見かけてした下語ぞ。

胡和聲便打。下語云。頭正尾正。正令當行。

打たいて叶はぬ處。

第十八則 國師塔樣

第一節 本則提唱

舉肅宗皇帝宗本此誤問忠國師百年後所須何物預攝待痒。果然起模畫樣。老國師云。與老僧作箇無縫塔。把不帝曰。請師塔樣好與國師良久云。會麼。得指東直得口似區擔。帝云。不會。教伊滿口含霜却較些子。國師云。吾有付法弟子耽源。却請此事。請詔問之。分額直不。莫搦胡人好。放過一着。本國師遷化後。認定盤星。帝詔。耽源問此意如何。在子承父業去也。落源云。湘之南潭之北。也是把不住。兩兩合雪竇着語云。獨掌不浪鳴。一盲引衆盲。果然隨語中有黃金充一國。地無這箇消息。是誰雪竇着語云。山形拄杖子。拗折了也。也無影樹下。合同船。聞黎道什麼。雪竇着語云。海晏河清滔天。猶較些子。瑠璃殿上無知識。雪竇着語云。拈了也。賊過後張弓。

【讀方】舉す、肅宗皇帝忠國師に問ふ。百年の後須むる所何物ぞ。預め攝いて痒を待つ。果然として模を起し様を畫く。老々大々として這の去就を作す。東を指して西と作すべからず。國師云く老僧が與めに箇の無縫塔を作れ。把不住。帝曰く請ふ師の塔樣好し一箇を與ふるに。國師良久して云く會すや。因に停まつて

智を長す。直に得たり東を指し西を割し南を將て北をすことを。直に得たり口の區擔に似たるを。帝云く不ふ會かい 頼らいいに不ふ會かいに遭あふ。當時更に一抄を與へて伊をして滿口に霜を含ませしめ却りて些子に較れり。國師云く吾に付法の弟子耽源といふものあり却つて此の事を諳んず、請ふ詔して之れを問へ 頼いに禪床を掀倒せざるに値ふ。何ぞ他に本分の草料を與へざる。人を探胡する莫んば好し。一着を放過す。國師遷化之後惜しむべし。果然として定盤星を認む、帝耽源に詔して此の意如何と問ふ 子は父の業を承げ去る。也た第二頭第三頭に落在す。源云く湘の南潭の北也た是れ把不住。兩々三々什麼をか作す。半開半合。雪竇著語して云く獨掌浪りに鳴らず 一盲衆盲を引く。果然として語に隨て解を生ず。邪に隨ひ惡を逐ふて什麼をか作さん。中に黄金有り一國に充つ上は是れ天にして下は是れ地。這箇の消息無し。是れは誰が分上の事ぞ。雪竇著語して云く山形の柱杖子拗折し了れり。也た是れ模を起し様を劃す。無影樹下の合同船祖師裏し了れり。開梨什麼と道ふぞ 雪竇著語して云く海晏河清洪波浩渺白浪滔天。猶些子に較れり。瑠璃殿上に智識無し咄雪竇著語して云く拈了也賊過きて後弓を張る。言猶は耳に在り。

- 【字解】 一、預め振て痒を待つ。 代宗餘りに取り越した世話のやき方ではありませぬか。痒ゆくもない處を今から掻いて置いてなになさる。百年の後と云わうよりも即今所須何物ぞとナセ參究せられぬのである。却つて忠國師が泣かれるであらう。
- 二、果然として模を起し様を畫く。 幾ら參禪したと申されてもドウセ本物であるまいと思ふて居つたが、果して模を起し様を畫く有りふれた形式だけのことであつた。猿の人真似のやうなものにはなりませんまい。
- 三、老々大々として這の去就をなす。 四百餘州に君臨して一天萬乘十善の君と仰がるし身でありながら、此場に臨んでは

このやうな始末では、誠にお氣の毒なことである。

- 四、東を指して西と作すべからず。 東は東、西は西である。國師必ず取り違へたことを申さるゝな。大事でござるぞ。
- 五、老僧が爲めに箇の無縫塔を作れ。 年はとられてもサスガは麒麟である。直に本分の事を以て答へられた。石塔を建てよとは云はれぬ、銅像を作れとは云はれぬ。丸くも四角くも長くも短くもない無縫の寶塔を建てよと云ふ遺言である。無縫は縫い目のないことであるから即ち無形の塔無象の塔である。ドウぞ拙僧が死んだれば無象無形の塔を建てよと云ふ注文と見へる。無象無形の塔は是れを法界塔と申して、上三十三天を貫き十方法界涯に滿ち滿ちたる大塔である。宇宙の萬象之れ其の儘に嚴嚴たる大無縫塔である。斯く申す吾等お互ひの本體本性、花となりては紅に咲き柳となりては綠に芽出す、それが其儘無縫の大塔である。これが即ち忠國師の那伽の大定ぞ、萬世に湧りて燦として光を放ち、盡十方無碍光と云ふ寶塔である。

- 六、把不住。 ハツキリ申されぬが、取り留めて見やうのない大塔である。
- 七、請ふ師の塔様。 代宗皇帝、スカカスお望みの無縫塔と云ふは如何なる象で御坐るぞ。
- 八、好し一割を與ふるに。 圓悟云く、代宗好し注文の聞きとるである。ヨク聽いて居られよ。
- 九、良久しく云く。 良久はやゝヒサシウしてと讀んで暫時黙して萬機を停止せるの形である。こゝ暫くが虎が出るか龍が出るかの好いおたのしみである。
- 一〇、囚に停まつて智を長す。 監獄は囚人の好き學校で、罪人が懲役に遣られてから益々惡智が増長して前一層の惡人になつた。是れ專へに多年の修養の功と申すものであらう。國師も良久しくして居る中に中々利口になられた。
- 一一、直に得たり東を指し西を割し南を將て北を作すことを。 ソレ見たことが良久しくして云く曾すや杯と子供歎をやられる。これと云ふも國師が代宗の爲めにノツヒキナラヌ様に問ひ詰められたものであるから。案の狀、何にやら出放題を言ひ出された。如何にも東西の分ちが無さ相で見苦しいことである。

- 一一。直ちに得たり口の區據に似たるを。區據は支那の勞働者が荷物に背負ふとき背中へあてる木のことで、日本で申せばへの字形と云ふやうなことであるから即ち何か云いたくとも云はれないで口をもがくして居ることである。
- 一二。頼ひに不會に遭ふ。代宗の不會で、國師は大仕合せである。若し代宗が會せられたならば、それこそ國師は非常な迷惑なことであつたであらうに。不會で仕合、好くも答へられたと云ふ。
- 一三。當時更に一擲を與へて伊をして満口に霜を含ませしめば却りて些子に較れり。代宗爰で若し一擲して國師に一泡ふかせうなら面白かつたらふに、一寸手ぬかりせられたは惜しいことである。
- 一四。頼ひに禪床を掀倒せざるに値ふ。代宗に若し峻嶮の機あらば禪牀を推倒して臨終の國師に痛い目を見せられるであつたらふに、代宗には此の手段のなかつたのは實に國師のお仕合せであつた。
- 一五。何ぞ他に自分の草料を與へざる。國師も誠に手ぬるい今はの思ひ出に國師らしい手際を見せられたらばよいものを。
- 一六。人を搽胡する莫くんば好し。搽胡は人を穢すことで無禮なことをすると云ふことであるから。弟子の耽源にお問ひなされなど、人を馬鹿にしたやり方である。
- 一七。一着を放過す。一手伸ばして弟子にゆづられたのは誠に手ぬるいやり方である。
- 一八。惜しむべし。國師の遷化とは借も残念なことである。ア、彼の子が居たらばノッ。今更他人の厄介にはなるまいものなと云ふ。
- 一九。果然錯つて定盤星を認む。定盤星は權衡の目のことで、品の輕重次第によつて目方がかほるを知らずに同じ目計りを見て居る愚かさな定盤星を認むと云ふそうである。果して代宗はムダ目留めて算へ廻つて居られる。耽源と云へば耽源でなければならぬやうに思ふて居るとはサテ／＼馬鹿正直なことである。
- 二〇。子は父の業を承け去る。親の物は子の物と云ふから、代宗好い尋れ處である。善く法門の外護となりて法をして末法萬年の後迄も盛へるやうにせられるが何よりの忠國師への供養であると云ふて、圓悟が坐下の諸人會すや否、人々箇々父の子でないものは無いぞ。と云はれる。

- 二一。也た第二頭第三頭に落在す。頭の字は軽く見て代宗、意氣地のないこと貴公も堂々たる男子ではないか。
- 二二。湘の南潭の北。盡十方方所はない。都て之れ無縫塔である。開花の前、落葉の後。春は嵐山秋は高尾、何處でも好い何時でも好い。
- 二三。也た是れ把不住。又しても取り留めのないことを云はれる。耽源サスガは親譲りの腕前である。
- 二四。兩々三々什麼をかなす。國師耽源代宗、二人も三人も何のことぢやと云ふ。
- 二五。半開半合。分つたやうな分らぬ様なドツツつかすの言分である。花は盛りを月は隈なきをのみ見るものかは、サスガは兼好、甘いことを言ひやるの。
- 二六。獨掌涙りに鳴らす。隻手の聲は聞こへぬか、盡十方、太郎も次郎も知つたこと、私の打つたは狗子の尻であるに今鳴いたは頭の方である。ハテサテ次郎は次郎の分を打つたに、太郎さんの頭が鳴くとは、
- 二七。一盲衆盲を引く。一犬虚に吠へ萬犬實を傳ふと申して。ドレモ／＼盲目の伴引き、向ふも見へず、足下も見へずサテ／＼危ないことである。
- 二八。果然誤に隨つて解を生ず。到頭口車に載せられた。如何にも危ない外交のやり方である。
- 二九。邪に隨ひ惡を逐ふて什麼を自作す。先づ第一に國師が無縫塔を作れなど、云ふから惡ひ、それに其の弟子の耽源が、湘南潭北だの餘計なことを云ひおまけに雪寶が相繼を打つ、實に由斷がならぬ。何れ同じ穴の狐であらう。
- 三〇。中に黄金あり一國に充つ。これは無縫塔の材料を申したものである。借問す中とは是れ湘南か潭北か、將亦盡法界涯天地に滿つか。
- 三一。上は是れ天にして下は是れ地。此のセヤ辛い世に黄金あり一國に滿つなどとは未だ承らぬか、一國とは天地の間かの、ハタ或ひは天地その物かのと云ふ。

- 三三。這箇の消息なし。一國に黄金が充ちて居るなどとサテモ珍らしい。未だ聞いたこともない。
- 三四。是れ誰か分上の事ぞ。誰のことか、全く人の事ではあるまい。何んと諸人胸に手を置いてトクと思案して見よ。
- 三五。山形の杖子。佛祖の刀斧の當らぬ杖子で全くの掘出し物である。猿が持ったか天狗が持ったか。眼は横鼻は堅、いくら受用してもつくることはなからう。
- 三六。拗折し了れり。其の杖をへっ折つてやるものを、圍悟ソコ鼻孔かの。
- 三七。也是れ機を起し様を盡く。山形の杖子と云ふも、やつぱり形式のみであつて、うちの坊やの銃剣その儘であらう。
- 三八。無影樹下の合同船。日輪正午に當るときには都へての樹木等にも全く影がなくなる。此れば無限の時間を太陽正中の意味を以て言ひ顯はしたものである。合同船は乗り合船であるから老若男女貴賤上下皆悉く同一の船に合ひ乗りで此れが即ち大乘であり一乗である。無始劫來未來永劫無限の空間を貫通して六趣四生は一切衆生を悉く漏らさず載せると云ふ大悲大願の願であると諺ふたものである。

- 三九。祖師喪し了れり。忠國師は疾の昔に遷化せられたと思ふたに、ハテサテ乗合船の中に居らるゝとは、諸人尋ねて來やれ。ソレ向ふに笑ふて御坐る、はてさて御機嫌である。
- 四〇。開裂什麼と云ふぞ。耽源何と仰せられる。乗り合ひ船などと誠に危いこと。難船でも致しはせぬかな。
- 四一。海晏河清。誠に好いお天氣で實に安全な航海である。天下泰平、上下位を亂さず、井を掘て飲み田を耕やし食ふ。吾皇無爲の徳で天下目出度く始まることの嬉しさよ。
- 四二。洪波浩渺白浪滔天。イヤ恐ろしい悪い天氣である。雪竇海晏河清なと云はるゝも船が今にも沈没しさうであると云ふて、向上の死水には龍は棲むまいと評する。
- 四三。猶些子に較たれり。安全無事の處が少し許り本分に近いぞと云ふ。
- 四四。瑠璃殿上に知識なし。大悲大願の合同船の到着した彼岸には、七寶合成の内外玲瓏玉の如き臺があつて、極樂とも

淨土とも安養とも涅槃とも申すとのことであるが、その瑠璃殿上に有り難そうな金ピカの人が御座ると思ふたに豈計らんや、佛も菩薩も聲聞も緣覺も智人も愚人も、聖者も凡夫も男も女も何にも居らぬとは、サテモ可怪なことであると云ふ。

四五。咄。之れ圍悟いらぬことは云ふまいものぞ。間拔野郎奴、テトたしなみやれと云ふ。

四六。拈了也。耽源が無縫塔を建立造營し終りた程に、諸人目をむいて見やれ。ソレ七寶合成内外映徹實にまばい計りの寶塔であらうと云ふ。

四七。賊過ぎて後弓を張る。由良之助遅かりしぞ、湘南潭北で早や拈了してしまつた。

四八。言猶ほ耳に在り。然し此の拈了の一語、何時迄たつても忘れられぬ、明かに耳の底に残つて居るやうで誠に有り難いことである。

第二節 本則提唱

肅宗皇帝問忠國師。百年後所須何物。下語云。問得可三始得。好問。事起可ナリ。隨分と思ふて問ふたぞ。百年の後所須何物ぞ。根本の上に何物を用いやうぞ。又、好問。和尚御遷化の後は何物を用いやうぞとは殊勝な問ひ也。先師下語に無風起浪。

國師云。與老僧一作箇無縫塔。下語云。鐵丸無縫塔。無縫塔とは本分を指して云ふたぞ。鐵丸無縫塔とは、これも本分の上から云ふた也、皇帝の